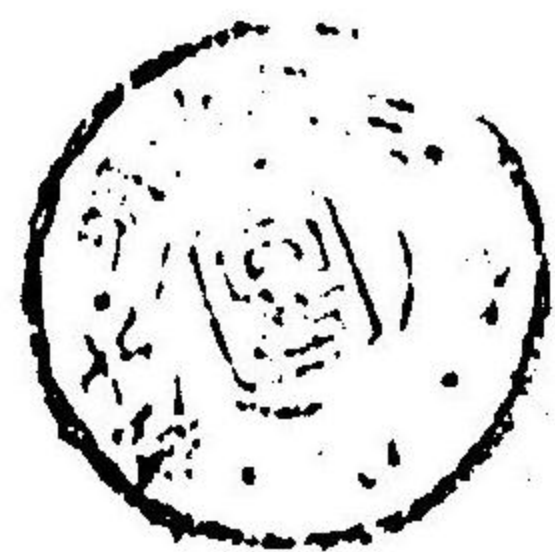


新規作肥後木履
娼妓誠用化夜櫻
真景佳江月
邯鄲回轉自白浪
科戶風元寇軍記
新模樣沖洲網島
秀傍幻日記
人命犯

新編
才一輯
完
亦編
亦編
亦編
亦編
後編



勝 諺 藏 著 作

脚 本

新 規 作 肥 後 木 履

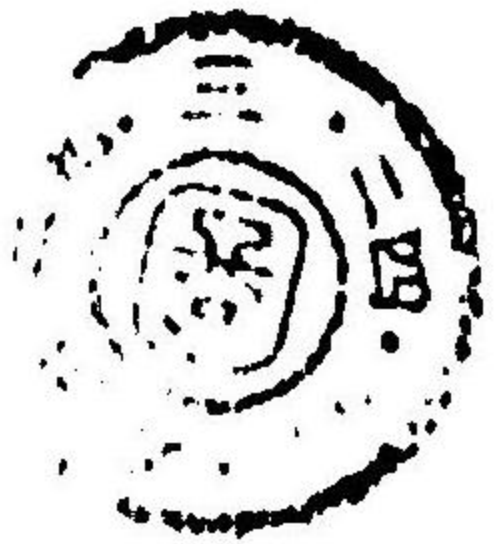
前 編

脚演劇新規作肥後木履

場

割

- 大序 洛東清水寺の場
- 二幕目 熊本城外物見の場
- 三幕目 松田秀之進屋敷の場
矢阪源治兵衛邸の場
- 四幕目 和泉屋五郎八内の場
松田秀之進暗殺の場
- 五幕目 道頓堀筑後芝居前の場
同 日本橋南詰の場
- 六幕目 三田魚籃下妻借家の場
品川縣桔梗屋の場
高輪大木戸の場
- 八幕目 月岡刑部邸の場
千引縫之助邸の場
月岡大廣間の場
- 大結 熊本馬場先跡討の場



演劇新規作肥後木履前編

大序 (洛東清水寺の場 粟田口武内座敷の場)

役名

一向	井善九郎	一源	氏太兵衛
一武内	加賀之助	一深	谷逸平
一姫	松江	一吉	住伊八
一役	割惣治	一米	澤大六
一履	荷持平助	一月	岡刑部
一手	分勘治	一仕	出し三人
一同	吉松	一下	男一人
一茶店	姫お竹		

造物向ふ大高清水の舞臺上手寄り石段上手へ寄せ音羽瀧の番刺櫻の釣枝櫻の立木茶屋床
 机出茶屋都て洛東清水の模様歌双盤にて蒸明く(ト三人の仕出し茶を吞み居る茶店姫お竹
 立かゝり)竹モシお茶のお熱いのと換升せうかいなア ○イエ大事ムり升せぬ □モッ

さうして居られ升せぬ △又今の様な事があつてはなり升ぬから 竹何う被成升たいな
 ア □今此三人が奥の院の方へ行かうと思ふと酔つた四人の侍が △右へ寄れば右へ来る
 故逃けて來升したが ○又愛等へ來たら面倒じやア往き升せう 竹マア宜しうムり升わ
 いなア (ト三人下手へ遣入る向ふより月岡刑部野袴権先大小更けたる拵らへ銀松江家老姫
 の拵らへにて跡より履小物平助向掛を擔ぎ出て來り) 刑部コレ松江あれが清水寺の觀世音
 あれなるが音羽の龍じやぞへ 松はんに國元とは事替り暇はしい事でムんせわいなア 平
 何に致せ向ふの茶店迄参り升せうか 刑左様であつた 松マア参り升せうわいなア (ト本
 舞臺へ來り床机に掛る) 竹是はようお出で被成升たお茶を上り被成升せ 刑イヤ拵やる
 な 平時にお嬢様一昨日有馬の御入湯も済み升た故旦那様をおせがみ被成てお國元へは御
 内々の都見物殊に此お天氣の上都合で此様なお樂みな事はムり升まいなア 松はんに此様
 お嬉しい事はないわいなア 刑マア夫と申も此刑部年七十に近ければ是迄一日御奉に意
 た事なき故此度殿より老を養ふため有馬入浴として五十日間お暇賜はり身の保養は致たな
 れど其方越での勤めに餘儀なくも未だ餘日のあるを幸ひ國元へは内々に仲間小者は歸國
 致させて幸ひ履ひし平助を小者となし連参るも若しや國元の者共に出合ふ時は面倒故然し
 長居は恐れの謄明朝必ず出立致せば今日一日が眞の愉快じや 松此樂しみをするに附け紳

さんも共々なら此上もない事なれど、刑ヤア姉のお澤は先達で中川隆助方へ遣す約束致したれば最良夫、のある身も同然自儘に他出もなり難く殊に留主居も是をければ何うも是非に及ばぬ。平「モロ旦那様向ふから来る二人速れは何ふやらお屋敷様のお印の様にムリ升るなア。刑「サ、おれは確かに屋敷の印。平「お忍びの事なれば、竹「コレ私しは水を汲んで來升せうか。平「茶代ハ愛へ。竹「有難うムリ升。松「ろんならどいさん。刑「娘來やれ。ト石段を上り道入るお竹は橋掛りへ道入る向ふより泉屋子分勤続出で来るを。竹「松「サ、イ、ト呼びながら出て直ぐに本舞臺へ來り。真「コレ勘公友達交合のないマア待つてくれねへなア。真「サ、吉公何をろんなにぐすくしているのだ。真「ハハ馬鹿をいふなへ手めへは今取の上へ上つた新造ッ子を見やうと思やアがつて夫で急いで來やがつたのだらう。真「知れた事よ今度來たといふのもおらが屋敷から九條殿へお興入れになつて居る御座申さかいふお方の許へ歳々極まつた上己の御祝儀の送物今年はお侍が四人で何時も親分が來る處を名代で役割の惣治兄貴が來たが九條殿から例年のお返し物はあしたの事だから今日一日が本間の骨休みよ。真「イヤあんまり骨休みでもねへ今年の裁料衆は御指南役の矢阪源次兵衛權の門弟衆斗り故九條殿へのお使ひを鼻にかけ意地の悪るゝ事ばつかりおらはどんなに癪に障たか知れやアしねへ。真「イヤ夫りや手めへ斗りじやねへが惣治兄があの様にいふもんだ

から我慢して居るのだ。四人「サア行ふか。ト石段へ上り道入る行違へて。四人「うしやがれ。ト源氏太兵衛國侍の拵らへ深谷挽平同しく拵らへにて松江を中に挟み同しく吉住伊八米澤大六同と拵らへにて平助を中に挟みながら出て來り。太兵衛「コリヤ娘何んで身共違を嘲弄致した。逸「此分では。四人「許ささぬぞ。松「なんで私があなた方へ對し升て。太「コリヤヤイ娘身共違が上の茶店で鮎の足をかぶつて居つたを下部と兩人笑ひ居つたで。四人「あらうがな。松「なんのマア左様な事を致し升せうアノ笑ひ升たは○サ、夫れハ見事な機が此平助のつぶりの上へ散りかゝり升た故でムリ升る。平「ほんにお嬢様の仰しやる通りなんでおあなた方へ其様な失禮な事が致され升るものか夫れは大方思ひ違ひでムリ升せう程に何うぞ御勘辨を。伊八「黙り居らう下素下郎の分際でろんな言譯け役にやア立たぬは。太「コリヤ身共違を誰だと思ふ肥後の。伊八「アイヤこんな奴等にいふても詮ない事。太「コリヤ親と同道致してゐるか定めて連れもあるであらう。逸「此分にては勘辨ならぬ然し夫も詠みと歌。太「身共等四人の酌を致せば無事に宅迄送つて遣るのだ。伊八「貴様の心たつた一つ。四人「ウントいへく。松「御免被成て下さり升せ。平「申旦那様方ソリヤあんまり御無理ではムリ升ぬかれつととした武家様のお嬢様然かも。松「ア、コレ平助殿滅多な事を。太兵衛「コリヤお面白い相手が武家なら望む處だ。松「サ、エ、伊「サア何處の藩中で名前は何んだ。四人

「ぬかさぬ内は勅辨ぢらぬわへ 松「コリヤモウ何うも」ト逃に掛るを宜しく逸平取らへる」
 平「モレお懐様をどうなさる 伊八「エ、何を邪魔を」ト平助を散々に打つ勅藏吉松出掛り居
 て双方へ割つて這入り」勅藏、吉松「モレ且那方向うした者でムリ升る 勘「モウよいじやアム
 り升せぬか 本「ヤアわいらは國からの小者だな何故あつて 四人「止めるのだ 勘「ヤア見れ
 ば年の行かぬ娘に荷持を相手にわつばさつば失禮ながら御人駄が棄らうかどお止め申升た
 真「響にさへ女子供と云じやアムり升せんかどうぞ貸けてやつて下さり升せ 本「ヤア仲間
 小者の分際で挨拶など、は失敬千萬 勘「どつと、愛を 四人「うせ居らう 勘「幾ら大小ぼつ
 こんでも弱い女や役にも立たねへ荷持をどらへ夫がなんで手柄になる 真「じてへ此間から
 難に障つて居るのだ二本指は焼豆腐でもさして居らアねへ 本「ヤアいはして置けば出る儘
 の通旨 大六「其分では 四人「差置かねど 四人「どうともしろへ 四人「サ、斯うしてやるは
 「トどつちやの立廻りになりト、勅藏吉松倒るゝを四人して散々打撃なし向人は虫の息に
 なる 本「エ、口程にもねへこいつら二人 四人「單その事に「ト柄に手を掛けるを」 吟ア、
 モレ夫はわんざり 四人「お情けない 本「ヤア入らざる止り立て何うだ今の平の内と見たか
 尋元はといへば手前等から起つた事だ 伊八「こいつ等が不便なら四人が申た言葉を開くか
 真「エ、汚ららしい 四人「うんなら屋敷へ引すり行かうか 四人「サア夫は 四人「但し住處を

申聞けるか 四人「サアくくく 本「エ、面倒だ「ト四人引立てに掛る向井善九郎浪人の拵
 らへにて此の軀を見て居て四人を見事に投げる 真「コリヤお侍高が婦人小者をばなんと威
 さるゝか 本「ヤア實否も糺さずなせ身共等を 真「イヤ手込みには致さねど最前からの体た
 らく武士のなすべき所行じやムらぬ 四人「なんと 真「如何に酒興の上とついへどあまりと
 申せば乱暴狼藉見るに見かねて仲殺致した 真「ヤアいはして置けば出る儘の通旨 伊「コ
 ヤヤイ不禮な奴等故引立て行くを邪魔さらす 本「じたいうぬは 四人「いつくの者だ 真「サ
 、天地の間を横行なす天竺浪人常時三條粟田口武内加賀之助が食客たる向井善九郎と申者
 遠恨と思へば何時なり共お相手致さう 本「サ、いふ迄もない其返報「ト四人切て掛るを鉄
 扇にて立廻りト、太刀を打落し打すゆる」 四人「アイ、アイ、アイ、アイ、アイ、アイ、アイ、アイ、
 立歸れ 勘「有難うムリ升る是で私等の顔が立つたといふものだ 真「さまア見ヤアがれか
 らつちには強くつても強い者に掛つちやア丸で蟻蛙の様だ 四人「アモ思々しい 勘「へい且
 那何れ御禮には参じ升るがアイ、アイ、 四人「且那大きに有難うムリ升「ト體の痛むこなし
 にて兩人下子へ這入る善九郎四人を一々襟袂を取て引起し」 真「サアお侍早う屋敷へお歸
 り被成い 本「サ、かへらんでなんと致さふ 四人「只今歸る處でムるは〇思へばく 真「なん
 と 四人「イヤなんとも申さぬ」ト體の痛むこなしにて四人這入る」 真「馬鹿げた奴もあるも

のじやなアハ、「ト松江平助前へ出て」松「せきた様かは存じ升せぬが危い處をお助け被下
 なんとお禮を申升せうやら 四人「有難う存じ升る」ト松江勢九郎に見とれるこなし」平「イ
 ヤ其お禮には及ばぬ事いつくの御息女かは存せぬ共長居致せば又重ねて斯様な奴があらう
 も斗られねばヤ、早うお歸りあれ○是はしたりお歸へりあれと申に 松「ハイ 平「拙者どて
 もお暇申さう 刑部「アイヤ御涙人暫くお待ち下され」ト此以前より刑部出掛り居て此時下
 へをり」刑「一言お禮の申度し先づお待ち下さり升ふ 松「ナ、お前は父上 平「旦那様 平
 其元が是なる婦人の御親父でムるか 刑「如何にも拙者が娘でムるが○既に一大事にも及ぶ
 べき所不難に納まりしは偏に貴所のお蔭有難う存じ升る 平「お禮は却て痛み入れと心得難
 きお手前には何故あつて娘御の急變をお救ひなされぬ 刑「其御不審は御尤其子細お聞下さ
 れ○某主人に願ひ攝州有馬入浴の爲五十日間暇を賜り既に歸國の途に就んとす折是なる
 娘が都見物致さんと達ての頼み未だ餘日のあるを幸ひ密かに都一見なし明日歸國致さんと
 思ふ矢先へけふの災難元よりあいつ等見覺へムれの拙者立出て事を済まされば殿を偽る大罪
 と隠せられんと口惜く娘が困難を脇に見るも偏に錠を犯せし我誤り折能く貴所の御助力に
 て娘斗りか我家の無事安穩に納る悦び夫に附き御涙人との事なれば何卒手前本國へお伴ひ
 申上げ御推舉の致し度し何を隠さう某は 平「アイヤ恩を着せて仕官の望むは好ましからず

況して此度はお忍びどの事なれば御姓名を聞くにも及ばず御縁もあらば又重ねて 刑「では
 ムれども是でお別れ申ては 松「せめて旅宿迄お伴ひ申上げ 平「今日のお禮と申上げねば済
 み升まい 平「イヤ拙者食客の身にムれば自儘に運刻もなり難し止を得ざるとは申せども今
 日杯の此所行は猶更以て内々の機にムれば 刑「左様ムらば何うあつてもお止め申に申され
 ぬか」ト刑部本意ないこなし松江は名残り惜きこなし」平「御縁もムらば」ト立上る風の音
 にて櫻散る」平「嵐をば舞れと思ふ櫻かな 松「暫しなりとも」ト袖に纏るを振拂ひ」平「重
 ねてお目に掛るでムらう」ト向ふへ進入る」刑「コリヤ娘○エ、娘 松「ハイ 刑「確り致せ
 松「花も實もある 刑「今のお人は 松「アイ」ト耻かしきこなし」平「お嬢様には 刑「よ、尤
 だ」ト松江の顔をのぞく松江は耻かしきこなし刑部は感心のこなし平助は借はといふ思入
 れ此仕組宜しく服かなる唄に双盤を冠せ返し

造物常足石摺横上手床の間是に本箱掛花生け障利支天の掛物三寶に神酒徳利を供へ刀筆筒
 の上に刀掛け上手落間下手障子家体いつもの所に枝折門都て武内加賀之助居間の体合方に
 て道具納る」ト爰に武内加賀之助兼で下け髪羽織着流しにて行燈を灯し見並にて懐きなし
 居て」加「文武両道は車の両輪の如しと實に金目夫に付けても日外より我家の食客たる善
 九郎紀州なる關口よりの番輪に甚き藝能の程試し見る所中々彼に及べき者曾てあし夫故極

意皆傳致せしが武藝に慢ずる心もなくア、末頼母しき人物じやなア」ト善九郎黒の一つ着源氏車の五つ所紋の着流し大小にて下手家体より出て来り」善先生只今歸宅致してムリ升る加「サ、善九郎か今日は餘程の遅刻の見れば而体も常ならず今日杯は櫻の満開群衆多き其中にて口論でもお仕やつたか」善「イヤ全く以て加「イヤ天帝は憤怒の筋未だ治まらず、包まらず子細を申て宜からう」善「ハア、驚き入つたる師の眼力包み隠せし拙者が罪口論ならぬ一部始終お聞き被成て下さり升せう」○今日清水寺へ参詣の折り音羽の瀧の邊りにて何國の藩か存せねども侍四人然醉なし未だ年若き露人を捕らへて無理難題支ゆる小者迄も打擲なすを側に見兼て仲間体の若者二人是を支へんと致すのを寄つてたかつて打ち打擲既に一命にも及ばん有様見るに忍びず四人をば追放らさんと致せしが切り掛参るに是非もなく鉄扇にて打懲し立踰りし今日の次第にムリ升る加「ム、義を見てせざるは勇みなし流石は善九郎殿能く致された武士は斯くこそありたきものじや」善「イヤ畢竟相手が熟醉致せばこそ以後は急度嗜み升るでムリ升る」ト下手より下男出て来り」○「先生へ申上げ升只今肥後の惣治と申者参り升た加「サ、肥後の惣治が参つたか是へ呼べ」○「ハッ」ト下手へ這入り」○「サア斯うお出で被成升せ」惣治大きに憚り様でムリ升る」ト下手より役判惣治出て直に初戸の内へ這入り」善先生誠に其後は御不沙汰を仕り升てムリ升る加「サ、惣治か手動

も此方に居た時分と變りがないのうさうして何時参つた」善「ハイ例年の通り九條殿への御遺物で四五日後から出水の屋敷に居り升るが今日のお體に是非上らねば済み升せぬ故只今出升てムリ升る加「コトヤ惣治今日の體杯と身共少しも覺へはないハ」加「イエ左様ではムリ升せぬ體かお内に向井善九郎様と仰しやる先生が御逗留でムリ升せう」善「イヤ其向井善九郎は身共なれどツイ是迄其許とは」善「あきた様が善九郎の先生様でムリ升るか私は當時肥後の一水五郎八の役例を致し升る惣治と申者でムリ升るが今日は清水寺で若い奴等が兩人既に叩き切られ升る處をば折能く先生様がお助け下さり升た上相手の四人をいよいよ目に合はして下さつたこの事誠に承るさへ有難く實に若い奴等は足腰さへも立ぬ様な始末でムリ升故私からお禮を申上升る」善「そんなら最前の小者二人の其許が子分の者か」善「ハイあの野郎達もよつばせ嬉しいかして苦しい中でも先生様が栗田口武内加賀之助が方の向井善九郎と仰しやつた事をば能う覺へて居り升たがおかしなのは相手の四人うぬが齒の未熟をも知らず九條殿を鼻に掛け武内へ仕掛ける杯との影辨慶加「コトヤ惣治其の打たれた四人は其方存じて居るか」善「ハイ然もやつぱり國の侍斯様でムリ升る」○當時九條殿の御殿中様が肥後からお入りになり升た御縁に依り年々彌生の御祝儀には御遺物がムリ升ると九條殿おらも御返物が参るのでムリ升其御物はわつちら又其祝料は今日の悪る侍でムリ升

る故宜い事すくめで九條殿へ訴へる積りであり升せうが假令攝家堂上方でも物の善悪に差別はムリ升せん 加「ム、〇ハテ困つた事じやなア 尊「レ、先生困つた事と仰せらるゝは加「此加賀之助は宮堂上方へ出入り致し殊に親しくお出入りを申上る九條殿物の善悪は儲をいて當方よりして斯る事を引出さば武藝に慢し腕立て杯と殊に御返物出立延引杯ある時には當家に於て相濟まうか此納りは如何致たものであらう 尊「其起りは善九郎此場にて「ト切腹を仕掛る」加「アイヤ待たれよ向井氏はしきに一命捨る事のムらう此加賀之助存する子細もムれば尊「マアお待ち被成升せ 尊「レ、先生の思召は 加「然れば假令九條家より参ることも御身當家に居らざれば夫迄の事此上は氣の毒ながら何國へなり共御身の落附さ 尊「ハア、僅か短慮の一言より大恩受し先生へ恩を仇なる今日のしぎ 尊「是も元は我々より起りし事此上は此惣治が御供致し暫時國元にお出で遊ばし升せ 尊「成程御身が言葉に従ひ幸ひ肥後の熊本には手裏劔の名人矢阪源次兵衛と申者はあるよし夫へ便つて手裏劔の極意を授るに最個強 尊「ア、申夫は向井善九郎様とお名乗りあつては六個取らうムリ升る今日の四人の者は〇イヤ苦しうムらぬ此藝でこそ人も知れ下部となつて罷下り折りを見合はせ矢阪の方へ下部奉公此上頼むは惣治殿 尊「ソイヤ氣遣ひはムリ升せぬ親分は男氣な者

でムリ升れば御恩報じに態度お世話は申升るが下部奉公とは餘りと申せばお痛はしく 尊「イヤ是も藝術勉強の爲めなれば何の厭ひの致さうぞ斯くいふ内も九條殿より詮議来れば一大事お名残り惜くはムれ共拙者は直ぐに此場より 加「斯る天下の豪傑をいなせともなう思へ共 尊「止と得ざる仕儀故に一度雲は覆ふども 尊「又晴天の時もムれば 加「其時宵左右を御報知致すでムリ升る「ト後ろの襖を明け以前の下男出て来り 〇「先生様以今九條殿より使者として雜掌が見へられ止めるも聞かず愛へお出被成升る「ト引返して遣入る」加「ア少しも早く裏口より 尊「左様ムらば 尊「人「先生様「ト行掛ける」加「コイヤ、尊「ハア、加「それ「ト金を投げやる」尊「コイヤ是か金 加「些細を錢別 尊「何から何迄有難う存じ升る「ト奥にて」〇「先生、尊「正しくあれが九條家の 加「コソ「ト加賀之助行燈の明りを吹き消すのが木の眼」加「刺し風じやなア「ト惣治は善九郎を押へる加賀之助は善九郎と氣遣ふこなし此仕組宜しく風の音合方にて拍子舞

二幕目 熊本城外の場

役人替名

一仲 間 藤 平 一深 谷 逸 平
 實は 向井善九郎 一言・任 伊 八

- 一一 水五郎八
- 一役 刺 惣 治
- 一細 川 越 中 守
- 一矢 阪 源 治 兵 衛
- 一松 田 秀 之 造
- 一源 氏 太 兵 衛
- 一米 澤 大 六
- 一一 水 の 子 分 勘 藏
- 一同 吉 松
- 一松 田 の 下 部 榮 藏
- 一仲 間
- 一夜 商 人

遺物二重正面真中に三間の高二重本家根彫物の欄間前側白木の手摺此下は海風壁此家体の左右共黒壁青鏡を掛けし日窓下手も日窓のある海風壁の片遠見平舞臺上手も石垣袴腰の出し掛け二重の家体と片遠見の取附き柳の大樹空より同じく鉤枝下手忍び返し附きの黒屏風に掛り町木戸火入りの月と下ろし都て細川家物見外性連夜の撲機平舞臺に茶飯屋茶飯わんかけ豆腐と印したる行燈を掛けたる荷を下ろし井へ茶飯を盛つて居る床机に六助仲間の形りにて腰を掛わんかけ豆腐を喰ふて居るさんげくの方時の鐘にて恭明く 六助「タイ茶飯屋實に此豆腐のあんの工合といふものは餘ッ程いひ味だせ ○「よう喰分けて下さると私も張合があるといふもの 六「ようしてお前は此國の者かの ○「實は私しは江戸の者で去年の冬から爰へ来て居り升」ト茶飯の井とわんかけ豆腐の桶を盆に載せ」 六「ハイお替りが出来

升た 六「チット来たなり」ト取つて」 六「さうだらう此船の摺梅といふものは淺草の雷門前か吉原の大口口で賣る代る物と少しも替つた事はねへ田樂味噌と来ては江戸製に限るせ然しわんかけ味いので喰ひ過ぎた○いくらにある ○「ハイ豆腐が一膳廿四文茶飯は一つばい十六文でムリ升る 六「ういつは誠法安賣だ」ト床机の上に鏡をついて」 六「タイ爰にりのこについてあるせ ○「ハイ有難ふムリ升る 六「夫じや又翌の晩 ○「毎度有難うムリ升る」ト六助は二重の上手へ進入る」 ○「今夜は思ひの外の商ひをした」ト荷を擔げ」 六「茶飯わんかけ豆腐」ト二重の上手へ進入る向ふより源氏太兵衛深谷逸平吉住伊八米澤大六いかりしき門弟の拵らへにて而小平竹具足竹刀杯を擔げ出て来る」 太兵衛「なんと何れも斯様な満月の折りには堪より夜行が心持が宜いではムらぬか 逸平「如何にも今日は稽古日にて終日の手合はせ餘程勇れてムるに依て夜風の顔に當るのが晴々と致すでムるわい 伊八「御同然に田精は致して居るが實に矢阪先生の御手際には恐入つた事ではムらぬか 大六「あれ程のお手際があればこそ御指南番を仰せ附けらるゝと申ものでムる 三人「左様でムる 六「然し餘程遅うなり申た御門切れにならぬ内参らうではムらぬか 三人「ヤ、参り升せう」ト此以前向ふより勘藏吉松尻からげ頬紅りにて纏ぐるみの桐木を鏡るへ懸し四人の跡を附け來りたることをしにて伺ひ居る門弟は心附かず舞臺へ来る兩人も舞臺へ來り」 六「ヤイ、其處へ

行くか待 真一寸待つて 四人「貰ふかへ 大「何んだ待てと申は 四人「何者だ 真「から達の
 此面らと 四人「餘もや忘れは仕まいがな」ト頼冠りと取る」 本「ヤゝのれ等二人は一水の
 四人「五郎八が子分の者か 勤「ナ、然も京都清水で 真「能くも手込りにしヤアがつたな其返
 禮を仕様と思ふて 勤「うぬ等の戻りを 四人「現つて居たのだ 大「ム、借は已ら商人は仕返
 しをなす 四人「心底よな 勤「ナ、知れた事だ今夜はわい等を 四人「せとしてやるのだ 本「
 ヤアいけふさくしい其一言覺悟を定めて 四人「夫へ直れ 勤「エ、洒落た事とはさきヤア
 がるな 真「今夜は引けを取ものかへ」ト上手へ向ひ」 勤「タイ兄貴日外の 真「相手のさふは
 こいつ等だ」ト上手より役割の惣治木太刀を手拭に巻き腰へさし出て来り」 勤「夫じヤア
 日外手前達が京都の清水で引けを取つたさんびんは愛にうせるからくらためらか 本「ム、借
 は今宵は加勢を頼み 邊「遺恨を晴しに 四人「参つたのだな 勤「ナ、知れた事だはおれが聞
 ちヤア其儘に見遊しては置かれねへ假令矢阪の門弟でも口入渡世の一水五郎八其子分が人
 立ち多い其中で手込にされちヤア親分の恥といひ部家の者の第一外聞惣名代に役割の惣治
 が喧嘩を買ひに来たのだ然し刃物はお出入の屋敷へ對して遠慮の木太刀片つばしから覺悟
 をしろ 本「ム、一水五郎八が子分と云 勤「夫なれば續の事出入屋敷の家臣たる 伊「我々共
 へ無禮過言 大「以後の見せしめ各方 本「神隱流の手並の程見せてはへ面ら 四人「かはかしく

れん」ト四人竹刀を持ち子分の商人刺木を持ち身を拵へる」 勤「エ、假令流義は神隱でも高
 の知れたる矢阪の門弟 勤「わい等に引を取さいと 真「夜の目も寐ずに稽古をした 勤「關口
 流の木太刀の一手師匠は關口流向井善九郎様といふ 勤「古今無双の 四人「達人だは 本「何
 師匠は向井善九郎と云 勤「ム、そいつは日外清水にて 伊「此者をば打懲したる其折に 本「
 我々共を手込めにせし 本「浪人も善九郎 勤「若しそやつめでは 四人「ムらぬか 勤「ナ、
 如何にも師匠は其人だ今では一水親分が請判して矢阪の屋敷へ仲間奉公様半といふ下部こ
 そ 勤「賊は向井善九郎 真「其先生の丹精で劍術柔らと 四人「習うたのだ 本「ム、借は今日
 遊藝にて見掛けたる新参者は其善九郎にて 四人「あつたるか 勤「其名を聞いたら手前達の
 驚くは尤だ 勤「モウこいつ等に 四人「負けるものかへ 本「ヤア返すくも無禮の町人モウ
 此上はソレ何れも 三人「心得申た」ト四人は竹刀にて宜しく立廻りト、門弟は打すへられ
 倒れる」 勤「是で少しは 四人「腹がいたわへ 勤「喧嘩の相手は此惣治手前達長居をしち
 ヤア屋敷へ面倒早くふける」 勤「兄貴のお蔭でから達の 真「やつと遺恨は晴らしたがお
 前一人を残して往ちヤア 勤「わつちらが濟み升せん 勤「そんな義理立てが入るものか早く
 ふける 四人「夫じや先さへ行きやすせ」ト橋掛りへ進入る」 勤「ヤイ門弟の腰拔めら是から
 相手は已れ一人だヤア勝負をしねか」ト木太刀にて四人の脊中を突く」 四人「アイダ、ム、

尊「エ、動かれぬへか 四人「アイタ、ン、尊「エ、しく地なしの賊盗人めが「ト一々に叩き
 伏せ」尊「是で少しは胸がすいたは」ト上手より稜平仲間の拵らへにて箱提灯を持ち跡より
 矢取源治兵衛出て来り 尊「大兵衛、コトヤ稜平狼藉者と相見ゆるぞ 尊「何様狼藉者とな○ヤ
 夫にムるは惣治殿ではムらぬか 尊「チ、稜平さんか 尊「ヤ、見れば覺への身共か門弟○コ
 トヤ稜平明しをく 尊「ハッ「ト提灯を差出す」尊「誠に手込めに逢ひしは太兵衛殿遠平殿
 其外伊八大六殿コレサ心を髓に持つしやれ 尊「チ、是は先生よい所へお出で被下つた 尊
 面目次第もムり升せねど 尊「武士たる者が斯る有様 尊「其の相手の狼藉者は 尊「あれなる
 若者で 四人「ムり升る 尊「スロヤ狼藉は此者とな 尊「へい私が惱まし升たが元より一水五
 郎八が子分と名乗り掛けての遠恨の仕返しサア口惜ければ立上つて存分にするがよいよも
 や體は利くめへがな 尊「ム、如何なる宿意か知らされ共素町人に不覺を取るとは餘りと申
 せば武士たる者のいひ申せなき各方身共が耻辱に相成り中は 尊「恐入つたる先生の其か詞
 尊「斯様なる目よ逢ひ升たも 尊「遠恨を晴らさん其爲めに 尊「飯道迄習ひ覺へ斯様な 四人
 仕儀でムり升る 尊「何遠恨の仕返しなさん爲め飯道迄習ひしとは 尊「其師匠は夫に控へし
 先生の歩仲間稜平と申升るは 尊「全くは假名にて其本名は向井善九郎 尊「日外都清水にて
 某始め四人の者を 尊「手込めになしたる浪人にて 四人「アノ下郎めでムり升る 尊「スロヤ

稜平があの節の 尊「アイヤ夫は全く人違ひでムり升る 尊「ヤアぬかすな今此者より 四人
 承つたぞ 尊「エ、スロヤ惣治殿が此身の素性を 尊「へいわつちも是程迄腕前の勝れた自慢
 に何も角もいふて仕舞升た 尊「ア、ひよんな事いふて下まつたなア 尊「ヤイ稜平夫へ出イ
 尊「へい 尊「おのれ日外清水に於て我門弟を打撃なし刺へ口入五郎八が世話を以て仲間下
 郎に姿を扮し我屋敷へ入込しは、コトヤ身共よ遠恨を含み寢首にても搦ん心底であらう
 がな 尊「中々以て左様の義を 尊「然らば何故入込んだるか 尊「所存がなければ先生の 尊
 お傍へ近寄るいはれがムらぬ 尊「中々油断の 四人「ならざる奴 尊「今は何をかお隠し申さ
 ん拙者生國は播磨にて脇阪家に仕へたる足輕にて候得共主家を辞して紀州に趣き關口先生
 の門に入り夫よりして都に登り栗田口なる竹内先生に隨ひ聊か武術を學ぶ内常頼本には紳
 薩流の達人並に手裏劍に名譽たる矢取源治兵衛先生ありと承はりて何卒御教導に預らんと
 態々常國へ参りし所に日外京都清水にて御酒興の上婦人をとらへ各方に由なき獨立仕り跡
 にて先生の御門弟と承はり當惑なせとも詮方なく今更向井善九郎と本名を相名乗らば御教
 導に預らん事餘も御承引はわるまじく又拙者にても御門弟に對し顔見合さんも面伏せと仲
 間奉公に住込しも此身の望みが遂たさ故斯くお目立ら升る上からは憚れ是より拙者めに御
 教導のなし下さらは生々世々の御厚恩備に願ひ奉る 尊「ヤア黙り居らぬか汝左程望みあら

は師弟の禮を以て願ふべきに業性を隠し惡徒共イヤ禮儀も知らぬ素町人に武藝を教へ身が
 門弟と存じながら斯る狼藉に及ばせしは皆其方が差圖であらふ 齊、全く以て左様な儀は
 眞イヤ夫に相違はないわいヤイ様半其劍道を教へる程の手練があらば身共と手合はせ教
 して見やれ 齊、中々以て且那樣と立合を教す様な修業にてはムリ升せぬ此戦斗りは御用槍
 の儀を 眞、イヤ用槍は罷りならぬ 太、コロヤ先生のお詞通り覺へがなくては叶はぬ管
 舞畢竟申せば武士たる者を侮るより斯くの仕合せ 伊、幸ひ是に持參なせし竹刀木太刀 太、
 先生よりのお望みは願ふてもなき其身の果報 太、疾くくお相手 四人、教すがよいわい 眞
 「キア冥加に餘る事なれ共何とて拙者お相手杯が 眞、假令出来ても出来ずも辞退致すは家
 來の身で主の詞を背くは不忠 太、仰せに従ひ痛ひぬ致すも 四人、修行の内達は 眞、何れも
 様迄夫程に仰せ被成るゝお詞を背くは且那へ無禮の道理 眞、然らば身共と立合ひ致すか得
 心なせば時の一興各方夫なる竹刀 四人、心得てムリ升る「ト、門人四人竹刀を二本真中へ直
 す」 眞、是は恐れ入り升てムリ升る 眞、様半支度を 「恐れながら仰せに任せ失禮御免被
 下升せう「ト平伏をする源治兵衛此隙を見合はせ竹刀を取り打つて掛る姿半身をかはし竹
 刀を取上げ試合の立廻りある此内惣治類に障る思入れにてだしぬきに木太刀を持ち此中へ
 打つて掛る門弟四人惣治を引倒さうとする入り乱れの立廻りになりト、姿半源治兵衛の竹

刀を打落し打すへる惣治は四人を打倒す 眞、ヤイ侍てくかのれ下那の分際で主に手向ふ
 につくき奴 四人、かのれも入らざる武士への手向い 眞、エ、不禮者の兩人を早く屋敷へ引
 立て召され 四人、心得升た 眞、キ、勝負は時の運なれば再三御辞退申せどもお聞入れなき
 儘の立合ひ不禮の段は幾重にも 眞、エ、初手から遠慮をして居るものを無理無体立合せ
 不覺を取つたを權柄押し武士に似合はぬ負惜みだ口惜いなら打つて來い惣治が腕を見せて
 やるわい 太、キアまだく罵る素町人 眞、以後の懲しめ 四人、寧ろの事に「ト刀の柄へ手
 を掛ける 眞、エ、なまくら武士の人切庵丁切られるものなら切つて見る 四人、其舌の根を
 「ト急度なる下手より一水五郎八人入親分の拵らへにて出て來り」 五郎八、先づお待ち被成
 て下さり升せ 眞、ろちは屋敷へ出入りの町人 齊、實に一水五郎八殿 眞、親分でムリ升たか
 眞、彼めが不禮をなしたる故 眞、成敗なすを止めしは 伊、始終の様子を存じてなるか 太、但
 しは知らず 四人、止めしなるか 五郎八、ヘイ如何にも参り掛つて荒ましあれにて承はり
 升たがお止め申も元の起りは此一水五郎八が子分の者が不禮過分を致せし故其お詫びの印
 には只今より親分子分の縁を立切り此御城下を追出し升れば何卒夫で御了簡と偏にお願ひ
 申升る 眞、キ、流石は名うての一水五郎八彼を追放致しなば夫にてきばも立つといふもの
 各方にも御不承ながら 太、先生さへ御得心なれば 眞、我々共に 四人、違背はムらぬ 五、有難

リヤ先生の仰せの如く文學武藝を仕込むには、三師匠を撰むが何より肝腎、四如何に附隨がいらぬとて、六下郎に師範を頼む杯とは、四人片腹痛い事でも、秀御尤にはムれ共拙者が目には先生より○イヤヤ先刻より見受けし處見處のムる故必ず心にお掛け下さるな、四イヤ取るにも足らざる下郎一人御勝手に被成るがよい何んぞ何れも是が世にいふ難喉ふ虫好きくぐもあつたものではムらぬか、六左様く下部の劍道學ばすとは、四お馬先きの高名より、四法被姿の草履取り、六鎗持の高名でも仕込み被成る事でもムらう、四アハ、四是はしたり假令下部でもムらう共木下藤吉郎は關白に迄登つたではムらぬか夫等と見込みの松田氏○イヤ何秀之進殿妻平は其元様の御勝手次第、秀召抱へるでもムり升せう、五其受判は一水五郎八、四然らば是にて松田氏、秀お別れ申でムり升せう、四門弟衆にも、四御同伴の仕らんト源次兵衛先きに門弟四人附添ひ向ふへ進入る、四不般練なる拙者なれ共矢阪先生の名を慕ひ神流流を學ばんと姿を變へて入込みしが御手練といひ日頃の處作が荒まし目どの附きたる處へ今日の一義に付きお召抱へ被下れんとの御一言有難う存じ升る、五此者の身に附き升ては私が身に引受けて聊かも御難儀は掛け升せねば何うぞお召抱へ下され升る様お願ひ申上げ升る、秀ソリヤ此方より望む處妻平には手裏劍を矢阪に従ひ修行なさんぞ存念なる由レ夫等の教を受けたるか、四ハッ改め教道は受け

升せねど残らず會得仕つてムり升る、秀ナ、遣れなる心掛け五郎八そちが得心なれば是より直ぐに身が邸へ、五さうぞ始終はいつぱしの侍分にもなり升様お引立てをお願ひ申し升る、秀ヘテ侍分は元より遣れの劍者と見し故某か處望致とも惜き腕前、四拙なき業が目にて留り思ひ寄らざる身の面目、五其替りには何處迄も五郎八が引受け升れば、秀主従は表にて忤が師匠に頼む心底、四不肖ながら精一ばい、五骨を折らねばならぬぞよ、四其義は確と心得て居り升る、四思ひ掛けない朋輩が出来て下郎も誠の幸ひ、四何うぞ是から奥底なう附合ふて下さり升せ、四ソリヤお互に陸日向なく、秀ナ、然らば一水、五且那樣秀屋敷で一獻儀さうわいト皆々下手へ行きに掛る時附の音にて正面の物見の簾を巻上げ内に惣治二役細川越中守掃の上に住居左右に袴形りの近習四人居て越中守近習へこなし、四アイヤ松田秀之進殿我君様の仰せに候、四暫く夫にお控へ召されト秀之進は悔りしてハッと平伏する、四松田秀之進、秀ハッ、四最前より物見に於て一見せり只今其方召抱へし下郎の名は何とか申たな、秀ハッ我君のお目に觸れ恐入つてはムり升れども聊か見處の候故拙者召抱へたる下郎は妻平と申升る様にムり升る、四コリヤ妻平とやら其方生國は五郎八其方が周旋じやな、五ハッ御意の通りにムり升る、四コリヤ妻平とやら其方生國は何れじや、四ハッ播磨の國にムり升る、四下郎に似合はぬ連れなる手の内コリヤ秀之進

目と掛けて使ふてやりやれ 秀ハッ心得升てムリ升る 無「予も思ふ旨のあれば近日沙汰に及ぶ程に妻平とやらんを同道なし下館迄出仕致せ 秀「コハ冥加に餘る御同コリヤ妻平そちや仕合はせ者なるぞ 無「ハッ恐入り奉り升る 五「下郎の身分で御殿でお目見得するといふは是がはんの果報の天井又世話した此五郎八も商賣果報 秀「拙者に於ても何程か冥加至極に 四人存じ奉り升る 無「今宵は夜陰の事なれば又改めて沙汰に及ばん 秀「左様ムれば失禮ながら 五「お暇致すで 四人ムリ升せう「ト四人共柄掛りへ這入る」 無「コリヤ近習の者今下郎めが立合の手練其方共も見たであらうな 近習四人「ハッ見分致してムリ升る 無「下賤に稀なる手の内ではないか 近習「ハッ御意の通りにムリ升る 無「予も千引縫之助が吹撃に依て召抱へたる神陰流の劍客矢阪源治兵衛こそ達人なりと思ひ居つたが只今の下郎が手練矢阪が如きが及ばぬ手の内然も流義は關口とやら何れ世をば忍ぶ奉公ア下賤に惜さ「ト脇息を直す木ノ頭」 無「骨柄じやなア「ト向ふを見込ひ是を月車にて月を引上る時計の音三重換様の合方にて宜しく拍子幕

三幕目

〔松田秀之進屋敷の場
〔矢阪源治兵衛屋敷の場

役 人 替 名

一 仲 間 樓 平	一 下 部 衆 殿
一 一 水 五 郎 八	一 一 水 の 子 分 勘 藏
一 千 引 縫 之 助	一 同 吉 松
一 松 田 秀 之 進	一 仲 間 只 助
一 矢 阪 源 治 兵 衛	一 源 氏 太 兵 衛
一 同 源 内	一 吉 住 伊 八
一 下 女 お す み	一 深 谷 逸 平
一 娘 お ぬ い	一 秀 之 進 一 子 秀 太 郎
一 米 澤 大 六	一 門 弟 四 人

造物常足の二重見附黒槍の唐紙上手腰板の漆搦此後ろより前へ枝のさし出たる梨の木此下に木馬下手跡へ寄せて庭搦いつもの所切戸紅葉の立木空より同じく釣枝都て松田秀之進屋敷の模様源内袴着流しにて振袖娘のお縫の袖を捕へて居る合方調へにて幕明く 源内是はしたりか縫殿何もヒンヤンせいで宜いではムらぬか お縫「アモあなたがてんがう被成升る故 無「いつ手前がてんがう致したイヤ改つてお掛合ひ申さねば相成らぬ下にお出て被成れ○手前屋敷は武術を以て食祿三百石を頂戴仕り家中過半は兄の門弟其代務古とも動む

る拙者僅かな隙を見合しては日々此梨の木傳ひにお宅へ参り其元様に御意得るも近頃耻入る義ではムれ共其元様にはぞつこん執心御得心下さらば表向拙者が妻に申受け度い除ての願ひ夫をてんがうとお聞きなしたるはナトお恨でムるわい 豊お志しはお婚しう存じ升れせナト子細がムリ升て其事斗りは 豊「不得心じやと仰せ被成るかイヤお縫殿其子細と仰つじやるは此文故でムらうがな」ト文を出して見せる 豊「夫は 豊おつこい夫から御らうじろ然も名前は新藏様参る懸しき縫より此新藏とは御親類松田新平が弟にて則拙者方の門人松田新藏てがなムらうがなイヤお隠し被成るな斗らす拾ひし是なる文斯様な譯がある故に相違ムらぬ拙者がいふ事いやとあれば親御へ申入れ憂目を見せるが拙者の腹いせ 豊「ア、誠相な其様な事を 豊「然らば拙者がいふ事を聞入れて下さるか 豊「サア夫は 豊「此事親御へ申さうか 四人「サアくく」 豊「此源内が申事餘もや否とは申されまい」ト奥におすみ若流しの拵らへにて出て来り」 豊「源内様何を被成升るぞいな」 豊「サアそちは 豊「おそみよい所へ来てたもつたのう すみ」モ源内様おなた當年お茂つにお成り被成升る 豊「エ、置てくれ左様な暇はないわい すみ」其お暇のないものなら何んで日々擧越しにお越し遊ばしお懐様へ兎やかうと此後急度おたしおみ被成ばよし左もなくば此事を旦那様へ告げ升ぞへ 豊「面白い告げて見よお縫殿に頼らがある故此源内とて口説いたが何と致した

すみ」是は聞事シテ縫様にせの様な頼らがムリ升まぞいなア 豊「其証據は此玉章 すみ」サ夫は 豊「ソリヤさうだ新藏と譯がなくば斯様な文を仮へ送らう筈がない此取持はおそみ手前であらうがな すみ」誠相な何の私が 豊「コレおすみおの文を源内様にお貰ひ申てたもひのう 豊」是が欲しくばお縫殿手前が心に願ひ召さるかおすみ手前も取持ち致すか すみ」阿房らしいらしい何もお懐様が其お文を新藏様へ送つたとて不義といふ次第ではムリ升せぬ夫には子細がムリ升て 豊「其子細承はらうか」ト奥より秀之進出て来り」 秀之進「おすみ何事じや 豊「サアおなたは父上 すみ」旦那様 豊「秀之進殿でムるか 秀」是は御隣家矢阪源治兵衛殿の御舍弟源内殿案内もなく何時されよりお越し被成れた 豊「サア夫は 豊「御用でもムるなら拙者承はるでムらう 豊「サア其用事と申は○夫は斯様でムるナトそこ元様へお心得の爲め申度き義のムつて此梨の木より推參致してムる 秀」是は又けしからぬ如何に隣家とは申ながら擧越しに御入來とは 豊「サ、是が表向の用事なら御門より推參致せせナト内々の用事故 秀」レテ其御内用とは 豊「捨て置き難き御息女の義に附いて すみ」ア、モ源内様被多な事を 豊「エ、申さずには置かうかい 秀」コリヤ娘御内用とあるからは定めて他聞の傳りもあらん其方共は次へ立て すみ」おなた夫じやと 四人「申升て 秀」ハハ儲立てと申に 四人「ハア、イ」ト是非なく奥へ這入る」 秀「レテそこ元の御用事とは 豊「此文を御披見被成

れ「ト渡す」秀「コリヤ娘より松田新蔵へ送りし文 源「何んと秀之進殿御覽被成たか不義は
お家の法度なるが畢竟夫を拾ひし者が拙者なればよけれ分一餘人の目に掛らばお平討ちに
も被成すばなり升まい夫といふも年頃の御息女を何時迄も一人りお置被成る故左様な不埒
が出来るといふもの拙者次男にムれ共兄の知行は三百石お手前様は百五十石人として款と
知らぬ者もなく子に出世がさしたるもの幸い拙者も無妻でムるが何と何れへなりと御息女
を早く縁付けては如何でムる 秀「是は御隣家のよしみて能くこそ御深切に仰せ下された
此上は一日なりと早く娘を嫁入り致させ申でムらう 源「夫は一段と宜い思召し然し遠い親
類より近しい他人と内分にて事を済ませし拙者が情は隣家のよしみ此婚別の間柄も近しき
中が奥底がなうてよくムるな 秀「如何にも左様 源「レテ御息女様御縁付け被成る其先きは
秀「松田新蔵でムる 源「エ、スリヤ不義の相手の新蔵に 秀「イヤ不義杯と仰せられては親
も娘も甚だ迷惑行末夫婦に致さんと幼少より親と親とが約束致し置たる新蔵貴殿御兄弟に
は近頃當家へお召抱へに相成りし故御存じないも御尤なれど右約束を致し置さしも此婚別
の間柄は近しき中が奥底がなうてよくムるて 源「ア、イヤ假令約束はあるにもせよ脱首せ
ねば他人も同然其男へ文を附しはいはずと知れた不義密通 秀「よしや其不義にも致せ内分
にて事を済せし貴殿の情は隣家のよしみ 源「ヤ 秀「仰せに随ひ娘は嫁に遣はし申すでムら

う○コリヤすみ娘を是へ同道致せ「ト奥よりおすみお繼出て来り」ナク「且那樣レテお娘様
ぞお召しの御用は 秀「此文娘覺へがあるか 源「御免被成て下さり升せ ナク「夫といふも皆
私が 秀「コリヤ何も申譯致すに及ばぬ源内殿が此文を御持參被成れて早く嫁入りさせよと
あるお論しに随ひ約束通り新蔵方へ早速嫁に遣はすぞ ナク「エ、ろんならお叱りと思ひの
外 源「アノ新蔵様ぞ 秀「夫といふも源内殿のお差圖なればお禮申せ ナク「夫はマア日頃
も似ぬ源内殿の御深切あなたがなくばお興入りもまだく延びくにあり升せうに 源「よ
うあなた仰つしやつて下さり升た有難う存じ升るわいなア 源「エ、存せぬわい 秀「幸ひ今
日吉日なれば身共是より新左衛門殿の屋敷へ参り表向の祝言は何れ上みへ願ひし上先づ客
分にて今晚直ぐに遣はせば其用意を致して置きやれ 源「スリヤ今晚お繼殿をば ナク「アノ
新蔵様のお屋敷へ 源「夫といふも源内殿の皆お蔭有難う存じ升るわいなア 源「エ、存せぬ
わい 秀「暇を取らば源内殿の御深切を無にする道理すみ身共の衣服を出してくりやれ ナク「
「長り升てムり升る 秀「イヤ何源内殿今晚貴殿の思召し通り娘様を遣はせば最早用おき手
前が屋敷以來お解越しの御通行は 源「ヤ 秀「御無用でムるぞ娘参れ ナク「あのお顔わいなア
オホ、、、「ト秀之進お繼おすみお附添ひ奥へ這入る」 源「何の事じや情をかしに持掛けて親
秀之進より女房に貰ひ受けんと總身の智慧を振ひ出したる處おの新蔵とお繼とは親が許せ

し言号とは夢にも知らぬ煩惱の犬骨折て鷹の餌食此源内の面ヲ當てに今晚お糺を送らんとは身共が鼻を明さん心底夫のみならず兄者人の眼と出せし穰平をば即座に當家へ抱へしは兄といひ身共迄踏附けにせし秀之進此返報が有りさうなものじやてな〔ト奥より秀太郎十三程の子役袴服立褌掛けたんば鎗木太刀を持ち出て來り〕秀太郎源内様夫に何をしてお出で被成升る 唄、エ、何を致して居るふとも身共の勝手思案の妨げ物申すな 秀太郎御思案なればお屋敷へお歸りの上被成れ升せ 唄、エ、斯様な屋敷に長居致すは身の汚れに相成るわい 秀太郎夫はこちらの事でムリ升る毎日此塀を越へてお出で遊ばす其様な猥らな方が屋敷へ出入り致しては不用心なり身の汚れ此後は決して來て下さり升るな 唄、エ、口は違者なちつべいの過言を申さばどづいて倒すぞ 秀太郎サアお相手ならば参り升せう穰平より教へを受し鎗ありと木太刀なりとお望み次第 唄、スリヤ穰平より武術の教へを受けて居るとなエ、見る事聞く事虫に障る事斗り已が様で餓鬼めをば相手に致す身共と思ふか 秀太郎んなら早うお歸りなされ〔トたんば鎗で突き掛かる〕唄、エ、何を致す〔ト平舞臺へ下る〕秀太郎んなら早うお歸りなされ 唄、エ、おふないわい今歸ると申に〔ト源内鎗先に迫はれて木馬を足代に梨の枝に取附き塀の家根へ上り〕唄、エ、子供うばへを致し居るなおのれが親の秀之進に急度禮を申と左様に申せ〔ト塀の内へ這入る〕秀太郎、空うら屋敷へ來ぬ様

に○穰平は居らぬか穰平く〔ト橋掛りにて〕穰平「只今夫へ参り升るでムリ升る〔ト穰平仲間の手らへにて出て來り〕 唄坊ンさん御用にムリ升るか 秀太郎あの梨の木を切つて捨てよ 穰平滅相な事をかつしやり升せ成程隣屋敷より一間餘りもお屋敷へ汝のさし出たあの梨の木常から邪魔とは存じ升れど隣りで秘藏の庭木松手さへも附けぬは御存じでありながらけふに限つてなせ左様な事を仰つしやり升る 秀太郎あの枝のある時は傳ふて父も源内が○サア稽古も鎗を仕舞たれば是から木馬の稽古をば仕様と思へど邪魔になればわしが切らうと思へ共手が届ぬ故らちへの頼み早う切つて捨てよといふに 唄成程御尤にはムリ升れど大旦那様には新藏様のお屋敷へお越し被成しお留守中今にもお歸り被成升たらお伺ひの上如何様とも致し升れば夫迄は必ずお手をお附けなされ升るな 秀太郎コリヤ穰平父も主なら秀太郎も主でないか拒むは幼少の者と傳りて何を背くか 唄全く左様でムリ升せぬぞ 秀太郎然らば何故らちは切らぬぞ 唄ハッ左様迄に仰せの上は是非に及ばぬお主の言附け如何様の儀が出来仕り升る共一身に引受け梨の木の枝は穰平めが 秀太郎切ると申か 唄如何にも手練は達せしなれ共腕と心の相違せし隣家の矢阪源治兵衛事あらば穰平が取ひしいで御覽に入れん 秀太郎サ、早う切れ 唄畏てムリ升る〔ト一本ざしを抜き梨の枝を切つて落す〕 秀太郎能う致した是へ持て 唄ハッ〔ト穰平白刃を拭ひ鞘に納め切し梨の枝を

取上げ 妻「秘蔵にも致す筈見事な梨ではムリ升せぬか 秀太「ナ、梨の實も見事なれ共此切口も見事じやな 妻「ハッ其切口にお心の附かれしハ譬へにもいふ梅屋の二葉末頼母しう存と升る 秀太「餘の稽古を今一度頼まうか 妻「ヤア何が度なり共お稽古が第一でムリ升る是へお出で被成升せ」ト木太刀を取る秀太郎はたんば餘を取り平舞臺へ下りる上手の拵の内より只助仲間の拵らへにて梨の木に取付き半身出て「只助「今系らい音のしたは若しや若旦那が戀のかけはし踏外づしたのではあるまいか○サアコリヤ枝がないぞ 秀太「ナ、拵越しに此方の屋敷内へ案内もかく日毎に入来る不禮の梨の木只今手討に致したのじや 只「ヌリヤ御秘蔵の梨の木をば 妻「まづ此通り切つたと申せ」ト枝を見せる」 只「ヤアコリヤ大袈裟にシテ夫は誰が切た 妻「誰が切らうとわいらの餘儀を受けるものかい」ト梨の實を只助に打附けるのが道具替りの知らせ」 只「アイヤ」ト横面らを押へる」 妻「イヤ坊ン様 秀太「ナ、ト試合の見得只助は呆れたることなし此模様宜しく白幟子にて返し

造物常足の二重見附に小模様の下手一間半の玄關見附石摺の襖此取合拵の見切り拵て松田屋敷玄關先の模様二重にお結おすみ住居合方調へにて道具納る おすみ「お模様何とよい氣味ではムリ升せぬかいなア お鷹「ヤイのうお隣屋敷の弟御と思ふ故風に柳と逆らはぬ様に仕て居れば宜いと思ふて舌たるい夫も宜けれとあの文を何うして源内つらの拾ふたやら

夫と出された其時と父上様に呼ばれた時は耻かしいやら怖いやら夫が却て幸ひにて客分ながら新蔵様 今宵お側へ行かれるとわしや此様な嬉しい事はなないわいなア オク「夫は私とても身内から冷たい汗の山升たれど且那様のお詞にて胸の痞の下りた所へ源内様が的の違ふた其時の顔附夫に引換あなた願ひが叶ひしお目出度あんまり思ひ掛けなうて夢見た様に存し升るわいなア 舞今にとく様にもお歸りであらう程に髪を撫て附けて置いてたもひのう オク「成程新蔵様にお見せ遊ばすおぐしおれば御尤でムリ升るわいなア 舞「アレさういふ譯ではなけれ共 オク「ハテお心は能う推量致して居り升るトレ撫附けてお上げ申升せうわいなア」ト鏡姦を直しお縫の髪を撫附ける向ふより源内羽織袴大小只助附添ひ出て来り」源内「確と其方見届けたに相違ないか 只「イヤモウ只今お庭の掃除を致して居つた所きんと音の致し升たは例の通りよ梨の木傳ひにお出で被成た事ではないかと拵へ登つて見ればあなたでなうて様平と愛の餓鬼りの秀太郎何でもやつらが梨の木の枝を切つたに違ひのないは下郎の横面ヲへ梨の實を打附けたは喧嘩買はうの致し方 舞「ム、につくいやつ案内致せ 只「長てムリ升る」ト兩人舞臺へ来り」 只「頼まう」 舞「コレおすみ案内があるわいのう オク「様平殿は又坊ン様のお相手かいなア 只「頼まう」 オク「おうれ」ト玄關へ来り手を仕へ」 オク「おなた様でムリ升る 舞「矢取源内身共だわい オク「是はマアお珍らし

い御門から道入る事を御存じでムリ升る辨越しでなしでは此屋敷へお越しは叶わぬものじやと存じて居り升たに 源「ヤア女と教して今日迄たはけにまつて居ればよいかと武士たる者を嘲弄致すか」サ「イエ嘲弄は致し升せぬぞ左様ではムリ升せぬかいな」只「タイくおすみぞんお心易いはふだんの事からが供で玄關から案内をして来たのは表向の且那のお使者だ」サ「夫はマアいつにない改つた事でムリ升るな」源「シテ松田秀之進殿は在宅か」サ「且那様には最前もお聞きの通り松田新藏様といふお嬢様の戀婿君のお屋敷へお出で被成て今にお歸りはムリ升せぬわいな」源「エ、新藏なれば新藏でよい戀婿杯とは例の費へ夫承はては居らぬわい」サ「シテ御用の筋は又お嬢様の事でムリ升るか夫なればモウ明く事ではムリ升せぬ早うお歸り被成升せいな」トこぢり家の体へ来る」源「こいつ不禮な女め秀之進殿不在なれば歸宅を待つて面會致さう客間へ通る案内致せ」サ「何うかと御勝手に被成升せいな」只「あんな事を申て居りがな」源「思々しい奴ではあるわい」トおそみはお縫の髪を撫附けて居る向ふより秀之進衆禰仲間にて附添ひ出て來り」衆「且那様新左衛門様のお返事をか嬢様に仰せ聞けられ升たら應お悦びでムリ升せう」秀之進「サ、」ト舞臺へ來り 秀「夫にお越し被成るゝは源内殿ではムらぬか」源「是は秀之進殿拙者先刻よりお待ち受け申てゐる」秀「夫は能くこそ先づお通りをば」源「御免下され」ト兩人玄關へ上る衆殿は

秀之進の雪駄を片附ける」秀「コトヤすみは居らぬか」サ「ハイく」○お嬢様且那様のお歸りでムリ升るわいな」トお縫もこぢりへ來り」源「父上に只今を歸りて 兩人ムリ升るか 秀「娘も夫に居りながら源内殿をなせお通し申お茶お抹茶を差出し置かぬ夫も定めて御深切に仰せ下されし興入りの義に付て又もお越し下されしならんに處略に致して済まうと思ふか」○源内殿不禮の段は御免下され」源「アイヤ秀之進殿拙者左様な義は承はりには参り申さぬ」秀「シテ又お越しの御用筋は 源「様半をお渡し下され」衆「ア、モンお隣の若旦那其様半は元あまたのお屋敷から暇が出たれば今はこつちの屋敷の家來其様半を渡せとは又御家來にでもなされうと仰しやるのでムリ升るか」只「やかましいわいおらの主人も侍だ何で未練があるものか」源「夫に様半をば」サ「渡せとは秀「何ぞ彼に處相でもムつたか」源「處相も處相大の處相拙者方にて秘藏に致す梨の下枝を切つて落せし御家來様半然も其處に御子息もお出でどの事なれども幼稚の事故下那の様半終んでせしに相違なし萬一御子息のね指揮とあれば氣の毒ながら秀太郎殿を申受けて歸り度い」只「其証人は此只助夫も處相で折つたでなくみのり切つた梨の枝をば切つた斗りか水梨をちぎつておらがしやつ面ヲへ打附けたのは遺恨あつて違ひないのだ」衆「コレ只助お隣り同士で遺恨のあらう筈もなし」源「イヤ假令處相であらう共答へもなく切られて」武士の一分立難し」サ「モン源内様何も其枝を

切つた位で武士が立つの立ぬのと夫程の事ではないじやムリ升せぬかいなア、源、大方其枝
 がなうては塀越しにお越し遊ばす御都合が、源、エ、女存じた事ではムらぬわい、源、成程御立腹の段は御尤でム
 て下さり升せいなア、源、エ、女存じた事ではムらぬわい、源、成程御立腹の段は御尤でム
 れ共留守中の義は辨へ升せねば一應悴にも承はり御返答の仕れば一先づお引取りの願ひ度
 い、只イヤお尋ねなさらす共証人は此只助、源、ヤイ我が見ても旦那様には御存じのない事
 聞かざれば御返答がならぬわい、源、然らば夫迄控へ申さう、源、夫は御隨分然らば暫時御免
 下され、源、コリヤ衆蔵其方奥へ参り悴と是へ呼んで参れ、源、長てムリ升る、源、ト玄關より奥へ
 道入る秀之進はこちらの二重へ来る源内は玄關に控へるお續おすみは秀之進の左右に住
 居、源、父上、源、旦那様、源、源内様の常に變りし今のお詞、源、若しやひよんな事にでも
 成りは致し升せぬかいなア、源、ト秀之進は思案のこなし奥より衆蔵秀太郎の手を取り出て來
 り、源、旦那様坊ン様とお連れ申升てムリ升る、源、父上様只今お歸りにムリ升るか、源、
 秀太郎是へ参れ、只今矢阪氏より御秘藏の梨の木を切しとあつて源内殿が様半を申受
 けに参りしが其方覺へがあるか、源、今お歸りよりの仰せにはうなとも一ツに居やつたとい
 るが、源、すみ定めて坊ン様には御秘藏の梨の木とも御存じなく、源、お戯ひれに被成た事でム
 り升せうなア、源、旦那様イヤお隣屋敷の御秘藏とは常に聞いて居るなれど木馬の精古の邪魔に

なる故、源、秀心得て切りしと申か、源、様半に申付け切らし升てムリ升る、源、ア、コレ渡多
 な事を、源、アイヤ御子息のお詞源内儘に承つた左すれば只助が申に違はず差圖は御子息切
 つたは様半彼をお渡し下さるか但し御子息を以て詫び召さるか、源、べんくだらりと暇取
 つてはお使のあなたも旦那へ濟み升まい下郎も退屈致し升わい、源、ト秀之進玄關へ來り、源、
 源内殿には賑かしか待兼只今お聞き及びの通り悴には木馬の精古仕るに貴家の梨の木が障
 りになると様半に申付け切らせしも無心の小兒、源、假令幼年とは申ながら此方の秘藏と
 知つて切りしは心あつての事殊に様半附添ひながら枝を切たるのみならず家來に迄乱暴
 藉夫をば無心の小兒と斗りて此方了簡相成り升せうか、源、其義は元々此方の悴が誤り拙者
 跡より推参仕り御舎兄にお詫びの仕れば憚りながらお傳へ下され、源、能くムる貴殿が直さ
 く、詫るとあれば夫迄相待ち申すでムらう、源、スリヤ若旦那には様半を召連れせに、源、ハ
 ア夫も一旦詫の仕様をば拜見致した其上の事然しながら秀之進萬一様半をば捕逃がさば處
 相で濟まし升せぬぞ、源、鹿相のお詫びお聞濟みに相成る迄は昇法未練の振舞は仕らぬ、源、
 然らば其由立歸り兄へ申入るでムらう、源、左様ならば若旦那、源、お使御苦勞、源、確と詞
 を番へ升たぞ、源、ト源内只助付添ひ道入る秀之進こちらへ來る、源、ト父上、源、お詫びと
 仰つしやり升るは、源、悴秀太郎を同道なし詫びを致さん身共の心底、源、夫はお止し遊ば

し升せ僅か梨の木の一枝を切落せしを隅りに無理難題を申掛けるも今こそ申上げ升れよあの源内様は日々昇越しに参りて升てお繼様に兎やかうと夫もあなのお詞にて愈々望みの叶はぬしぎ稜平殿を渡せとはあの人にも遺恨のある上戀の意趣をば察たる工み 秀夫と知りつゝ弟を連れてお出遊ばせは又ぞの様な難題を申掛けるも知れ升せぬ 秀夫さういふ遺恨があると聞いては油断のあらぬを身の用心萬一坊ン様に凶事でもあつてはか果て被成れた奥様の草葉の影でお歎きは如何斗り恐るゝ事は申升せぬ隣りのやつ等は皆氣違ひでムり升るわい 秀夫其方共の心遣ひは過分なれ共身をも詞を番ふたからは是非共伴を同道なし詫び致さねば秀之進武士の詞が相立ぬ 秀夫アモ萬一の 三人「事あらば 秀夫ハ其時は伴が首を討つて渡す迄の事 三人「エ、 秀夫コリヤ何驚く事がある武士にあるまじき源内が振舞身も陸あがら存する故實は面ヲ當てゝ娘様をば今晚松田新藏方へ遣はす談合致して参つた其恨といひ稜平を當家へ抱へし鬱憤を散せん爲めの彼等が存念夫と知りつゝ伴をば同道致す身共が心は元より首討ち渡す覺悟コリヤ秀太郎其方とても武士の伴必ず未練な性根を出すな 秀夫私とても隣家にて秘藏致す梨の木と常に知つてあり升れを枝を便りに源内様が扉を越へ日毎に来るが面ヲ憎う存じ升て稜平に申附け切らし升たは私なればどうぞお連れ下さり升せ 秀流石は伴彼が不埒を子心にも憎しと思ふて切つたる科の元彼にあるなれ共此

期に至つて夫等の義を申立つるも未練に似たれば壽命を諦め同道せよ 秀夫「イヤお供致し升せう 秀夫「コレ秀太郎侍つてたも斯ういふ難儀の出来せしも元はといへば此節故去年母様の御遺言にも母に代てそなたが附添ひ手習ひ讀書に精出させ武藝の道も油断なく進れ松田の家の世繼と成長しやると草葉の蔭に待つて居るとのお詞も今は甲斐ないけふのしぎすみ「今お隣りへお越しにならば坊ン様の御存命は計り難ない一世のお別れ 秀夫「お生れ立ちからお傍に附添ひ愚鈍者でもお氣に叶ふた坊ン様に今お別れ申と思へばはいないやら口惜いやらせめて此世のお別れに 秀夫「暫しが間 三人「御猶豫をば 秀夫「其悔みも尤なれど時刻移して嘲りを受けるも武士の耻辱にあらすや 三人「ろんからどうでも此儘に 秀夫「姉上おすみ衆殿にも其身を大切に教へて受し稜平へも能う禮をば 秀夫「其健氣な程 三人「猶一倍 秀夫「此期に及で未練なるわい〇イヤ伴 秀夫「父上様 秀夫「同道致せ「ト立上る奥より稜平出て来り「 秀夫「アイヤ旦那様暫しお待ち下さり升せう 秀夫「さういふそちは 秀夫「稜平殿か 秀夫「ヘイ〇只今ね次より承はり升れば梨を切つたる科のお詫びとして若旦那様を同道遊ばされんとは御了簡述ひ今日枝を切落せしは此稜平が什業にて秀太郎様には御存じない事 秀夫「イヤ稜平よしや其方切りしにもせよ申附しは伴なれば秀太郎を以て詫び致さねば 秀夫「イヤ假令若旦那の仰せ附けにも致せ旦那様の留守といひ御幼少の事なればお陳り申管の處

早速に切つて捨てしは下郎が誤り左すれば料は此様平何卒隣家の壁の通り拙者めを引渡
 し下さり升せう 秀、コリヤ様平其心底は過分なれ共元秀太郎が言附すば其方も切りはせま
 と左すれバ料は悴にあり如何に我子の一命が助けたしとて料を他人に譲らん事甚だ不買の
 至りなり此義に於ては叶はぬ事じや 善、サ、左様でもムリ升せうが望みあつて矢阪方へ奉
 公せしも暇を出され且那様のお情けにて即座に御當家へ有附さし御恩の寝た間も忘れぬ様
 平其御主人の若旦那の御難義を何と見つゝ居られ升せうや 秀、サ家來とは申ながら悴の爲
 めには武術の師範其弟子たる者の身に代へて師の一命を失はれうや 善、スリヤ如何様に申
 上げてても 秀、此義斗りは相ならぬ 善、ム、此上は是非に及ばぬ御主人の御子息を殺害遊バ
 し給ふならば下郎が爲めには主の敵矢阪が屋敷へ切入つて勝負に及ば、若旦那には犬死同
 然元より彼と立合度いが願ひに依つて梨の木を切つたる此様平 秀、何と申すぞ 善、元
 來矢阪源治兵衛おのれが業の秀でしに跨り人を見る事芥の如し左ある小人ども露存せず彼
 が手裏剣を學び度く當地へ参り下郎と逢姿を變へて奉公せしも愛想の尽さし彼が行ひ三月
 が間辛抱せしかせ計らざる義に依て暇となりし其後は拙者をさみなす日毎の悪口今日若旦那
 が梨の木を切れとの仰せは是幸ひ矢阪を怒らせ勝負を遂げんと存じ附さし拙者が心底○
 兎に角拙者めにお暇下され隣家へお引渡し下さる様偏へに願ひ奉る 秀、ム、跡にて主の敵

杯と願助致さば主君へ不忠ハア如何致した○ム、是非に及ばぬ其方聽つて能きに計らへ然
 し相手が相手なれば引くに引かれぬ場合もあらんなれ共短慮を慎み穩便に事納まらば納め
 てくれよ 善、其儀は仰せ迄もなくいかで事を好み升せうや 秀、夫聞いて身も安堵致したわい
 善、コレ様平殿能く旦那様を留めてくれた既ニ坊ン様のお命も今を限りと思ふたに、サ、其
 お命に替るお前は 善、コレ弟そなたの爲めには命の親 秀、本「様平が志しは過分なれ共此秀
 太郎が料なるに人に命を替らすとは卑怯者と矢阪方にて笑はるゝが耻かしい行かば諸共助
 太刀なりと 善、ハ、ア適れ御氣性夫なればこそ矢阪が秘蔵の梨の木と御存じあつて枝を切
 れと能く仰つしやり升た然し拙者参ることも命に障りはムリ升せぬ、サ、アモ日頃意地くね
 悪るい、善、隣り屋敷の事なれば 善、「何んな手立を 三人」仕様やら 善、假令如何様の手立てあ
 り共此脇差の目釘の續く其内はやはか命を渡すべきか御安堵をされて下さり升せ 秀、レ、ア
 一腰に覺へがあるか 善、身ころ下賤の奉公致せよ腰は放さぬ家重代 秀、銘は誰じや 善、備
 前長船 秀、エ、 善、「失禮ながら」ト刀を抜き差出す」 秀、ハア心掛けよ」ト秀之進は腰を
 打つ様平は刀を鞘に納める是を一時の道具替りの知らせ」 秀、益々持て 四人「長り升た」ト
 皆々立掛る様平は目釘をしめす秀之進は感心のこなし此様様宜しく大小入りの合方にて返
 し

遺物三間の常足敷蓋附の玄關見附大形の襦是に對立を置き上手屋敷拵三尺の引戸下手同じく屋敷拵上下も用水箱空より松の釣枝都て矢阪屋敷玄關先の模様太兵衛逸平伊八大六刀を抜き焼た刀を合して居る合方にて道具納る 太兵衛「なんと各々今日こそは日頃の體價思ふ儘に晴さねば相成り升せぬぞ 逸平「夫は貴殿のいふ迄もなく向井善九郎が襦平であらうとは夢にも知らず二度の不覺を取たる口惜さ 伊八「滅多に油斷のならざるも先生源治兵衛殿でさへ及ばぬ程の彼が手の内 大六「何うぞして吐序の腹らいせ致しくれんと思ひし處今日梨の枝を切りしを種にして松田方へ腰しく掛合ひ召されたとあれば何でも彼を引渡すに相違ふるまい 太「然し夫も承はれば秀之進後刻詔びに參るとあれば如何様に詔びを致すも計られぬぞ先生の思召しでは假令何と申さう共彼が悴の首見るか但しは襦平を引取か何れ違さぬ御了箇 逸「夫も秀太郎が首持つて詔び致せば心配はムらね共襦平參る其時は 伊「致すに手なし各方斯様に致しては何うでムらう「ト三人に叫く 太「成程御工夫至極上策 逸「然らば此由先生へ 伊「如何にも夫が能くムる 太「イヤ各々お越しなされ「ト上手の庭の入口へ這入る向ふより衆藏先きに襦平附添ひ出て來り」衆藏「襦平殿元より奥怯を奴なれば落し穴を拵らへてあるかも知れぬ程に滅多に油斷を仕なさるな 逸「然し旦那様よりお腹乞のお盃を頂戴したので何うか眠氣がさして來た 衆「馬鹿な事をいふたものぞ生死の境目になつ

て居ながら眠氣がさしたなんぞとは大膽にも種があるがな 逸「何にしても早く彼を引渡しで實はぬ内はこなたに苦勞をよせるも氣の毒 衆「ろんなら襦平殿〇レ一番大きくとどつて遣らうか「ト兩人舞臺へ來り」 衆「ヤイ頼まうく「ト此内襦平は下手の用水の窪に屈み居る「只助「どうれ「ト奥より出て來り」 只「我は隣りの衆藏か大きな聲をさらすやつだ何の用でうせたのだ 衆「旦那うらのお使だ 只「其使なら奴相應兩手を突いてぬかす筈とば突立ての懐ろ手は主人へ對して不禮な奴 衆「さういふ我うらして奴の分際でからが主人の使と聞たら兩手を突いて借御主人の御用はとぬらすはづ立はだかつて無禮な奴だ 只「喧ましいわいからが旦那は忝なくも細川越中守の御指南番武藏を以て三百石頂戴致す源治兵衛様だは 衆「其三百石の知行をば頂戴致す武藏とは何だ二合半のお米で奉公とするからの屋敷の襦平が手の内にも遙か劣つた胸前だ知行を食ふ餘盗人とは我が主人の源治兵衛の事だわい只「こいつからが旦那を餘盗人とぬかしたぞよ 衆「いふたら何うだ 只「何うするか見やアがれ「ト襦平出て來り」 衆「コレ只助マア待たぬか 只「ヤ我の襦平だな 衆「鑿みの通り襦平が來たらば言分あるまいがな 只「ろんなら秀之進よりわの我を引渡してよこしたのか 衆「如何にも望み通り今主人より暇を遣はし我が屋敷へ渡すに依つて存分にせよとある主人秀之進の口上此由源治兵衛に旨聞かして儘に受取れ 只「うぬ待つてけつかれ「ト奥へ這入る」

主が主なら家来迄禮儀を知らぬ奴だわい夫にしても衆敵殿是でお前の役も濟たればせうぞ歸つて休で下され 衆「サア歸りもせよが何分相手は弟子もありなんぼお前に劣つたる手の内にもせよ武術を以て三百石を頂戴する源治兵衛兄弟せめてこなたの助太刀ありと 主「よういふて下さつた傍輩と思へばこそ案じて下さるは忝なれど最前屋敷でもいふ通り假令相手は何人あらうと滅多に命は渡さぬ心然し万一不覺を取り若しも討たれたと聞いたならどうぞ一遍の回向なり共 衆「夫がからは氣になるのだ假令下部奉公でもお供先の用心にと救へて貰つた其か陸で木太刀竹刀を持すべと覺たればおらが師匠其こなさんに若しもの事でもあつた時には衆敵斗りか旦那を始め坊ン様のお力落し何んでもかんでも勝を取りモウ一遍おらが主人に奉公を任せて貰はねば覺へ掛けた劍術も此儘捨てねばならぬといふもの 主「夫は私も御恩の御主人生涯御奉公も申したければ勝負に勝つて見ぬ内は海のものやら川の物やら 衆「成程夫もさうじやなア然し願ふ事ではなければ何ぞ言置さ度い事でもあるなら 主「其深切は忝なれど親もなければ妻子もない遺言は備置いて記念を送る者もない一本立の此様平したが頼みたいのは一水の五郎八郎じや世話になつた恩さへ送らず降つて濡いたるけふの一條何うぞ此様子を知らした上萬一の其時には私の死骸を一水殿に引取つてくれる様願んでくれまいか 衆「なんの夫は易い事是から直ぐに一定り〇然しと

んな事に成らぬ様 主「夫は元より様平とて滅多にさうはせぬ心 衆「夫を力に様平殿 衆「御苦勞ながらちつとも早く 衆「サ、合点だ、ト花道へ行き圍さ掛けて踏止まり」 衆「ドッコイ」 衆「〇必ずくさい様をれせ 衆「萬事は胸に」ト胸を叩く」 衆「よ、さうだ」ト向ふへ走り這入る」 衆「又傍輩の深切は別なものじやなア」ト奥より只助出て來り」只助「ヤイ様平 衆「エ、悔りしたわい 只「今隣りからの口上をお旦那へ傳へた處松田氏より暇を出し引渡したる大事の科人随分大切に取扱へど御叮嚀なるお詞も元助めた主人の情慮相のない様腰の物を渡して通れ 衆「黙れ人をあやりし者なるか又は火附盜賊ならば大事な科人とも申さうなれど科は僅か庭木の一枝夫も人の屋敷内へ法外ある杖を延ばし邪魔になる故切つて捨てしを大事の科人とは何たは事又此刀とて何の爲め假令下耶の奉公たり共武士の縁とはむからぬ此様平の魂じやぞよ受取度ば源治兵衛に直さく、送つて受取れと申せ 只「ヤお旦那に直さく、來いとは以前の恩を忘れたる身の程知らぬ野蠻りり眼の物は渡されぬか 衆「胸づくで取つて見よ 只「何を」ト上手の入口より以前の四人出て來り」 太兵衛「ヨリヤ只助鹿相申す邊不禮があつては松田氏へ相濟す 伊「我々案内致す間太「イヤ先生へ 四人「目通りせられよ 衆「御叮嚀なる其お詞假令御案内はムリ升せずとも勝手知つたる此お屋敷何處迄も下耶に於ては 只「アレあんな事を吐しやアがるは 四人「ヨリヤ〇然らば様平斯う參れ 衆「ヘイ

「ト四人襖半を真中に取込み庭口へ這入る」只「ア」襖半め命の瀬戸と分て居ながら且那
 にお目通りを仕様とは餘ッ程度胸のいゝ奴たわい此模様宜しく早い合方にて返し
 造物半舞臺真中家根付の枝折門左右建仁寺垣此前菊の花壇上手壹間半高足の二重小模様
 舞臺より紅葉の釣枝都て矢阪屋敷庭先の模様二重に櫓を敷き源治兵衛住居半舞臺上手寄り
 に竹床机を置き源内刀を引附け腰を掛け居る真中に襖半住居左右に以前の門弟外に門弟四
 人刀を持ち控へ居る静かなる相方にて道具納る 太兵衛「襖半早く」お詫びの致せ〜
 イヤ拙者決してお詫びは致さぬ今では當家の家來にあらす松田秀之進が家來の襖半よし
 や暇は賜はる共科なく詫びるは主人の耻辱松田の家のお耻難なるわい 源内「ヤア當家に於て
 秘藏の梨の木何故枝を打切つた 其」此方の若旦那が木馬の精古の邪魔にある故此襖半が切
 り升た 源治兵衛「黙れ襖半己れ先達御城外にて主の我へ對せし無禮せしも途中の義なれば上
 みを憚り命を助けて暇くれし情を却て恨みに思ひ夫故大事の梨の木をこのれ切つたに相違
 ないわい 其」あなたの機な小量な心比べたらさう思召すでもムリ升せうが遠恨があら
 ば名乗掛け亦傷に及べばとて高の知れたる梨の木位と切つて腹をいれる様な襖半ではムリ升
 せぬわい 源内「ヤイ襖半其方本名を包み當家へ奉公に住込しは宿意があつてに相違なし左
 もあくば襖半と名を偽つてなせ参つた 其」其儀は過日源治兵衛様へ一申上たる通り 源治

身共が武術の極意をば盗みにうせたか 其何と 源内「其望みとば失ひしに遠恨を含み致
 せし事と相違ないわい」コリヤ此源治兵衛は細川越中守殿の師範にして門弟は皆家中の歴々
 己れ如き匹夫下郎に傳へる武藝と思ひとるか 其「アハハハ、井の内の蛙大海知らずと相も
 變らぬ自慢の高言元此向井善九郎にも餘程出来る御仁と聞き通々慕ふて來りしなれ共見る
 と聞とは大きな相違餘人は知らず此襖半其高言は受け升せぬわい 源内「ヤア兄へ對し無禮
 な雑言元より科ある下郎の襖半我々兄弟が手の内今目に物を見せてくれうは 其」手に合ふ
 ものなら仕て見られよ 源内「ヤア返す〜もにつくい下郎め夫へ直れ 其」眞二つに 太「ア
 イヤ暫くお待ち被成れ成程御立腹の段は御尤でムれ共手並は兼て知つたる我々○イヤサ除
 てより申合せしは愛の事 其」兎角欺すに手なしでムれば○イヤサ先生方を欺しすかして我
 々お詫びを致してもお聞入れはあるまいなれど 其「そこは武士は情けにて○ナ夫最前申し
 たは愛でムるぞ 太」夫じやに依て先生には彼が科をお教し下され先生平らに 其「御用拾
 く」 源内「御用拾仕難き奴なれ共各々のお取成し 源内」如何様其詫びの仕様によつては 其
 助け遣はすと仰せ被成るか○コリヤ襖半今聞く通りうちが詫びの仕様に依て御了簡被成れ
 んどの仰せ 其「其方も我を張らすと扱ひは時の氏紳 太」其身に凶事のない内に 其「お詫
 びを致せ〜」 其「常に變て各様の御深切悉くはムリ升れと拙者も主人の腹を取り御當家様

へ参る上からは命は元より抛つ覺悟 本「サ、夫が其方の血氣といふもの感るゝ事は申さぬ程に早く先生へお詫びの申せ 本「夫と不承知と申ては其方から事を好む様なものサ、夫じやに依て 昔「お詫びの申せ 善「左様に仰せ下より升れば主人の耻辱に相成らぬお詫び事で済む事ならシテ其お詫びの仕様といふは 善「先生の前へすつと出て 善「手を突く事は不承知でムリ升るぞ 善「ハテ言障の爲めに頭さへ下げたら夫で 本「詫びの口上は我々が述べて 四人「遣はすわい 善「左様なればお前に従ひ升て 本「得心が通つたらすつと前へ進んで 本「サ、是へ参れ〜」ト手を取に從ひ前へ出て」 善「是で宜しうムリ升るか 善「サ、其邊で宜からう〇諸先生へ申上する今日様平御秘蔵の梨の木を切り升たは全く彼が不調法じやと申し詫びて居り升れば 本「何卒御了簡の程何れもと共に 善「お詫び申上する 源「ヌリヤ様平 源治内「詫びると申す 善「イ、ヤ別に望んでは 本「善「ハテ一寸眼を下げろ〜」 善「ハイ」ト眼を下げると太兵衛逸平抜打に切て掛るを様平腕を取らへ」 善「ハ、大方爰らであらふと思ふた左様様平の命が欲しくば兄弟揃つて名乗り掛け果し合ひをもなすへきに弟子を招らひ歎し打ちとは卑怯な振舞」ト突除ける」 善「大「何を」ト又切つて掛るを引附け」 善「サ、源治兵衛尋常の勝負とせよ 源治「ヤア口を明かせず 源治内「打取り召され 本「いふにや及ぶ 善「イ、イ我々が」ト源内を掛け刀を抜き門弟皆々も身支度となし刀を

抜いて切つて掛るを様平皆々を相手に立廻りト門弟を一々當てる下手の屋敷餅の出し掛より衆敵半身出て」 善「ア、レ旦那様お様様様平殿に亦向ふては猫に掛つた鼠同然あのみまわらハハ、」ト源治兵衛氣をいらつこなし源内も隙を見て切つて掛るを様平無手にて慰む立廻り」 善「ア、レ源内りの面らがよいわいヤ、源治兵衛何で弟の助太刀には出てやらぬのだ手の内拜見〜」 源治「惜つく〜下取り身共が手裏劍受けて見よ 善「望む所の矢取が一流受と打て」ト胸を叩く源治兵衛手裏劍を手箱より取出し」 源内「兄者人早く〜」 善「いふにや及ぶ」ト手裏劍と打附けると様平源内と立廻りながら左の手にて受留り」 善「矢取源治兵衛が手練は是の」ト又手裏劍と打つと様平受留り是より源治兵衛手裏劍を續けて打つと様平始終源内と立廻りながら受留り」 善「是が知行三百石とは片腹痛い 源内「うぬ」ト切て掛けるととんと當てる 善「様平殿見事〜」 源治「モウ此上は」ト刀を取て立掛るを」 善「其勝負は望む所サ、来い」ト胸肌脱ぐと襦袢に褌と掛けて居る 源治「イヤ某が料の成敗」ト双方刀の柄に手を掛け急度なる其中の枝折門より千引纏之助庭下駄と穿き出て来り」 善「ア、イヤ様平先生にもお待ち被成れ 善「ヤ、さういふあなたは 源治「千引纏之助殿彼を討つて捨てされば武士の一分立たざる某 善「其武士はモウ業たつて居るわい 善「ヨリヤ處相申よ、辨越な隣達しに見物致す構慮と思ふか 善「夫でもめあたらつともこらつとも小

「此下駄を、ト足を上げるを横平其儘下駄を挿入」其、ナニ、情をや細之助殿そこ元こそは
 武士の道とは御存じと思ひしに矢取と等しき卑怯の振舞夫さへ品もあるべきに、
 掛けたが何と致したコ、今日切つた梨の枝も主人松田秀之進が官階けならばイヤ知らず
 のれが意趣を暗さんと事を工みし其科は如何で許し置べきや此細之助が情を以て命を代
 へる土足の成敗今と思ひ知つたるか、
 し討ちある此騎下駄元は武士たる善九郎騎下駄を以て面を打たれをりくと長へんや覺悟の
 教せ難之助「ト刀に手を掛ける」
 知行千石頂戴致す細之助汝等如き二合半の出替り奴と相手となし釣替になす命と思ふか一
 度生國へ立歸り身共同輩の武士となり再び當國へ戻れば其時こそは何時でも相手にあつ
 て遣はさう、
 釣合は、時は嫌はぬ何時なり共、
 の一言必ず約を違へるな、
 騎下駄にて脱場とすると其足をどらへ、
 は切捨て御免土足位はなんでもあゝ事、
 け、
 手と扇にて叩くのが道具替りの知らせ横平下駄を持ち急度下下には居置る是を宜しく合方にて

拍子幕

脚本 新規作 肥後木履 前編終

明治廿九年三月十一日印刷
明治廿九年三月十八日發行

(定價金七錢)

版權及發行
所有權

不許謄寫

著作者

版權所有者
兼發行者

印刷者

東京市淺草區七軒町二番地
別號 勝 彦 兵衛

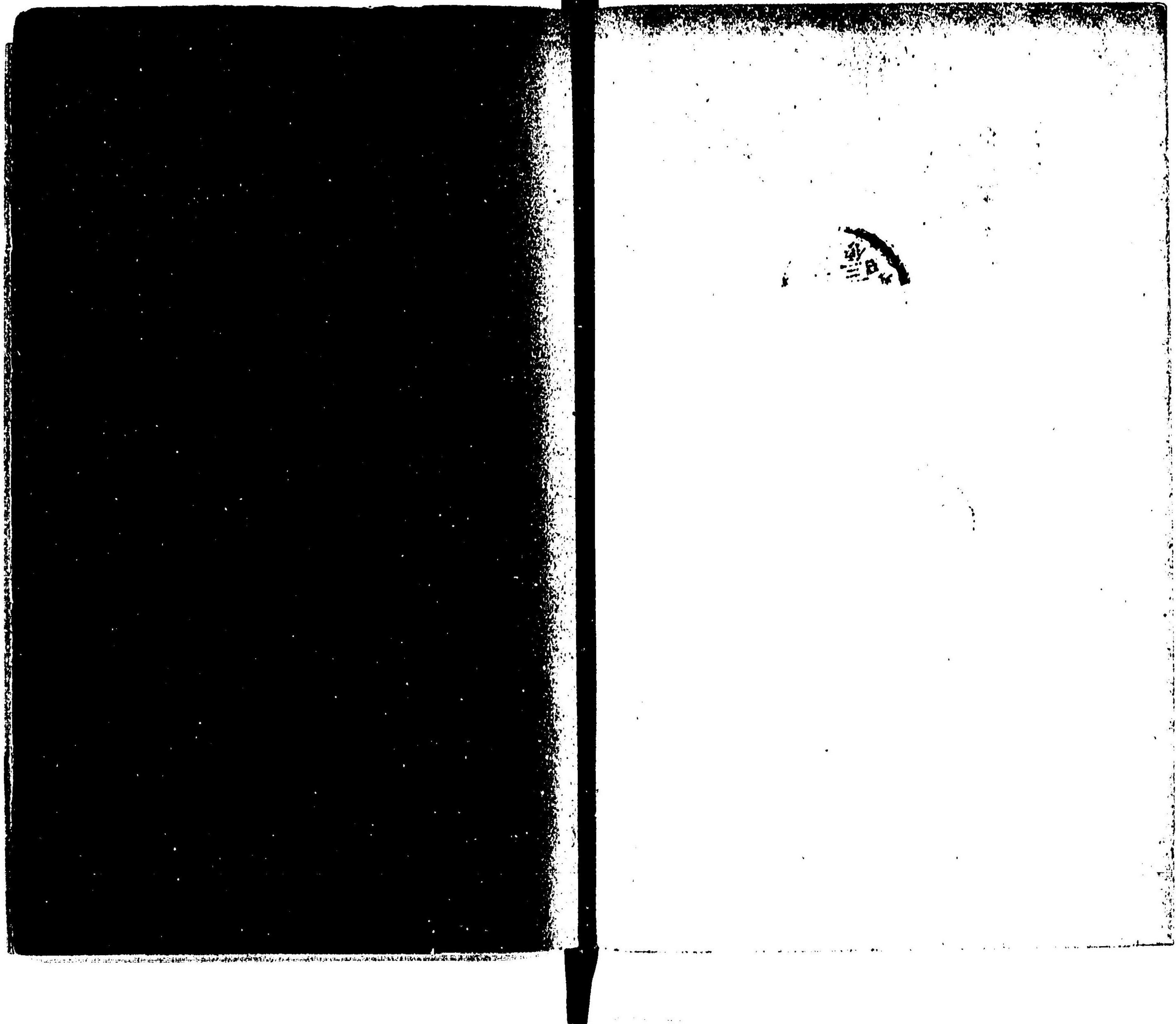
勝 彦 兵衛

京都市上京區袈裟町上長者町上
南條町四番戶

新實八郎兵衛

大阪市東區內本町橋詰町六十八番屋敷
活版製造所聯合會社

前田 菊松



勝 諺藏著作

演劇
脚本

金瓶の今案は
千圓の時計
馴染の情客は
三圓の月給

娼妓誠開化夜櫻 第一輯

脚演
本劇

金額の今案は
三回の時計
三回の時計
三回の時計

娼妓誠開化夜櫻

場 判

本所駒老の場	三社祭の場	橋場別荘の場	中田糺問の場	藤原菅外の場	川西洋遊見世先の場	大黒屋金瓶樓上の場	江戸町一丁目入口の場	吉原仲之町の場
--------	-------	--------	--------	--------	-----------	-----------	------------	---------



演劇 金瓶の今昔は
 千圓の時計
 頭客は
 三圓の月給
 娼妓誠開化夜櫻 第一輯

吉原仲之町の場

役名

一中 田小八郎	一三 宅藤馬
一高 嶋屋嘉右衛門	一五 十嵐信友
一白 馬屋新吉	一諸 士伴右衛門
一新 造今里	一同 大藏
一同 今崎	一同 丹平
一山 口巴幸三郎	一同 段六
一傾 城今紫	一地 廻り三人
一禿 緑木	一大 阪者一人
一同 由縁	一若 い者三人
一遣 手お爪	一山 口下女一人
一若 い者忠助	一智 間四人

一中 田小兵衛	一仲 居二人
一室 積才介	一山 口若衆一人
一牛 窪傳藏	一宿 屋若衆一人

遣物通り二重上下へ本様見附中切りの障子襖上下の襦袢茶盤に四季の花を書きたる帯を張込み軒先き櫻の暖簾同じく櫻の丸の提燈下手の所に三尺の柿の暖簾是に巴の紋左右へ山口と印しあり下手の柱に山口巴といふ掛行燈上下四ツ目垣にばんばりを燈し櫻の立木山吹霧嶋杯の下草日覆より櫻の釣枝兩樓敷の膝隠しへ茶屋の名を記したる暖簾を掛け都て吉原仲の町の模様爰に羽織着流し大阪者の拵らへの仕出し一人菊豆屋と記したる弓張提燈を持ちたる宿屋の若い衆地廻り仕出し三人と争ふて居る是を山口の若い衆下女兩人にて止めて居る名古屋名物の唄にて幕明く 大坂「ヤイ何でかれがどたまをくらはしはつた了簡成らぬく」
 ○「べら稚めうぬらが様な百姓の天窓は叩きなぐつた連尻もみやも来るものか △「こちとらは年中吉原で大店小格子長屋迄面を知られた兄さんだ □「うぬらにけぢめをくつてたまるものか 密着いさエ、どたまをなぐつたわけ道を附けねば成らぬのじやわい ○「ナ、附けてやるは □「其譯道はかうしてやるは「トくらはず」 山口若い者「是はしたりお前方は店先きの迷惑じや 下々「大門の會所にはお廻りさんが見張つてゝムんす 下々「マアお前方も

毎晩く此吉原へ入り込む地廻り負けて通ふすが粹とやらじやわいなア 宿者「成る程さう
いはれると面目ねへ譯だ ○山口の若衆や女中さんの挨拶だ △大負けに負けて 三人サ、
アく行かうく」ト三人は下手へ這入る」 宿者「あなた方飛んだ御厄介に成り升た 大敗
お蔭で早ふ済み升て安心でムリ升る 山者「サ、お前へ馬喰町の臥豆屋の若い衆だつけ
宿者「ハイ左様でムリ升る此お方は上方の衆で吉原の櫻が見物仕たいといはつしやる故案内
を仕て参り升た 下者「そんなら此お方は上み方の衆かへ 大敗「ハイ今度始めて東京へ用向
き乍ら見物に参り升て大阪迄も評判の高い金瓶大黒とやらの今紫とかいふおいらんせめて
道中する所など見たいと思ふて來升たのでムリ升る 下者「そんなら今紫さんの事は大阪迄
も評判がムリ升かね 山者「今紫さんは當時での全盛意氣地が有つて情も深く此吉原で一と
いふて二と下らぬおいらんでムリ升す 大敗「サア夫故どうかお通りの筋に待受けて一寸な
ど拜み度うムリ升 下者「今に仲の町へムるからわしの店先さへ來成さるがいく 宿者「夫は
有難うムリ升後程上り升からか見せ成されて下さり升せ 下者「夫では後ちにお出で成さい
宿者「サアかうお出で成され升せ」ト下手へ這入る」 下者「はんにマアあの今紫さんは名高い
者でムんすわいなア 若者「併し今紫さんといへば横濱の高嶋屋の旦那モウお歸りで有りさ
うなもの 下者「さいなア夫にけふは休暇とやらで海軍の隊長さんも儲かお出に成るといふ

事じやわいなア 若者「成る程五十嵐様もけふはお約束で有つたお前は高嶋屋の旦那をお迎
ひがてら五十軒迄いつて貰はせば成るまい 下者「アイく 若者「ドレわしも奥へ知らして
來やう」ト下女は向ふへ若い衆喜助は奥へ這入る向ふより高嶋屋嘉右衛門派手なる商人の
拵らへ跡より船宿有馬屋の新吉太鼓持四人以前の下女出て來る東の花道より五十嵐信友跡
より三宅藤馬諸士四人出て來り 嘉右衛門「首斗り出來た禿や夕櫻とは今紀文といはれた川岸
の香以が秀吟色ある花にけふも又引かれ郎の仲の町 信友「今王政に職分の休暇にけふも此
里へ木毎の花も盛大の能き世櫻を夕景色 新吉「直ぐな氣性も横濱で粹な生糸の交易に名も
高嶋の親分がさのふもけふも今紫 藤馬「ゆかりの色を賣る身にも客と問夫どの目的は、
エレキの機械ならぞして空で音を出す太鼓持 佳「チンと持込む糸櫻チリタツ飛んだりかへ
つたり △雷門の定店に藤八けんの三ッ打ち 去「ロイく宵から夜中迄夜を盡なる五十
軒 〇「僕も今宵は奮發なし 丹「思ふかてきと應接して 〇「目的定めし相方と 〇「自今馴染
を重ね夜具 〇「重ねた酒の春風で酔ひを散らした花の中さんざめかして 佳「戀の山人
新太鼓「そんなら旦那 嘉右「然らば隊長 〇「又酒びたしと 嘉右「山掛けやうか」ト雙方宜し
く本舞臺へ來り入替る此時新吉藤馬の袖にさはる」 藤「ヤイく平民待て 新「私の事でも
り升るか 藤「サ、官員たる其に不禮を働き其儘行き過るとは不禮で有らう 新「夫は心付き

升せなんだがいかなる危相か眞平御免成され升せ 應「何だ行き當つて氣が附かぬとは育か
 新「エ、だまりやアがれ育といふのは我が事だ官員でも隊長でも遊所へ来るなら来る様に
 身分があれば猶の事忍んで来るが世の大法不斷と違つて此里へ貴賤上下の入込む夜櫻此人
 込みが目に見へねばそつちこそ大盲だ 應「こいつ法外なる素町人まのニツに致してくれん
 新「面白い此仲の町で見事かれを切つて見る御政事届た此時節よつばどおめへも 應「ヤ
 新「舊弊だのふ 應「モウ了簡が「ト右手差しを抜きに掛る」 魚「藤馬殿待つしやれ 應「コレ
 新「吉待たねへか 魚「ハテ扱扱は場所が悪い 應「待アといふたら 應「控へて居やれ 應「只
 今彼れめが不禮過言御覽の通りの不肖者御容赦成されて下さり升せ 魚「ハテ扱扱扱扱では
 痛入り升る斯く遊所へ立ち入つたるも本の遊興若い者は跡先き構はそハテ扱扱扱扱者で
 るは 應「早速の御勘辨大慶に存じ升る 魚「是はしたりお手を上げられい 應「アイヤ先生そ
 りや何事でムる兼てあなたが執心なる金瓶樓の今紫に横番切つた素町人 魚「以前は下賤の
 成り上り 大「横濱開港致してより 魚「俄分限の交易商人 魚「高嶋屋嘉右衛門に 應「詞を切
 り下げ成されては今海軍の隊長と呼ばるゝ先生が怯懦なりと誹謗されては君の宿意が
 四人「相立ち升まい 魚「スリヤ此者が嘉右衛門となふ、 應「コレサお侍高嶋屋の親分なら何
 とする 應「此先生が心をかくる今紫を横番切つた上からは捨て置ては 四人「武士が立た

ぬ 應「べら坊め全盛でも女郎子供は賣物買物特に横濱の大盛と人に噂サも高嶋屋指でも差
 して見やアがれ 應「是はしたりお歴々へ對して危言をいふな言分あればおれがいふ 應「エ
 、しまゝくしいなア 魚「高嶋屋の嘉右衛門とやら改めて面談致さう 應「ハイ〇ンテ御用と
 は 魚「其方は其を定めて存じて居るで有らうな 應「へい此廓でお顔は見受け升が高い身い
 のお役柄は心に掛けねば辨まへ升せぬ 魚「イヤ假令高位大身でも廓の内では隔てはない其
 方に無心があるが何と聞いてはくれまいか 應「イヤモ町人風情の私へ御無心とはいかやう
 な義でムり升るか品に依つたら何成り共 魚「ム、早速の返答先づ過分聞けばそちも今紫に
 馴れ染めて通ふと申事じやが某連も一兩度今紫太夫を招きしが萬事に秀でし今紫其發明に
 某も思案の外の心も空勤務中も夜は忍び通へどつれない彼れが返事そちを男と思ふ故頼み
 といふは愛の事取り持つてはくれまいか 應「私連も榮耀の餘り保養がてらに紫を相方には
 致し升が只一通りの客で馴染んだ今紫戀の色のと狂りつめ熱く成るのは男の情併し遊女は
 賣物買物其傾城が振る客あり中にはもてる客のあるのは女郎は手管客には程女郎に本音を
 出させるのはよつばど粹に成らねば無駄時に全盛の紫を離かせるのは金づくでは無駄な詮
 索お侍さんそんなものではムり升せぬか 魚「スリヤ男と見掛け頼むと申にそちや取り持ち
 ならぬと申か 應「只今申通りなれば此義斗りは私には 魚「ム、よいはモウ頼まぬ高がばい

たの今紫刀に掛けても腫かせるは 蕨そりやあなたの腹にある事十が九ツむつかしうだ
 蕨「ヤイ」武士たる者を嘲弄致すかコリヤ此方の先生は金の威光で腫かせるは 蕨「コレ
 サお侍此青原のいらん斗りは金銀づくで働くものか 蕨「ヤア返すくも不禮な匹夫め
 蕨「此ふれをどうする積りだ 蕨「チ、舌の根切つて切り下る」ト右手差に手を掛ける」蕨「面
 白い切られ様双物と火事を恐れていつちやア此商賈が出来るものかサア切りやアがれ 蕨
 新吉待たねへかお侍もお待ち成され升せ〇モシお侍様こんな野郎を切つた逆刃刀のはれに
 も成るまいせうびん乍ら高嶋屋嘉右衛門わしをすつぱりやらしやり升せ 蕨「コリヤ斯く
 なければ成らぬ所身共とそこがもつれより目下の者に喧嘩を貰はれ餘所目に見てもかられ
 まい此五十嵐信友が手をふるして遣はさうわい 蕨「ム、さうまつしやればわしも本望併し
 武士と町人と出入りをすれば負けるは覚悟なまくら乍ら嘉右衛門が腰を放さぬ一本差し所
 は目貫の花の里取り持つ戀か鯉口の破れかぶれの亂れ焼き沈む命のふちがしら爰が生死の
 仲の町 蕨「花に覺への一腰は七重にあらぬ八重垣流刃と共に散り行く命 蕨「火花を散らす
 は 蕨「互ひの勝負 蕨「イザ」イザ」ト雙方一腰を抜き急度成る替々氣をあせる此内立
 廻り宜しく奥より山口巴の亭主幸三郎出て来て見て床机の毛氈を取つて兩人の双物の真中
 へ冠せ上より押へ」幸三郎「マア」待つたか二人様 蕨「誰かと思へば當家の主じ 蕨「コレ

幸三郎退いて下せへ 蕨「血を見ぬ内は納めぬ 蕨「怪我せぬ内に 兩人「退いた」
 ヤ退かれ升せぬ意氣地を張りの仲の町で斯うした出入りは間々ある習ひ内のお客に誰彼れ
 と仇をろそかはムリ升せぬ別けて大事のお二人り様一人は當時海軍省で一二を争ふ官員様
 又横濱の親方は然も其名も高嶋屋異人交る商法の出入りも知れた高の其金額の今紫見一
 無頭の町人衆と二天下のお役人と分厘争ふ命の取り遣り目安の女子は一人にてお客の二
 人を掛け算に割つて遣入つた私が何方も損の引けぬ様差引勘定致し升る先づ二の段の中直
 り愁ひを拂ふ十六盤の玉簪なる御酒一つよつて九の段ないよふに今日ははつさん成され升
 せ 蕨「流石は廓で育つた其方 蕨「其挨拶が氣に入た 蕨「そんなら此場の出入をば 蕨「いか
 にもそちに 兩人「預けよう 蕨「ヤレ」有難い 蕨「然らば白刃は此儘に 蕨「鞘へ納める主
 の働き 兩人「イザ」ト雙方刀を鞘へ納める」 蕨「是からは店先まで雙方別れて御酒
 一獻其切肴は今紫を呼びに遣つて置き升たれば此お座敷へ参つたならば先づ盃の思ひさし
 それから跡は段々と帯を解かせる其工風の手柄はしがちまつ何よりは御酒の用意を」ト奥
 へ向ひ」幸「夫お客様へ御酒を早う」ト内にて」〇「ハイ」サア御兩所様には西と東
 へ中の行司は今紫 幸「然らば隊長 幸「横濱の旦那様 蕨「ドリヤ酒の座へ 兩人「直らう
 か」ト上下へ別れて住う此内奥より若い衆兩人雙方へ酒肴の蕨の物を并べ仲居二人銚子

を持ち出で住う若い衆は奥へ這入る」
 〇「扱私は真中で仲人役から亭主役お二人様よりお
 盃を頂戴致し度うムリ升 〇「持合はせた盃乍ら 〇「是は有難うムリ升」
 「ト二つの
 盃を受け仲居酌をする呑んで盃を雙方へ取り替へ」
 〇「暫り乍ら五十嵐様御返盃を致し升
 〇「高嶋屋の旦那様時代めき升がお盃を 〇「何かといかひ 〇「世話で有つた」
 「ト酒盛り
 に成る」
 〇「何に致せ私は太夫を是へ呼び寄せ升せう」
 「ト立に掛るを」
 〇「仲居」
 「モシ旦那様
 〇「今紫さんが今道中で 〇「ムんすわいなア 〇「チ、成る程向ふへ見へるが太夫さん〇其
 前祝ひに最一つ頂戴 〇「太鼓持」他人の初り 〇「エ、悪いきつかけ〇ハ、ハ、ハ、 〇「サア大盃で
 初めたく」
 〇「是から酒祝と 〇「皆々」致し升せう」
 「ト向ふより今紫傾城道中の形り三つ櫛の
 下駄此先さへ若い衆今紫と記したる大箱提燈を持ち跡より若い衆長柄の傘をさしかけ禿二
 人のべの烟管を緋鹿の子の袋へ入れて持ち一人は時繪の箕盆を持ち次に新造今里今崎跡へ
 遣手お爪新造二人附添ひ皆々道中の心にて出で来り」
 〇「紫太夫」大鼓舞の唱歌にくるわとはお
 客の来る故に和らぐの心にて廊とこそは名附けたりと太夫の名さへ耻かしい松の位に由縁
 りある今紫のと夕ばへの 〇「今紫」露の情けの夜櫻や操と孝に子を捨てる藪敷のささなくも
 〇「今紫」其片里の廊なまりよう来なんしの梅ならで粹と不粹と見返へりの柳の街た衣紋坂
 〇「今紫」誰もか客を待合の辻占立る盤算 〇「縁木」三箇にして此里は見世すがさの黄昏に 〇「やかり」

四ツ手の鴉の五十軒 〇「勝」思ふか方と大門の 〇「爪」控へ殿しい色里にお茶引く女郎を折檻も
 烟管のらその長詮蹴蹴染みの涙り裏祝儀懸はお爪の掴み取り 〇「ア」お爪とんと仕た事はは
 んに慾氣は微塵もない 〇「時」櫻花も實もある横濱の 〇「高嶋屋」さんのお待兼 〇「又」お一人は
 此里で花には少し禁物な其名も五十嵐信友さん 〇「山」山口でお待兼 〇「紫」そんなら皆さん〇
 子供来や 〇「秀」アイ「ト皆々本舞臺へ来る若い衆忠助出て来る太鼓持皆々前へ出る」
 〇「忠助」是
 は〇「今紫」旦那方は扱置て此山口の親方が首をば長く待兼山口 〇「露助」イヤモウ先刻よりあ
 なた故わつばさつばが出来る所 〇「山」山口巴の親方が味く納めた御酒興中 〇「モ」親方さ
 ん太夫さんがお出でうムリ升 〇「紫」親方さんいつも乍ら世話やかせお氣もじでムんすわいな
 ア 〇「ハ」何の氣兼に及び升せうお前のお顔が見へたので重荷がかりたど申もの何は兎も
 あれ早う座敷へ 〇「兩」モシ太夫さん 〇「一」寸座敷へ 〇「ア」アイ「ト二重真中へ住居皆々宜し
 く住居 〇「高嶋」さん五十嵐さんようこそ今宵は 〇「最」最前より待ち兼てまつたわい 〇「花」の
 時分で引ッ張り厭で有らうがようマア抜けて来てくりやれた 〇「高嶋」さん夕べはきつい御
 慮外を 〇「高」はやつり子は當り前だは 〇「ア」アまたおだてる事わいなア 〇「コ」コリヤ太夫此方
 共の先生へもなんとか世辭を申さぬか 〇「住」いかに當時の全盛連 〇「大」權を振るのが見得でも
 あるまい 〇「丹」客の座敷をてらさぬよう 〇「段」程ようやるが遊女の習はし 〇「馬」マア受へ来て酒

でも呑みやれ 蟹「アイ私しや塵敷取り持ちはとんど不得手でムんす蕨者兼や太鼓持と呼ばしやんせいよう取持ちをするわいなア 蟹「ア、モン太夫さん先づ何事もいぬぬが花魁に以ておいらんは外の女郎と事替りたどへ十人二十人一座が有つても勤めをば大切にするおなたの氣性どちらのお方も花を持たせ跡へ遺恨ない様にどうを捌いて下さり升せ」ト紫迷蔵なる思入れ」 信「コリヤ太夫只今争論も其方故身共の武士を相立てるか 蟹「おれの男を立ててくれるか夫も高が商人故男が捨たらば盟からは此大門を潜らぬ斗り併しおれも横濱では人に知られた高嶋屋 信「其連も刀の手前 蟹「引くに引かれぬ男の意地づく 蟹「モシおいらんつばめを合はすはお前の心 蟹「サア雙方お顔を立てるには 信「此盃を受けてくりやれ 蟹「成る程是は易いお望み 信「今紫も 蟹「受けすばなるまい 蟹「サアおいらんわしも丁度持合はせた此盃清く是をば受けてくりやれ 蟹「雙方お顔の立つ様に 信「武士に 蟹「男に 蟹「致してくりやれ」ト立上り」 蟹「モシ嘉右衛門さんへお前のさした盃からマア頂戴をしやんせう 信「スリヤ其方は武士たるものに 蟹「耻辱を興へる 四人「心だな 蟹「イエ同じお客の其内にも粹と不粹の隔てはあるが勤めする身のマア我儘御慮外乍ら嘉右衛門さんのお盃から受け升わいなア 蟹「ヤイ〜五十嵐を 四人「不粹と申すか 信「ハチ廓の遊女は子供同然心に懸る事はムらぬ控へてムれ〇イヤ何太夫よりも身共に鼻あかさせたな〇不粹に

なしたる返禮に肴致さう」ト火鉢の内の火を狭み」 信「受けてくりやれ 蟹「餘寒を凌ぐに何よりな其火御辭退中は第一不粹御深切を袖にはせぬといふ印どうぞ是へ下さんせいなア」ト縫模様の襦の袖を出す信友其上へ火をのせる」 蟹「コリヤ何よりのお肴じやわいなア」ト是を仕掛けにて袖より煙り立つ 蟹「起りかへつたアノ火をば 信「太夫さんが裾で 蟹「爰が器量の賣り所 蟹「流石は金瓶大黒のお職と名うての太夫さん 蟹「恐れ入つて 四人「ムり升る 蟹「此氣性があればこそ高位のお方もおいらんの名を慕ふてムんすわいなア 蟹「然しかいらん其お肴のおすべりはわたしら二人へ下さんせへ 蟹「五十嵐さんの思召しはあつう受けて置たればお前方よい様に 蟹「そんなら貰ひ升ぞへ」ト火箸にて火をのける」 信「サ、大きな穴が〇ア、コリヤかんと奥いわいなア 蟹「エ、お爪ごん騒ぎなさんな此襦はわいたに依つて誰ぞに上げ様と思ふた所 蟹「イヤ迥れ見上た太夫が氣性不漸そなたがはしがつた佛蘭西の懐中時計今受けた盃の心斗りのおれが返禮」トやる」 蟹「そんなら此間千圓でお買ひ成されたアノ時計を 蟹「四人「太夫さんへ返禮に 信「お上げ成さんすかへ 蟹「高嶋さんの思召し何より嬉しい其時計お貰ひ申て置き升ぞへ 蟹「受けてくれれば有難い 信「流石は町人千圓の時計が何程尊いものか 蟹「根が交易の商人故 信「店ざらしでがなムらうわい 三人「ハ、ハ、ハ」ト信友は革靴の中より百圓札十枚出し」 蟹「今紫些少乍ら身共が寸志」ト出し身

共が出した肴をば袖にて受けたる箱によぐれが見へて見苦敷い其千圓の金子にて着替を拵へて来てくりやれ 蓋、お志しは受け升るが勤めする身に入らぬお金手に取るさへもきたならしい○モシ今里さん此様なむさいものでもはしがるお方があるならば施しになど上げて下さるせいなア「ト金札を前へ投る」 魚、スリヤ其金札を施し施行に致すとか 蓋、サア禿達から親方さんが賤しいものは手に觸れなど香茶の湯腰折れ乍ら敷嶋の道迄救へて下さりて高位のお方のお相手なる今紫でムんすが手に觸れた事のない品故にはしがる人にやる方が功德になるじやムんせぬかいなア 魚、申五十嵐さんあなたを籠略にするのではムんせぬ 蓋「此お金は私等がよい様に捌く程に 魚、悪う思ふて下さるすなへ 蓋、イヤモウいつに替らぬ紫さんの其御氣性御免の場所の全盛は其位の氣高でなければ一枚看板とは申され升せぬ五十嵐の旦那様決してお氣にさへられて下さり升るな 魚、假令いかなる全盛でも今時慾を知らぬといふは時節に逢はぬ女だわい○是より二階座敷にて夜櫻を眼下に見おろし呑み直しと致さうとい 魚、かゝる席におろうより席を替へて御酒宴を 住、いかさま夫が 大、上分別で 四人「ムリ升せう 蓋、表二階は仲之町の櫻を一目でムリ升れば○コレ忠助旦那方を御案内申せ 蓋、ヘイ畏り升てムリ升る 魚、コリヤ太夫此座の事は兎も角も二階へ参つて酒の相手を 魚、成程今紫は先生が揚げ詰の事なれば 住、よもや違背は 四人「申されまい 蓋、

サア其一段は私にお任せ成されて下さり升せ跡よりお連れ申升る 蓋、こつちも是より奥の離れで檢番の藝者を相手に夜と共 蓋、又此間の小三を呼んで 太鼓、浮かれの筋と 四人「出掛け升せう 蓋、モシ嘉右衛門さん私もお前の離れ座敷で 蓋、附合ふてくれる心か 魚、モシ旦那そこがこちらの太夫さんの 蓋、立引所で 魚、ムんすわいなア 魚、コリヤ我々を四人、袖にして「ト急度成る」 蓋、ハテそこが發句にいふ通り傾城の賢なるは柳哉 魚、風に賑くか 蓋、逆らふか 蓋、うはべに見へぬが人心 魚、蓋、何と 蓋、ア、モシ「ト奥へ向ひ」 蓋、お客だよう「ト奥にて」 大、い「アイ」 魚、サアお出で成され升せ「ト信友一座は上手嘉右衛門の一座は下の襖今紫の一むれは幸三郎附いて奥へ遣入る向ふより室積才助半蔵傳藏鏡藏兵の拵へ小さき紫縮緬の包みを持ち同じ拵らへの中田小八郎の手を引き出で來り」 魚、是サ中田逃げ支度をする事はないではムらぬか 魚、「暇争の先手に進むではなし僕がよい所へ御案内申から 小八郎「イヤ僕はチト主君に用事もムれば又も出會の砌りはお付き合ひ申さう 魚、ハテ扱夫は朋友の付き合ひがないと申者君達は遠國の御仁なり殊に廓を御存じないと仰せらるゝ故 魚、室積と申談じて廓中の粧ひ仲の町の道中揚屋入り杯と申ものは中々美なるものでムる 魚、夫を御覽に入れんと大奮發致した義でムる是非く御同意下され「ト無理に小八郎の手を取り本舞臺へ來り」 魚、中田氏今を盛りと夜櫻に軒を並べし茶屋

くはチリカヲツホの大騒ぎ オ彼の稍當のせりふの通り今宵廓の大門を遁入れば忍ち極樂世界 傳何と悪うも 兩人「ムるまいがな 小今日始て拜見致し中々目を驚かしてムるが城を傾ひけ國を傾くるの致へコリヤ餘り善からぬ場所でもり升るわい 傳是ヤ中田氏情慾は身を削るの細なりとはいへど又人情に通ずるは色に非ずば知る事能はずとは賢人の詞 オ本日の休暇を幸ひ 傳引け迄のチョンの間遊び オアノ青樓にて 兩人「碎け給へく 小イヤ平にお断り申す君達お望みにムれば僕は此所にてお待受け申から御兩輩は御遠慮なく僕の心底は動かぬと決定の致しムる 傳ハテ扱是は困つた者じや オ色氣のないには仕方がムらぬ○何と牛窪氏は迄參つたからは 傳君と兩輩連れ立つて オそんなら中田貴様一人は 傳暫時の間此所にて 小お待ち申せムらうわい「ト兩人橋掛りへ遁入る」 小ハア面白さうに騒ぎ居るわい○成程若年の男子の心も狂ふ道理○心の馬は六塵の埃に走り心の穢五陽の街たに熾る○引かれなば悪しき道にも入りぬべし心の駒の手綱ゆるすな○ハテ慎しむべきは色情じやなア「ト向ふより中田小兵衛奔削り羽織旅行の拵へにて出で來り」 小兵衛「扱々當地へ初めて參つたが聞きしに勝る廓の賑ひ連もの事に夜櫻と道中とやらが見たい者じやが「ト本舞臺へ來る」 小兵卒爾乍ら此所が仲の町と申所でムるかな 小去れば手前事も此廓で○チ、兄じや人じやムり升せぬか 小兵小八郎かヤレくよい所で面會の致したわい 小レテ何御用のムつて此廓へか越し成された 小兵サア身共は斯る遊所に用事杯はなけれど○何は格別是成る床机を借り受けても大事あるまいかな 小私も辨へ升せぬが先づお掛け成され升せ「ト兩人床机へ腰を掛け」 小兵扱身共が此度當府へ出張致したは五十嵐信友殿が御所持成される洋學兵書の一條に附いてじやわい 小夫では鐵巻屋敷へお立寄りでもり升たか 小兵去ればサ紀州公滿箱奉還に付き御主人小牧主水様お人べらしの砌りそちが願ひに依り當時東京鐵巻五大隊の隊長をお勤めあれば右御仁の推舉を願ひそちには歩兵に住み込みしお體勞々お目に懸つて參つたわい 小夫は御苦勞に存じ升る 小兵夫より其方が部家へ立寄りし所ドンタにて他行と聞き旅宿へ歸る途中にて五十嵐様に斗らせも數奇屋川岸にてお出合ひ申し 小夫はよい折柄でもり升た私事も先達ての御文通故右兵書の義を五十嵐様へ申入れし所外ならぬ紀州侯の御所望とあれば本書は上みにも御所望なれば寫しにて苦しからずばお譲り申上げんどの義故直様書狀を差出し升てムり升る 小兵サア夫に附いて其方と同道なさんと存せし所斗らせ借友様に御面會申途中乍ら主人松崎頼母様の御書狀等も差上げ金子百圓にてお譲りに相成る事迄取り極めも相濟みし故序で乍ら櫻も盛りと聞き當吉原を見物に參つたわい 小何に致せ御面會致し升て安堵仕り升てムり升る 小兵右に付き某國元へ歸り御主人へ申上金子百圓は其方の手元迄差送る間

十七

五十嵐様へ手渡しなし兵書は陸運會社へ差出す様取計らふてくりやれ 小「畏り升てムり升るシテいつ頃御出立に相成り升る 小「明日蒸氣船にて歸縣致す心得じや然し小八郎其方は生得實直なり勤め向きを勉勵なしたまさかの休暇されば氣の保養も致さじや成らぬが惡敷友と交り斯る場所杯へ繁々参れば終には心亂るゝは世間に間々ある事なれば〇是等の義は其方も心得居る譯必ぞ身共に恐るゝ事を聞かさぬ様仕てくりやれそちが出世を樂しみ居るわへ 小「今日はへ参りしも餘義なき者に誘引されて 小「ハテ其方に不埒なき事は身共よく存じて居る斯様に申も行末を思ふが故親人仁左衛門様の時代より大恩受けし松崎様そちが氣性の賢なるをお見抜き有つて御祕藏の御娘子小藤様へ翁子に成さんと迄の御厚情必ず忘却致すまいぞ 小「よう心得て居り升る 小「何は格別兵書の義は能略なき様相頼むぞ 小「其義は御安心下され升せ 小「明日出航の事なれば用事もたして置かねば成らぬ其方も早う歸つたがよいぞや 小「朋友が参り升れば直ぐ様立歸るぞムり升る 小「然らば小八郎 小「兄者人 小「勤役を相勵めよ 小「畏り升てムり升るト小八郎思案仕乍らこららゝい場所にて逢ふた故餘所乍ら此身へ異見成程眞身は流き寄りじやなア〇サ、まだ育残した事が有つたわいサ、イ兄者人ト戸家口迄行き」〇ア、モウ影も形も見へぬわいの夫にしても室積や牛糞を跡へ殘して行く譯にもならずト奥にて」 馬「サアト太夫さん 皆々」

ムんせいなアト下手より以前の若い者大箱提燈長柄の傘を持ち出る奥より今紫先きに新造遣手禿以前の人數残らぞ出る跡より若い衆下女仲居送つて出る」 小「コリヤ元の所へ往つて待合はさぞばなるまいか 若「仲」左様なれば太夫さん 皆々「御機嫌宜しう 紫「そんなら皆さん〇子供來や 透「アイト今紫は八文字を踏んで花道へ掛る小八郎思案仕乍らこららへ來る若い衆の箱提燈を見て恠りし小八郎入り替り今紫と行き違ひ顔を見て美しいものじやといふこなしにて今紫の跡を見送り乍ら皆々と段々ど入れ違ひ本舞臺へ來り跡を見送つてゐる此内に皆々戸家口へ這入る若い衆仲居は奥へ這入る奥より幸三郎出て來て」 紫「先づおいらんは送り出したがどうぞ跡のもつれに成らねばよいがト本釣廻風の音に成り櫻の花散る」 小「今の女は此里の定めて名ある全盛ならん 紫「金で應かぬおいらんの賢なる氣性は又格別 小「あれでは城も傾けやう名なども聞いて置きたいものじやが 紫「當時の稀なる今紫 小「そんならあれが 紫「エ、ト小八郎思はず跡へ寄り幸三郎の足を踏む」 紫「アイタ、、、 小「是は御危相ト床机へ腰をかける幸三郎恠り飛び退く是を木の頭」 小「美しいものじやなアト天窓を押へる幸三郎は足の指へ唾を附ける此模様宜しく唄本釣鐘にて拍子轟

江戸町一丁目入口の場

大黒屋金瓶樓上の場
同西洋造見世先の場

役名	
一 傾城 今紫	一新造 此系
一 仲田 小八郎	一同 今村
一 山口 巴幸三郎	一同 今藤
一 高嶋屋 嘉右衛門	一地廻り 權治
一 五十嵐 信友	一同 熊五郎
一 三宅 藤馬	一 藝者 松吉
一 有馬 屋新吉	一 藝者 小花
一 室積 才助	一金瓶樓 若い者 清介
一 牛窪 傳藏	一下女 およし
一 旗登 小使文兵衛	一 若い者 喜助
一 貨物屋 利兵衛	一 太鼓持 三光
一新造 今花	一同 宇中

本舞臺平舞臺真中に家根附黒塗の門柱に江戸町一丁目と印したる高張提灯を掛け上手に引手茶屋の入口暖河屋と記したる柿の暖簾青藤を掛け下手千本格子門の内遊女屋の中遠見空より櫻の釣枝毛氈を掛けし床机を三脚並らべ都て吉原江戸町夜るの體權次熊五郎立掛り居る流行唄にて幕明く 熊五郎「そんならまだ高嶋屋の身寄りの者にも突當らねへのか 權次、アけふは黒助様でめつぼう入込だ故どうく途はずに仕舞たが爰に見張つて居てもまだ歸つた様子が見へねへ 然し立往生もして居られぬ揚屋位で引かけ様か」ト兩人門の内へ這入る向ふにて「太鼓持兩人」モシ口那く「ト向ふより清介引手茶屋若い者の拵へにて山口巴の看板提燈を提げ先きに立ち中田小八郎唐物屋息子の拵らへ次に室積才助牛窪傳藏嶋の若附羽織宇中三光太鼓持の拵らへ此跡より小花松吉藝者の拵らへおよし引手茶屋下女の拵らへにて出で來り」宇中「もし旦那あんまり早いあんよではムリ升せぬか 三光、夫に番州迄足の速次チロツくと揃ふ處が妙不思議はベコヘンをやり被成たな 小八郎、ベコヘンとは 三ハテ總隊進め〇と申事 女方皆々、何をいわしやんすぞいなア 清介、サア行き升せう」ト舞臺へ來る小八郎急に頬の差込ひこなしにて「小、アイタ、、、、オ助、ム、中田〇イヤ旦那様 傳藏、コリヤどう被成たのでムリ升 小、胸先へアイタ、、、、 眞、旦那お頬でムリ升るか誰ぞ寶丹でも持つては居ぬか 三、おんぼんたんなら爰にある此三光、傳、よしなせへ面白

くもない 才「旦那の癪なら不斷手掛けて居る此番頭愛を押へたら納るといふ呼吸は大概知つて居るノウ牛糞ではない傳藏氏 傳「さうともく旦那は跡から連れて行くから手前達は先さへ往てくれたがよい 三「そんなら旦那必共共 皆々「鐵炮玉にならぬ様 小「アイヤ、大鼓兩人「サア先鋒繰り出したリく 傳「お早うか出で被成升せ 皆々「陣を取て居り升ぞへト皆々門の内へ這入る」 才「是サ中田どうしたものじや浮々してくれぬか是では結句難有迷哉 傳「君が廓の勝手をば知らぬ依て手引をば頼むといふたは然もかどつひ斯うでもしたら客になるかと工夫を付けて屋敷を抜けて出で丁度今夜三晩じやが最初も夕べも馴染の客が落合たとして断はられ漸う今夜遊べる様に成つたと思へば最前も酒の座敷でふさいで斗り其上廻返起すとはコリヤ君今更否に成たのじやな 小「滅相な其位いなら大枚の五十圓といふ金を今宵一夜さの入用に茶屋へ置いては参り升せぬわい 才「そんなら面白う僕達も遊ばしたがいではないか 小「ソイヤ其筈で御勝導申たなれと身分が知れては客にせぬと最初より仰つたではふらぬか夫故に胸先へアイタ、ハ、オアハ、ハ、君も餘り不甲斐なではないか何も尻尾を出したといふではなし 傳「中田屋小八郎で押切つたればモウ此上はこつちのものじや 小「夫でも宵から附纏ふて居る男大方探りに來たに逃ひふらぬぞや 才「あれが客の座敷を持 傳「此吉原の太鼓持 小「ハ、ア夫でベコベンじやといふたのでム

るかな 才「夫がわいつらの洒落といふもの 小「シテ鐵炮玉といふたのは 傳「早く來いといふ詞 小「洒落にしては惡るいしやれいな 才「夫を押返して負けぬ様に遊ぶのが通ウといふもの 小「其通とは 傳「是は又情ない早い話しが是から揚屋へ往ても兎角連中の困らぬ様に面白かかしふ遊びさへすれば女郎に嫌はるゝ事のない是が遊びの傳授物僕達も通人に成つて來たものじや 小「シテ其通人にはどうしたら成られ升せうぞ 傳「夫には口授口傳があつていふにいはれず説くに説かれ也 才「是さ室積中田が是程頼で居るに早く教へて遣つたがよいはサト金の形をして吞込ませる」 傳「成程思ひ切て許さうが然し此傳授にはレコが入るが 小「ソレヤお話しもした通り國の兄より貰がれし百圓の金子の内まだ爰に五十圓所持致せば金子に厭ひはふらぬわい 傳「相庭の分らぬ譲り物室積はいくら取たらよからうな 才「拾圓くト手を出す」 傳「可愛想に夫では餘り 才「ハチ金を使ふが通り者ツイ此間も千圓の金を客から貰ふたを皆施した今紫爪な客は嫌ひじやさうな 小「何拾圓位なさういな事ぞト紙入より五圓札二枚出し」 小「拾圓で能くムるかト傳藏に渡す」 傳「イナモウよい共く是が本の夢に牡丹餅 小「なんと仰せらるゝ 傳「イヤサもちつと位貰ひたい處なれども是で負て置かな 小「シテ只今の傳授とは 傳「夫は遣々ゆつくりと 才「其割前半分を 傳「夫は僕の爰にあるはサ 小「然れば御兩處ちつとも早う 才「是から又も金瓶樓で 傳「今

夜は夜と共呑明かし、少、スリヤ寐る事は叶ひ升せぬか、才、夫が邸の通といふもの、少、然らば通人は止めに致さう○アイタ、ハ、其處には一つの口傳ありサ、少、何分君をお頼み申、兩人、そんなら中田○ではない旦那、ト門内より清介提灯を提げ出で来り、鷹、へいお迎に参り升た、兩人、サアお出で被成升せ、ト清介先きに三人門の内へ這入る向ふ戸家の内にて、新造兩人、サアちやつとムんせいなア、ト向ふより今花此系新造の拵らへにて新吉の手を引き急ぎ出で来る、新吉、コウ、静かに往つてもいふじやねへか、今、イエおいらん高嶋の旦那が待つてムんせう、此、新吉さん早ういなねば悪るからふぞへ、鷹、何も初めから黒介様へ参り度もねへ者をお前方が連れて参つてくれるといふたからいつたのだが早う行かぬと悪いとは得手勝手といふものだせ、今、此系さんあんな事いふてじや故新吉さんをはつて置て、此、サアムんせいなア、ト構はモ本舞臺へ来る、鷹、タイ、待つた、ト舞臺へ来る上手へ樞次熊五郎出て様子を伺ひ叫さ合此系今花に行當たり、樞次、ヤ、氣を付やアがれ開も月夜の仲の町で、熊五郎、なんでから速に行當りやアがつた、ト新造兩人仰りして捨臺詞にて新吉に廻る、鷹、タイ、兄イ今のは本の出合頭殊に相手は女の事だ了簡してやんなせへ、鷹、べら坊め女を相手にするものか客はどいつだ、兩人、そいつが相手だ、鷹、ついたた女の能相から客と相手に仕様とは喧嘩買の横さい榎買ふ喧嘩なら買りも仕様がマア

勘辨のなる事なら、兩人、出来ねへ、鷹、やかましいわへこんな事のぼくわけにいつもお供に有馬屋新吉見事おいらに相手になるか、鷹、そんなら我は横濱で、鷹、俄分限と名の高い、鷹、ム、高嶋屋の出入の者だ、鷹、樞次ぬかるな、鷹、合點だ、トまささつばにて打つて掛るを引取らへ、鷹、コレ二人共マア先へ行なせへ、今、そんなら新さん、鷹、先さへ行くぞへ、ト門の内へ這入る、鷹、わいらの自由になるものか、ト突放す是より立廻りあつてト、兩人を當て見送りながら出で来る此内兩人腰をさすり乍ら起上り、兩人、旦那、鷹、たわけ面ヲめが、ト兩人を投退けるを道具替りの知らせ兩人は腰をこする吉原雀の相方にて道具ぶん廻す本舞臺平舞臺通り楡形の欄間見付上下共繪襖處々に燭燈を燈し都て金瓶樓廣間の體愛に登に乗せし酒肴の道具を取散らし小八郎思案して居る傍に休藏才助酒を呑み小花松吉附をなし三光清介宇中盃臺の上に金札を乗せ笥を打つて居る太飯入り名古屋名物の唄にて道具留る、半中、三三〇どうだ清介替石に来なよ○モシ旦那有難うムリ升る私が又めてやり升た、ト札を懐中する、三光、清介どん又負たのか、清介、何サ、宇中さんは手がきたないから、小雀、モレ清介どん今度は私が、松吉、敵を取つて、兩人、上げるぞへ、清、イヤこれなり引込ではがう腹だサアモウ一本行かう、才助、よからう、今度は貳圓としよう休藏さん一寸其處へ

鷹「チット承知いつその事参圓としてやらう」ト札を出しに掛る小八郎其襟に使ふてはな
 らぬといふ思入れ」 鷹「ハチヤ是が通ウヒやがな オ「爰が最前の傳授の奥の手サア始めた
 りく」ト傳藏金札を盃蓋の上に乘せる」 鷹「ヤアそんなら今度は参圓でムリ升るか一番腕
 によりを掛けて 三光「チット待つたり今度は僕が代つて行かう 松吉「一寸待ちなさんせ且
 那はどうやらお氣の浮かぬ様子一竿遣つたらどうでムリ升る 小雀「夫が能うムんす巾番頭
 さん且那はお強うムリ升せうなア 鷹「イヤモ鐵炮に掛けては僕等は閉口ヒヤ 松「そんなら
 且那一竿遣り升せうか 小「答とはなんじやな 三光「なぞと且那しらはくれ交易家業を被成る
 か方が知らぬといふて通り升せうか 鷹「サア且那是非共一本 皆々「か始め被成升せ 小八「
 じやと申て僕は一向 オ「成程且那は陰氣な性分だから御存知ないのも尤だ一寸爰で手木を
 出さう傳藏手を出したりく」 鷹「チット承知 兩人「ソレ一ニウ三ツ」ト拳を打つ事あつ
 て」 オ「夫是が狐に向ふが鐵炮是では狐が負けヒヤ 小「ハ、ア成程 兩人「一ニウ三ツ
 オ「夫向ふが鐵炮こつちが名主 鷹「名主が勝ヒヤ 小「何様鐵炮を獵人に形取り大きく取れ
 ば朝敵と申様な理前でムるな○成程 兩人「一ニウ三ツ オ「それ狐に名主○是では名主が
 負になるのヒヤ 鷹「名主は狐につまゝれるのヒヤ 小「イヤハヤ餘程たはけた名主でムるな
 皆々「何をかつしやり升るハア、」ト奥にて」 女形「かいらんちやつとムんせいなア」ト奥

よう今紫領城の拵らへ今藤今村に手を引かれ跡より今花此系番頭新造の拵らへ禿二人時繪
 の箕盆のべの長煙管を持ち出て来る此内才助傳藏は来たといふこなし小八郎衣紋などを繕
 ひ其をのむ」 松吉「小雀「かいらん今晩は 皆々「有難うムリ升る」ト新造左右に別れ今紫領中
 に住う才助傳藏は清介の袖を引き」 オ「コレ若い衆僕達の女郎は 兩人「どうしたのヒヤ 鷹」
 ヘイお部家にでムリ升る 鷹「コレ今紫斗り爰へ来て オ「なせ我々の女は部家に居るのヒヤ
 鷹「ヘイ夫は且那が小川をたしにわいで被成れた時一寸頂戴物がムリ升て○全體わいらん
 方は座敷へお出で被成ぬが大町の習ひでムリ升るが右のそんじよで清介がお願ひ申たので
 ムリ升る オ「面白い金出さうかいら速の女も爰へ呼んでくれ 鷹「中田も中田ヒヤなん段今
 夜の雜費を持つといふてするなら同じ様にしたがよいサア金出すから女を爰へ 兩人「呼で
 くれ」 鷹「モシか前方の様にかつしやつては私が迷惑を致し升あなた方がお供をなされ
 た且那のお相方お呼び申してもよいではムリ升せぬか オ「エ、且那置てくれこんな約束な
 ら誰が一處に来るものか○コレ半鐘伏見町へ出掛け様か 鷹「チ、夫がいうサア履物を出し
 てくれ」ト小八郎は兩人を止めて内障で手を合はせ頼む」 三光「清介さんお履物どかつしや
 るではないか 兩人「止めて上げなさい」ト奥より藤馬出で来り」 鷹「コリヤ今藤く
 「ト此時小八郎兩人をなだめながら思はず見て」 小「ヤあなたは 鷹「そちは 兩人「南無三仕

舞た「ト花道へ逃げて行くを」 藤「コリヤ待て〜待ちからぬか 兩人へエ、藤「コリヤ途方もない奴が参て居るぞよ」ト上手へ住う下手の内にて」 文兵衛「イヤ大事なものでムリ升る」ト下手より文兵衛鏡臺部家小使親仁の拵らへ利兵衛貸物屋亭主の拵らへにて紺風呂敷を肩に掛け出て来るを喜助若い者の形りにて止めながら出て来り」 藤「モシ何の御用か存じ升せぬがお座敷へ通し升ては店の者の不調法マアお待ち被成升せ 文「イヤこなさんの不調法にはせぬ何でも其小八郎といふ男に逢はねば有譯がないのじや 利「今山口巴にて探つて見た處なんでも爰の内へ来て居る様子文兵衛殿どうぞ座敷を尋て下され 文「宜しうムり升る」ト文兵衛行掛けて俯向いて居る傳藏に聞さ」 文「エ、こんな處に何をして居るのじや○ヤお前は室積さん半蔵さん 兩△ム、貴様は文兵衛か 文「借はお前方も小八郎さんと一處じやなモシ利兵衛さん此着物も覺へがあり升せうがな 利「ム、夫もわしが貸た代品物損料は棒にふる早く代品物を脱がせて下され 文「宜しうムり升るサア着物を脱いで下さいオ、コレ〜文兵衛 藤「コリヤ中田から 兩△借りて来たのじやわい 文「サア夫で私が迷惑するのじや脱で下さい〜 藤「そちや小使の文兵衛ではないか 文「本に三宅の旦那様そんならあなたも中田さんと 藤「何を馬鹿を申○只今是へ参て見れば我隊中の歩兵の者其斯様な遊里へ参るべき身分でないに文兵衛如何致した義じや 文「イヤモウ隊長様聞いて下さ

り升せ○一昨日の十二時頃中田さんのおつしやるには國から知る邊の者が尋ねて来て旅宿迄来てくれとの急使ひ事に依たら出世にもなる話し故身形も飾つて行きたいが洋服を拾圓の質に曲げてある故其替物の工面が成るまいかとの私へのお頼み不斷正直者と思ふて居る故爰に居る貸物屋さんにお頼みして貸してくれたがあの二人が着て居被成る着物をムり升るモノか二人さん小八郎さんに逢はして下され 兩△中田は夫に居るがな 文「エ、○ヤ、小八郎さん何じや藤の物の下へ頭を突込んで○ハ、ア面目ないのじやなサア爰へ出て下さい」ト無理に前へ引出し」 文「コレ小八さんお前よりも年寄を欺して下さつたのモノ隊長様其時小八郎さんが未だ夫斗りでは足らぬといふので一處に連れて往て羽織に帶着る物と懐中時計迄損料はなんばでも大事ないと併りたは一昨日一夜の約束夫故貸物屋からは矢の催促部屋へ行けば連れぬ用があつてお暇を願ひ出たといふ故門番へ往て尋ねて見たれば實は斯うじやと教へてくれた故陸をいはぬ其證據に利兵衛さんを連れて来て見れば小八さん女郎買どはあんまり年寄を馬鹿にさつしやるな 藤「スリヤ此衣服は其方が借りて遣したと申のか 文「ハイ 利「其代品物を取らうと思ふて態々参つたのでムり升る 藤「そんなら濱の唐物屋 三巻「中田屋小八さんといふたのは陸で 皆々「歩兵様でムり升るか○ヤア〜」 藤「ソレ文兵衛彼等の衣服をはいで仕舞へ 文「サア利兵衛さん脱がせなされ 利「サア皆脱

がつしやれく「ト着附を脱がせる二人は木綿の一つ着兵見帯小八郎はシャツ一つ着になり俯向いて居る上手の袖を明け五十嵐信友伺ひ居て」五十嵐「今紫是に居つたか」ト今紫立上り行掛けるを」五十「今紫どれへ参る」今紫「アイ私しや部家へ」五十「身共がいやさにはづす心か」今紫「イエあなたにお氣の毒故」五十「何で身共に」今紫「お前の事じやムんせぬあのお方の事いなア」五十「何と」今紫「子供來ヤ」小八「アイヤ今紫殿一寸待つて下され顔を合はすも面目なけれと今別れては又いつか逢ふ事ならぬ心の切なさマア一通り今紫殿聞いて下され」某は和歌山の舊藩士小牧主水の家來にて中田小八郎と申者隊長の御前にて申上るも面伏せにはムれ共然も先月どんたく日足なる兩處に誘はれフト見染たる今紫殿〇見る際もなき少給の歩兵如きが全盛の君に思ひを掛けしとて及ばぬ事一夜遊ぶに五拾圓と朋輩の詞が能き意見と思ふ矢先へ國元より届きし金は夫なる隊長五十嵐公より兵書とば申受けし主人の川金閣に迷ひし小八郎後ろ暗き事ながら文兵衛を偽つて併りし衣類は此廓の勝手を知らぬ在處者手引に頼みし各々へ我國元より貯へし着類といひし空言も君に一夜の添臥しがしたいばかり斯く逆思ひし望みも切れ斯く願ては客にせぬ料と聞けば此儘に別るゝ僕の心の切なさ推量をして下され」ト此内今紫涙を拭ひじつと思入れ」五十「誠に心附ずに居たがそちは此程身が處持の兵書の事にて來りたる兵隊の小八郎とやらであつたるか借は

國元より送りたる金子を持つて今紫が」小八「何れ兄共談合の上金子調達仕れば」其義は兎もあれ汝が罪科掟を破りて遊里へ通ひ加之衣服を騙り盜賊同然の其仕業屋敷へ引立て其方を吹擧なしたる身が相役松崎頼母へ屹度掛合ひ處置を附ねば相成らぬ才助傳藏も同罪なるぞ」オ「イヤ恐れ乍隊長様僕共は小八郎に唆かされて参つたのでムり升る」傳と申證據は只今の着り物何にも知らず参つたに毛頭相違は」兩人「ムり升せぬ」傳「ム、さうあらう平日身共が目鏡に叶ひし其方廓へ立入るべき者とも覺へず」左すれば彌々重罪の小八郎引立て参れ」兩人「畏てムり升る」オ「隊長の仰せ付け」兩人「キリく屋敷へ」ト奥より幸三郎出掛り様子を伺ひ居て」幸三郎「モシ一寸お待ち被下升せ」傳「科を犯せし夫なる小八」オ「屋敷へ連れを」兩人「なせ止める」幸「失禮乍ら旦那方のお爲を思ふて」傳「五十「何と」オ「早い話しが斯うでムり升る」〇此お方が今夜で三晩私方へお出で被成て今紫を買はせてくれと違つてのお頼み處を聞けば横濱の唐物屋との始めの觸込み先づ最初五十四今宵の入川是で頼むと宵拂ひ實は金に不正はなけれ共掟を破りし其科で屋敷へ引いて行くとの事表立つては第一番に隊長様の三宅様五十嵐様にも掟を破りて廓へお通ひ被成し科は遁れぬ様に思はれ升る」〇何も忍の御愉快にお役目向きとかつしやるは日頃の粹にも似合はぬお詞野暮は垣根の外に構へ水に流して旦那方どうぞ濟ませて下さり升せ」五十「事を分けたるそちらが詞藤

馬殿コリヤ幸三郎の詞を立て許して遣らせば相成るまい。鷹「そちに免じて許してくれうは小八」幸三郎殿とやら千萬忝う存じ升る。鷹「然し其形りでは居られまいコレおよし愛の旦那に着物を一枚借りて来てくれ。およし」畏り升た。「ト奥へ遣入り能處にて出て着せる」。利「腹立粉れに損料は入らぬといふたが五十圓を茶屋へ預ける位なら損料賃も貰はにやならぬ。鷹「成程コリヤ尤じや私も初めの約束通り禮を貰ひ升せう。鷹「チ、其損料は私が拂ふいくら遣たら心が済むのだ。鷹「一晚が一圓二分の約束故。利「夫が三日で四圓二分。鷹「又小使の文兵衛に二分の禮を呉る約束。利「合せて五圓。鷹「貰ひ升せう。鷹「そんならたつた五圓の金かサア此金を持つて行かつしやれ。「ト紙入より五圓札を出して遣り掛けるを」。小八「ア、コレ金子なれば未だ是に持參致せば」ト出さうとするを」。鷹「イヤ宵にあなたがお預けなされた金が大分餘り升るサア五圓の金を拂ふたら自分あるまいがな。利「金さへ貰へば自分ないのじや。鷹「是からはおれが言分いはねばならぬ。鷹「エ、鷹「サ茶屋へ一言の答へもなく揚屋の座敷で客人に能も耻をかゝせたなア連れの二人も其通り何も彼も見援いて置いた是から言分いはねばならぬ。○とサイふ所を虫を堪へていはねへかるとつとといいで貰ひ升せう。利「歸らなかつてどうするものか然し棒にふつたと思ふた金何處ぞで一盃文兵衛さん引掛けて歸ると仕様。鷹「酒と聞いたら何より結構隊長様のお出でとは知らぬに參つていか

ひ失禮致し升た。鷹「歸るなら階子があふない私が送つて進せ升せう。鷹「清介およし貴様連は嘉右衛門様のお座敷で御用を聞いて来るが、中「高嶋の旦那なら三州夕べのお禮を兼て。三「鷹「御挨拶に往て來升せう。松耳「そんなら一處に。小佐「私等も。清「左様なら旦那様。利「どなたもおやかましうムリ升た。およし「サアムんせいなア「ト利兵衛着物を風呂敷に入れて脊負ひ文兵衛喜助附添ひ下手へ清介字中三孝女形は奥へ遣入る」。オ「隊長レテ小八郎は。鷹「如何計らひ升せう。鷹「外に尋る子細もあれば座敷へ引立て張番致せ。鷹「畏つてムリ升る。鷹「イヤ此お方は幸三郎へおかし被成て下さり升せ今宵一夜の勘定は戴いてあるお客様やつぱり中田屋小八郎といふ人に座敷で逢ふたと思召しせつない話しの心をば扱でどうぞおいらんも今宵一夜はしつぱりと逢ふて上げて下さり升せ。鷹「いやでムんす。鷹「エ、今「私もちつとは此郎で名を知られたる今紫阿房らしい歩兵さんのお客に出られるものか出られぬものか大概推して下さんせ私しやいやでムんすわいなア。鷹「成程コリヤそうありさうな筈。○サ今紫身共と一處に。今「私しや嘉右衛門さんに用事がある故。五「跡から參ると申のか。今「ハイなア。五「イヤ高嶋屋と承はれば敵向ひの客の意氣張り是非共身共が。今「エ、モ置て下さんせいなア「ト立上ると」。鷹「そんならわしの頼みを聞いて。今「エ、モ知らぬわいなア「ト今紫つんどして新造禿附添ひ奥へ遣入る」。五「成程彼は片意地者只

借つきはあの嘉右衛門旦那の返報今宵こそ 鶯「イヤ其儀も座敷へ参てから 五十」如何様左様致でらう 鶯「コリヤ其方共も一處に参れ オ」有難うムリ升るあの様を御らうじろ四人ム、ハ、ハ、ハ、ハ、「ト五十嵐先きに藤馬喜助傳藏付添ひ上手障子家體へ這入る幸三郎奥へ行かうとするを」 小八「屹相して何れへムるぞ 鶯」あなたを此儘歸してはお氣の毒故今一應 小八「其御深切は忝なけれど今紫の詞を聞き迷ひの夢が覺り升た此お禮は何れ其内に今宵は此儘歸り升る 鶯」成程夫がお身の爲め必も共に此後は廊へ足を向けてはなり升せぬと私が意見をしては定めし家業になるまいと思召すでもムリ升せうが夫もあなた人により升最前奥で聞き升たれば今宵御持參被成たは御主人様より預りし金子の様子此五十圓を持つてお歸り被成升せ「ト金札を出す」 小八「イヤ是は今宵の入費僕が受取る謂れがムらぬ 鶯」イヤ女郎も買はぬに大枚の金子を客に使はしては茶屋の冥利に盡き升る 小八「イヤまた其外に三十圓使ひ捨てたる主人の用金とても此度の用に立たねば是は矢張りお納め下され又先刻の五圓の金何卒是にてよき様に 鶯」さういふ事なら此金子頂戴しても置き升せう 小八「又使ひ残りし十五圓是は今紫へ今宵の花に「ト金札を出す」 鶯」夫は無駄なあんな女郎に 小八「イヤ此郎の名残りの餞別よきに傳へてお渡し下され 鶯」夫程迄にをつしやる事なら叩き付けてやり升せう 小八「左様なれば幸三郎殿 鶯」モウお歸りでムリ升るか 小八「御

縁もあらば又其内 鶯「ヘイ〇お目に掛るで「ト立上り膝を叩くを木の頭」 鶯」ムリ升せう」ト此見得宜しく相方にて此道具ふん廻す

本舞臺平舞臺三間の障子家體上手同く障子家體此前の柱に火の用心と印したる掛行燈下手押入付きの障子家體此内蒲團枕いつもの行燈灯し置あり都て今紫部家次の間の模様時の鐘にて道具納る「ト上手より嘉右衛門湯形なり上草履を穿き跡より今藤新造の袴らへにて手拭を持ち出で來り」 嘉右衛門「ア、いゝ湯であつた 今藤」此頃の風呂番さんは評判がようムんすわいなア 鶯「あいつは第一世辭者で脊中を流してくれる鹽梅山出しの様には思はれねへ 今」此間迄湯屋町の風呂屋に居たのでムんすわいなア〇おいらんが待つてムんす部家へ行きなさんせいなア 鶯「サア行く事は行くが爰で風を入れて行くど仕様時に今藤さん新吉野郎がそとへ往た様子だが宵の内に間違を仕た事もあるから清介でも頼んで早く寐る様にいふて下せへ 今」新吉さんは歸りなさんせいしておいらんの部家に遊んでムんすわいなア 鶯「夫じや己も安心だそんなら次の間に寐て居いといふて下せへ 今」アイ〜「ト嘉右衛門の着物を置き障子家體へ這入る」 鶯「今風呂の行き掛けに廣間の座敷のどたつきを障子越に覗いて見れば其人は以前をろ付て居た時分大恩受けた中田小左衛門様の二番の御子息兄御の小兵衛様へは去年大和を廻つた時紀州へ廻つてお目に掛り以前の話をした時に弟の

小八郎は當時東京鐵道の歩兵と成て居るとの話しツィ商法に取紛れろくく尋ねもしなんだが今の座敷の様子では今紫を見た處から使つた金は五十嵐が處持なす兵衛を國元から譲り受けんと届けた金〇こいつは工風をせねば成らぬはいト障子家體の内より禿ゆかり出で來りウツリ高嶋さん花魁が待てムんす 萬々、ゆかりかかれも今行かうと盲ふ所だ〇ア、寒く成つた着物でも引掛け様かいト以前の着物を着て兩人這入る上手より小八郎出で來り小八コリヤ餘程夜が更けた様子夫にしてもどれより上つて來た事か階子の口がどんど分らぬ誰ぞに出口を聞き度いものじやがト才助傳藏酒に酔ふたこなしにて出で來るを小八郎悪い者が來たと盲ふ思入れにて花道へそつと行く傳其處へ行くのは兩人、中田じやないか 小八エ、オ、ア、迷ひなし今紫に嫌われ客く傳唐物屋の若旦那番頭が目に掛り度い 小八何御用かは知らぬ其心も急げば オ是さ隊長の御用だぞ 傳來いと言ふたら 兩人來やアがれト無理に本舞臺へ連れ來る小八シテ僕に御用とは オ隊長のお使は上使だぞ頭が高いト小八郎の天窓を押附ける小八是はしたり何を被成る 傳頭が高いから下げろと言ふのだト又押附けるを小八郎起上り小八室積 傳何んだト小八郎氣を替へ小八御冗談被成るよな 傳是さ都て君は物事を茶にする故それで今紫に入をかまされ隊長の前で耻をかき升るは其處で上意の趣は能い氣味じやとムり升

はハ、ハ、室積便所はどこだ オサア僕にもさつぱり分らぬ 傳コリヤ堪らない様に成た便所はどこだく オサア夫なら一所に行かうト上手へ這入る小八エ、悔やしいわいくト正面の障子明ると内にて傳モレ旦那わつちや爰で寐升から用事がムり升たらか呼なすつてかくんなさい 今傳私等も爰で新吉さんと雜子寐をする程に 今傳花魁其處で 兩人おしげり成さんしへ 小八今花魁と言ふたのは今紫の事か知らん定めし客は高嶋屋とやら儲は向ふが今紫の〇ア、モウ思ふまいく 傳皆寐なすつたら明りを消すよト才助傳藏伺ひ出て傳藏火の用心の行燈を消す小八郎暗がりのこなしにて障子を明けに掛る此内に新吉今藤今村彌圓の上に枕をして寐て居る小八郎三人を踏越て正面の襖を明けに掛る内に嘉右衛門待つて居たと盲ふ思入れにて小八郎を捕らへる小八ア、モレト逃げやうとするを傳泥坊だ新吉起さろ 新吉兩人、アレエト逃げて這入る傳何だ泥坊だ 萬同類が其所等に居るだらう 新合點だト兩人逃げて這入る新吉追つ掛けて行く小八全く手前は 萬、滅多にかのれは逃がすものかト小八郎の手を引付るのが道具替りの知らせにて此道具ふん廻す

本舞臺平舞臺三間の正面今紫部家上下障子家體真中に六枚折屏風二枚立切り有る此中に三重夜具夜着少し上手衣桁に襦を掛け其前に手箱内に千圓の時計を入れてある事隣りに朱塗り

の絹張り行燈を灯しあり道具納る。「ト嘉右衛門小八郎を屏風の傍へ連れ出で来り」
 花魁泥坊は捕らへた 小八「全く手前は 茲此泥坊はお前に預けるせ」
 「ト突進る屏風のわわいより今紫伺ひ居て小八郎の手を捕らへる 茲其處で緩つくり」
 「ト屏風をしめるを木の頭 茲詮議を仕なへ」
 「ト嘉右衛門しんどきこなし此模様宜しく道具ふん廻す

本舞臺元へ戻る前側障子建切り有る爰へ才助傳藏走り出で来り 傳「ヤレ」
 室積命は有るか 才「どうやら息は通ふ様じや」
 「ト藤馬着流しの拵らへにて出で来り」
 傳「夫に居るは才助傳藏でないか何の致し居る 才「隊長様イヤモウ飛た目に逢ひ升た 傳「最前御酒をたらふくに頂戴致た所から小用乍ら此廊下をぞめきに参り升た所が小八郎に逢ひ升た 才「コリヤてつさり今紫へ趣意でも返す心かどか」
 伝「居たも一ツは酒の酔紛れ 傳「又二ツには今紫に若しも無法な事でも仕たらあの際長松崎をしくじらすには能い」と思へど爰は眞暗かりで何じややら譯も分らず泥坊と小八郎めが捕らへられ今盜賊の詮議最中既に僕もまきぞへを喰ふ所を漸う逃出して参つた所へあなたのお出事に依つたら小八めは盗みに遁入つたのかも知れ升せぬ 傳「如何様今宵使ひし金は五十嵐君の昔癖をば譲り求る金子と聞く左すればさうかも相知れぬ吹擧なしたる松崎頼母を免職さすには能い手筈然し其務りしは其方共に密々に頼み度き一義が有つて 兩人「シテ其御用と仰つしやるは 傳「耳を貸しやれ」
 「ト叫く」

才「そんならアノ高嶋屋 兩人「嘉右衛門を」
 「ト後ろの障子を明け嘉右衛門新吉一寸伺ふ事有つて障子をめる」
 傳「サ、サ彼れは五十嵐君の戀の邪魔今紫を身受致す相談ある由明朝の戻りを待受け仕舞を付けてはくれまいか 才「夫は何よりか易い御用 傳「定めて御徳美がムリ升せうな 傳「夫を首尾能く仕かゝせなば五十嵐君より申受けて遣はすが然し小八が義に付いて未だ尋ね度き事もあれば座敷へ来やれ 兩人「サアお越し被成升せ」
 「ト三人搜り乍ら上手へ遁入る嘉右衛門新吉跡見送り乍ら出で来り」
 新「旦那 茲そんなら宵の喧嘩仕掛けは 新「アノ侍りが仕た仕事 茲翌の歸りを待つと言ふ 茲今の断しの様子では 茲用心しろ」
 「ト今村手ばんばりを持ち出で来り」
 今村「旦那さん只今お床が 茲何だモウ大分早いの 新「夫にしてもさつぱり分らぬ今夜の一條お前の言付け通り遣つたが一體旦那アノ男は 茲「あれはおれの恩人筋よ 新「旦那あなたのお 茲是さ〇」
 「ト押へるが木の頭」
 茲「斯う言ふ譯だ」
 「ト首ひ乍ら此道具廻る

本舞臺今紫の都家へ戻る「ト今村今藤上下より出で来り獨吟の切と一所に屏風を開く爰に蒲團の上に今紫小八郎並び居る」
 兩人「花魁何ぞ用が」
 「ト今紫川は無いと顔にて知らず兩人下手へ這入る」
 今「小八さんなせ其様に置みて居やしやんすぞいなア 小八「思ひも寄らぬ詮議に掛り候生前の望みを達し斯様な悦ばしい義はムらぬが僕は頼と譯が分らぬ 今「小八さ

ん○なせ女房へ其様に遠慮を仕やしやんすぞいなア 小八「何と言はつしやる 今「惚れたぞへ 小八「エ 今「惚れたも無理でムんすか最前聞た切ないか嘶し賤しい此身を夫程迄アモ深切なお方じやと心に思へど其座敷に居合すお方はあなたの隊長殊に何やら御主人の御用で沓物をお求め成さんす主は私が嫌ふ客五十嵐さんの居る前故わざと其場で荒々しう言ふたはあなたを留度い斗り部屋へ戻つて斯うと嘉右衛門様に談合したれば斯うせいどのお差圖受けたもお身に難儀の掛らぬ様こつそりあなたに逢はう爲め 小「そんなら僕を盗賊と言ひしも此身の爲めを思ふて 今「末の約束して置き度さまいやであらうが年の明いたら私を女房に 小「あなたを嫌ふ程なれば何で主人の金遣使ふぞ夫が眞實誠なら願ふてもない事なれど逆も女房には持たれまい 今「夫りや又なせでムんすへ 小「養ふ事が出来升せぬ 今「エ、小「サア儘か月に三圓の少給勤めの小八郎養ふ事が出来升せぬ 今「サア其處がお前と一つの談合只此上はお前をば心の内で夫トと思ひ年々の明くの待つ程にお前もどうぞ是からは勤大事に出世彼成其上夫婦一つに成る只行末を樂みに辛抱被成て下さり升せ 小「今紫殿忝ない僕も今より勉強なし月給十圓に出世する迄決して逢ひに逢るまい其替りには替らぬ様に 今「私に替りは無けれ共替り易いは男の心 小「減相な何の僕が左様な事を 今「然し斯うして約束すれば固りの印に身に付いた物を私に下さんせいなア 小「と言ふて見らるゝ通り持合すは此手拭に紙入斗り 今「イエさうぞ其肌着を 小「此シャツかな「ト傍に脱捨あるシャツを見て」 小「イヤ此様な物をさうして印に 今「イエ夫が私の望みせめて夫をばお前と思ひ肌にかけて居升わいなア 小「二月餘りも洗はぬ此シャツ餘りと言へば垢染みて 今「夫が私の望みでムんす 小「望みと有らば是非ない事爰へ出すも耻かしけれども幾久敷受け下され「ト出すを」 今「嬉しうムんす○是を私が着て居ればお前と一つに居るも同様 小「甘へ過ぎた事乍ら僕にも何ぞ不用な品を 今「待つて下さんせいなア「ト手箱より千圓の時計を出し」 今「持ち古しでは有るなれど私と思ふて身を離さるぞうぞ持つて下さんせ 小「左様なら此時計を○是は見事な時計の掛らへ○イヤ斯様な品をお貰ひ申ては済み升せぬ何を僕に相應な 今「イエ御辭退成さつては迷惑致し升るぞうぞ是を 小「夫セやと申て 今「是ではお氣に入り升せぬか 小「何のマア左様な事が 今「左様でなくば私と思ふてお持ち被成て下さんせいなア 小「左程に仰つしやる事なればお貰ひ申て置升せう「ト時計を懐中し」 小「とは言ふものゝこつちは儘か一分二朱の 今「お前の肌着と取替へて置くが互ひの固めの印し「ト鴉笛を入れ新造兩人出て来る」 小「アイヤモウ鴉屍夜明ぬ内に 今「そんならモウいなしやんすか 新造兩人「モウちつと遊び成さんせいなア 小「サアいにともなければ明けなば屋敷が 今「應」とは言へあんまり 今「村」本意ないお別れ 小「又の逢瀬は身儘に成りし

今「其曉の廓のさぬぐ」 今「せめて別れに 兩人」小八さん 小「アモ時間が後れては 今」アレまだ早いわいなア「ト手を取る學校の太鼓四時を打つ」 小「今打つ太鼓は 兩人」體に花魁 今「イエ未だ三時じやわいなア」ト今紫は小八郎を下に坐らせ後ろより見おろす小八郎は時計を出し蓋を明ける是れ一時の木の頭」 小「四時が餘程廻つて居るわい」ト今紫新造のさして居る櫛を借り小八郎の髪を解くが刻みにて此仕組宜しく道具幕を冠せる「ト跡雨車にてつなぎ道具出来次第道具幕を切つて落す

本舞臺總西洋造り三階の體正面の上に金瓶樓の額硝子燈一對掛け所々に櫻の立木同じく釣枝都て金瓶樓入口夜明の模様相方にて道具幕切つて落す「ト内にて」 大どい「新吉さんモウお歸りでムリ升るか 新「何さ山口迄一寸往つて来るのさ 大どい「お早うお歸り被成升せ」ト新吉金瓶樓と印したる提灯を提げ出で來り」 新「高嶋屋の親方も餘ッ程遠て者だ紙入の中に大事の書き物が入れて有ると言ふに茶屋へ置いて來ると言ふが有るものか一走り往つて來てモウ一寐入り遣らにや成らぬへ」ト地廻り熊五郎何ひ出て」 熊五郎「野郎め 新「エ、又うせやアがつたな」ト見事に返へし」 新「徳利野郎め」ト向ふへ道入る」 熊「エ、待ちやアがれく」ト向ふへ走り道入る又内にて」 大どい「お歸りだよ ○「左様なら御機嫌宜しう 小「いかひお世話に成り升た」ト小八郎腰へ手拭をぶら下げ青原下駄を履き金瓶樓と印したる

番傘を提げ出で來り」 小「世に傾城は薄情との噂さは兼て聞き乍ら其戒めも打忘れ思ひに思ひし今紫聞きしに勝る太夫の誠迷ひの念は晴れたれど直ぐ又思ひが忘れられぬわい」ト二階の内にて」 新造兩人「モン花魁おふなうムんすぞへ」ト相方に成り正面二階の純帳を切つて落す内に今紫今藤今村手ばんぱりを持ち居て」 今「モン小八さん 小「ヤさう言ふ聲は太夫殿 今「あんまり私しや本意なさ故 兩人「お見送りに來升たわいなア 小「何かとお世話に 今「お近い内とも言はれぬお別れ 小「何れ其内 兩人「お文の便りを 小「夫りや早速に端書でなり共 今「夫を私は楽しみに 小「どうぞ最一度」ト鷄笛に成り小八郎チ、と花道へ走り行く今紫モンと言ふて高欄に寄り掛る小八郎傘を撒ろげる新造兩人ばんぱりを突出す此途端木の頭にて雨車相方宜しく拍子幕

中 田 糺 岡 の 場

役 名

- | | | | |
|----|---------|----|-------|
| 一中 | 田 小 八 郎 | 一小 | 川 幸 吉 |
| 一三 | 宅 藤 馬 | 一兵 | 本 三 人 |
| 一松 | 崎 頼 母 | | |

造物平舞臺正面雲母形の襦上手板羽目下手九尺の物置羽目通りサアヘル帽子掛け前へ小鏡

を並べ真中にサーブル白金巾を掛け椅子を澤山置き兵卒□も椅子に掛り洋書を讀み○は椅子に掛り乍ら小銃を拭き△は寫眞を見て居る合方にて道具納る △「君さう勉強せよとチト別品を見給へ □「さう妨げをされるには困るて △「是は其失敬ト○は小銃を拭ひ仕舞ひ」
 ○「此藝妓は大阪の別嬪だなト□も本を置き」 □「僕にも少し見せ給へ △「君は今僕を屁込ましたに見せるとはチトお詞が途ひ升せう □「君も野暮を言ふ可らぬ見せ給へ」 △「夫でも御勉強のお妨げに成つては恐入る □「是ささう意地の悪い事をせせと △「イヤ見せられぬト三人奪合ふ正面の禰明け三宅麻呂出で來り」 藤馬「是は仕たり何れもお嗜み彼成三人「ハイト控へる」 藤「イヤ何小八郎めが問罪の義を御委任申置しが彼めが所持の時計の出所白狀致してゐるかな □「今朝より色々々に糺問致せども ○「道路に於て拾ひしと申かと思へば △「貰ひしと申故其主を問へば返答も無く □「一向に口が 三人「明き升せぬ 藤「スリヤ貰ひし主を白狀致さぬか兼て申置さし如く僕が師と頼みたる五十嵐信友先生彼の今紫に熱心なれど打解けて添察もせぬ體して見ると佐渡から惚れ藥が出る杯と申響へは當今では舊弊と成つて役に立たぬと相見へる □「イエ其札に應かぬは今紫が舊弊當時の世の中徳を取るが專一にムリ升 藤「然し横濱の物持高嶋屋嘉右衛門より今紫が貰ひしは代價千圓の時計夫を中田小八郎が貰受けしと廊の取沙汰 ○「我々探索致せし所小八郎こそ今紫が問夫

なりと申事 △「信友殿には殊の外なる御立腹 藤「吹擧なしたる松崎頼母頼母は連れぬ所早く彼等を免職させねば師匠は元より我々が出世の邪魔と申もの首尾能ういつた其上では權妻を寵愛する程月給の取れる身分に取立てくれるは □「夫は千萬 三人「忝なうムリ升 藤「サ小八郎めを盜賊の罪に伏させ押し片附けるが何より肝要引出し召され 三人「畏つてムリ升ト床の淨るりに成る」 淨るリ「いつしかに物めく春も種開けて花の梢も夜嵐に中田は落花狼藉と血氣の姿何處へやら寢れ果たる小八郎居所の歩みの夫ならで獸の函を假りの牢戀の仇なる牛頭馬頭が情用捨も流男つぶやき乍ら引出だすト三人下手の板戸を明ける内見苦しき函前而ら差戸の錠を明ける中より小八郎淺黄の着附白の兵子帶高手小手にいましめし儘引出す」 淨るリ「小八は邊り見廻して無念涙にくれ居たる三宅は中田を打見遣り 藤「イヤ小八郎兵隊の身分にて女郎狂ひ身分に應せぬ時計をば所持なすは何れに於て盗み取たサア有體に白狀致せ 小八郎「此程より度々の御陰謀なれど盗みし覺へ嘗て無し去る人に貰ひ受けしと申より外に申様はムリ升せぬ 藤「貰し品に相違なくは何國の何某に貰ひしとせ有體に申さぬのヒヤサア貰ひ先きを言はぬかい 小八「此くれ主は申され升せぬ無益の御陰謀御無用に被成升せ □「コレ小八郎長く苦痛をせぬ内に白狀するが當世だモウよい加減に三人「白狀仕ろよ 淨るリ」と口々に罵るにぞ小八は此事打明けなば今紫が深切も無に成るの

みか故主を始め兄に言譯け立難く又百號けの小藤殿冥途にムる父上にも三方四方の義理に擲まれ兎角の涙に暮れ居たる藤馬は猶も小八に向ひ「コリヤ小八開けぬ奴じやなア○此陸軍役所には司法省の手を經るも吟味を遣げて夫々の律に所置なす規則なる故日々吟味なすと雖も更に白狀致さぬは我々共を侮つてか 小八」全く以て「イヤ」侮るのだサアたんと侮れ言はぬと有つて其儘に致しては役前が相濟まぬ○コレ何れも其サアベルで打据へ召され 三△「ハッ 伊るリ」と答へて三人は手にくサアベル携へ出て情け用捨も荒くれ武士小八の背中を打据れば苦痛の體はさながらに此世から成る地獄の責目も當てられぬ風情なり堪へ兼て其儘にウンと斗りに息絶れば「コリヤ小八めは氣絶仕升た 藤」夫手當致せ「ト藥を出して遣る三人は藥を興へ手桶の水を顔へ掛る小八息を吹返し」小八「ア、苦しや堪がたなや覺無い事言はれうか唯此上は一時も早く命を取つて被下升せ 藤」さう性根がすはつたからは僕が手づから打すへくれるば○ドリヤ成敗致してくれん 伊るリ「既に打んとする所へ 松」アイヤ三宅氏暫くお待ち下され「アノ聲は 三△「松崎殿 伊るリ」阿責のしもと押しめ静々入来る松崎頼世會釋をなして座に付ば三宅は頼世に打向ひ 藤「コレハ」隊長には越中嶋より最早歸營でムつたか 松「十二時を限となし唯今歸營致してムる 藤」夫は千萬御苦勞に存る 松「承れば某が推舉致したる中田小八郎身に應せざる時計を

所持なし其御疑ひより日毎の御吟味打捨て置かれぬ彼が身の上か手傳の致さんとは何候致してムる 藤「其御配慮が有るなればなせ某をお止め被成た 松」お止め中は御吟味のお手傳を致さん爲め其仔細申述ぶるでムらう○小八郎義は中々盜賊杯致者には替て無し然るに上なき高價の時計を所持する故に嚴重の御吟味其探索方を相招き右時計を持たせ御府内の時計師へ遣はしたれば世に稀成る品故に探索届かぬ事有まじ夫故お止め申てムる 藤「松崎氏には手ぬるい」假初の銀側なら人もくれまいとも申されぬが此藤馬杯は見も附けぬ結構な彼の時計殊に十圓以下の小給者時計を所持する事成らぬとは此際中の規則でムる然るに小八郎が彼の時計コリヤ盗み物に相違ムらぬ 松「貴殿一己の御思慮にて盜賊と見極められ拷問の苦痛に堪兼ね小八郎も盗みしと申立て御所置に成た其後で若し遣り主の出た時はお役義落度ではムらぬか 藤」ム、松「殊には手強き拷問に若し落命致なば貴殿は絞罪逆れぬ所其所を存じてお止め申した 藤」ム、左程おかばひ召されるれど若し探索方が立歸り紛失物と極まらば貴殿の身にも掛はる事 松「若しも拙者の見込みが違はば其時こそは身共が落度入らぬ御配慮 藤」エ、松「御無用に被成れ 伊るリ」官詰められて百何も出せ而ふくらしで扣へ居る折柄兵卒はせ來り 藤「ハッ申上り探索方小川幸吉松崎様へ御面談致度さ趣にて罷出升てムり升る 松」早々爰へ案内致せ 藤「ハッ」ト引返して還入る」松「イヤ何いづれも

探索方の歸りしは陸蔵も届きし事と相見へる。馬「夫は早重榮な義でムる。伊るり」案内に連れて小川幸吉通か末座に扣ゆれば。松「小川氏はへく。伊るり」御免下され。伊るり」同じく椅子に座を構へ。伊「仰付けられ升たる事件早速探索致せし所此時計は英國より三つ舶來せし品にて二つはやん事無きお方の御所持今一つは淺草馬道陽盛堂より横濱の物持高嶋屋嘉右衛門へ賣渡し大黒屋の遊女今紫が所持の由猶も實否を糺さんと直ぐ様金瓶樓に立廻せしに今日は高嶋屋嘉右衛門が周旋にて海軍の隊長五十嵐信友殿へ今紫が身受の相談荒増し極り橋場の寮に於て唯今祝盃の酒宴最中と申事一先づ罷歸り升てムり升る。松「早速の探索千萬忝なうムる。少」ア、モシ小川様とやら今紫が五十嵐殿へ受出されるとはほんの事でムり升るか。伊「如何にも其祝ひ旁酒宴闌の由にムる。少」エ、さうした心と知らぬ故斯うした責苦に逢ふのも皆あいつ故エ、口惜いわい。伊るり」と拳を握り齒がみをなし無念涙に暮れ居たる松崎始終打見遣り。松「コリヤ小八郎我は今紫より此時計貰ひしよな。少」エ、松「今幸吉が断の内今紫が見受けの事根問をなして怒りの體々眞ッ直に申聞けよ。少」此上は包ませお断申升る。○只今迄陳じ升たは三方四方の義理に摺らまれ若し此事を申上なば五十嵐は何れもが師匠と頼むお方故戀の敵にあなたを始め今紫にもどの様な難義が掛るも知れぬ故身は粉に成る共申さぬ氣でしつと辛抱致せしが松崎様の御吟味と官ひ殊には今紫が心替り五十嵐

殿の權妾と成るからはモウかばふにも及ばぬ事去る頃吉原へ兩三名の朋友と遊歩致した其時に花も見頃の仲の町善を盡し美を盡し粧ひ飾りし傾城を見初めて後は忘られも能くく聞けば金瓶の今紫と申事道ならぬ金策なし一夜愉快の登樓に今紫と深く語ひ行末女夫の印にと私よりは肌着のシャツ垢付し値贈りしが今紫より其時計貰ひ受しは右の次第松崎様にも御迷惑を掛け升たるは恩を仇御免被成て下さり升せ。馬「コリヤ小八郎の申し口許詐りと申もの儘か三圓の月給で奉職なせる身を以て此東京に二人無き全盛の今紫何と買はれる譯がムらう其散財の金子の出所夫が不審の先づ第一。松「アイヤ其金子の出所は此頼母能く存じ罷在る。○コリヤ小八郎右遊興に遣ひ捨てしはお國元の舊知事公が御慰留有りし袴箱の價で有らうがな。少」御推量の通り誠に面目次第もムり升せぬ。馬「舊知事公から預かつた金子を其儘使ひしとは是盜賊も同じ事。○」歴々の御吟味中ではムり升るが小八郎が申口皆偽りと存じ升。○「金子を使ふ然るべきお方へさへ中々靡かぬ今紫が何を目當てに惚れ升せうや。伊「又今紫が夫程に惚れたものなら何として五十嵐様に身受けをされやう是が第一虚言の證據。馬「如何さま盜賊なしたを隠さん爲め跡方も無き偽り虚言コリヤモウ一責致たなら本音が出よふと腹馬は存するが。松「イヤ此上は今紫が橋場の寮に居るこそ幸ひ小八郎を突合はすが何より以て事明白。伊「成程夫が一番早き御吟味と存じ升る。馬「イヤ見すく知れ

九時計の盗人遁るく橋場へ同道なし今紫の知りんせんの一口で指を喰へて歸るのは我々共の大きな耻辱 □如何様三宅様のお考へ 三△御尤に存升る 小△ア、イヤ三宅様是より橋場へお引下され若し今申た私の口と替つて居つたなら無論私は盜賊ぞうぞ突合はせを願ひ升 松△斯く迄願ふ上からはお閉眉被成た方が吟味も早いと申もの 應△然らばどうなど勝手に召され 小△スリヤ御開入れ下さり升るか有難うムリ升 松△繩付は手前が儲かに預るでムらう○イヤ何小川氏御警衛下されい 空△委細承知致してムる 應△然し乍ら松崎氏若し途中にて間違ひあらば 松△一命に掛け升て身に引受けるでムらう 應△夫承はつて安堵致した 松△左様ムらば後刻面會 兩△致すでムらう 淨△立別れてぞト小川は小八郎を介抱仕乍ら立せる小八はひよろくと前へ出る三宅はサアベルを構へ前へ出るを松崎隔てる此様様宜しく床の三重へ寺鐘を冠せ幕

三 社 祭 り の 場

本 所 駒 形 堂 の 場

役 人 替 名

- 一中 田 小 八 郎 一五 十 嵐 信 友
- 一有 馬 屋 信 吉 一三 社 祭 仕 出 し 六 人

- 一中 田 小 兵 衛 一捕 手 四 人

本舞臺淺黄幕六人三社祭り揃の浴衣跣足尻端折り鉢巻にて立掛り居る涙の音佃の合方にて幕明く ○五十嵐様や三宅様はから達の主筋其か方の邪魔に成る松崎頼母に小八郎故三社祭りのどさくさ紛れ殺してくれろと頼まれた故一番骨を折つてくれろよ □そりやアお二人共其以前お供頭をしてムつた時かれ速とてもお世話に成つた旦那の事何しに見ちやア居られねへ △夫だに依て加勢をすれば ×どんな手利の侍でも ▲飛んで仕舞に何の手間暇ま ●一番腕を 五人「見せて遣らうは ○夫では是から 皆々「出掛けやうか ○皆来い くト皆々上手へ遣入る知らせに付き淺黄幕を切つて落す

造物平舞臺上手駒形堂の書割下手船宿の書割向ふ本所の遠見柳の立木同じく釣枝爰に小八郎一本差し跣足尻端折の五十嵐が腰をどらへ居る見得にて道具納る 信△身共を捕らへ何とするのだ 小八「我が所持なす兵書をば望み掛つた上からは自他とも身共へ賣つて下せへ 信△最前橋場の別荘で今紫に遣はしたは 小八「武士の口から約定仕乍ら女と侮り腰物を渡して置いて裏口から風を喰のた身法者さりくこつちへ渡して仕舞へ 信△おのれが取りにうせたからは何の渡して成るものか何を 兩△小難なト立廻り有つてト、五十嵐懐中より件の兵書を落すを小八郎拾ひ取る」 信△南無三夫とト取に掛るを小八郎突廻し懐中なす

愛へ幕明の六人下手より出で来り」○五十嵐様か 信「サ、加勢仕る 皆々合點だ」ト小八郎六人を相手に立廻り有つてト皆々を下手へ追込ひ五十嵐切つて掛り一寸立廻り有つて

「信「ヤイ小八郎價の金を所持して居るか 少「サ、其價は 信「サア金がなけりやわれは盜人サア金子を出すか 兩人「サアくくく 信「アノ愛な大騙りめ」ト新吉下手より出で来り」

新「其處にか出て被成るは小八郎様ではムリ升せぬか 少「そう言ふは有馬屋新吉 高嶋屋嘉右衛門様より兵書の價 少「何高嶋 無「此通り金百圓」ト小八郎へ渡す」 少「今に初めぬ高嶋屋の心付け手詰に成つた其所へ能くも持參致してくれた○サア五十嵐様みの通り價の金百圓を慥に渡す 信「イ、ヤ今と成つちやア金子は入らぬ兵書をこつちへ返へして仕舞へ

少「夫は今の詞とは 信「騙るも遣らぬもこつちの了簡我には決して渡さねば 少「夫じやと言ふて 信「エ、面倒な」ト新吉も立廻り愛へ上手より松崎頼母中田小兵衛出て来り」 松「彼の品は手に入りしか 少「漸く取得て是愛に 小兵衛「おれ○」ト受取り」 小兵衛「悉ない是さへ手に入る上からは是にて皆々身の治り 信「おのれ夫をば」ト又立掛るを」 松「五十嵐三宅言ひ合はせ兵隊の金子を盗出し淫酒に使ひ捨てたる段最早露顯なしたるぞ 小兵衛「尋常に名乗つて出よ 松「先刻取落せし悪事の密書有譯あるか 信「サ夫は 少「御不審晴れし手初めに汝を踏付け繩打たうや 信「サ夫は 皆々「サアくく 信「斯く露はるゝ上からは片々端から

覺悟しろ」ト愛へ黒四天の捕手四人出て五十嵐を取巻き」 捕手「動くな」ト雙方宜しく幕

演劇 金瓶の分筋は
脚本 三國の月輪

娼妓誠開化夜櫻 第一輯終

版權及發行
所有權

明治廿九年三月廿五日印刷
明治廿九年三月卅一日發行

(定價金七錢)

不許謄寫

著作者

東京市淺草區七軒町二番地
別號 勝 修藏事

勝 彥兵衛

版權所有者
兼發行者

大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷

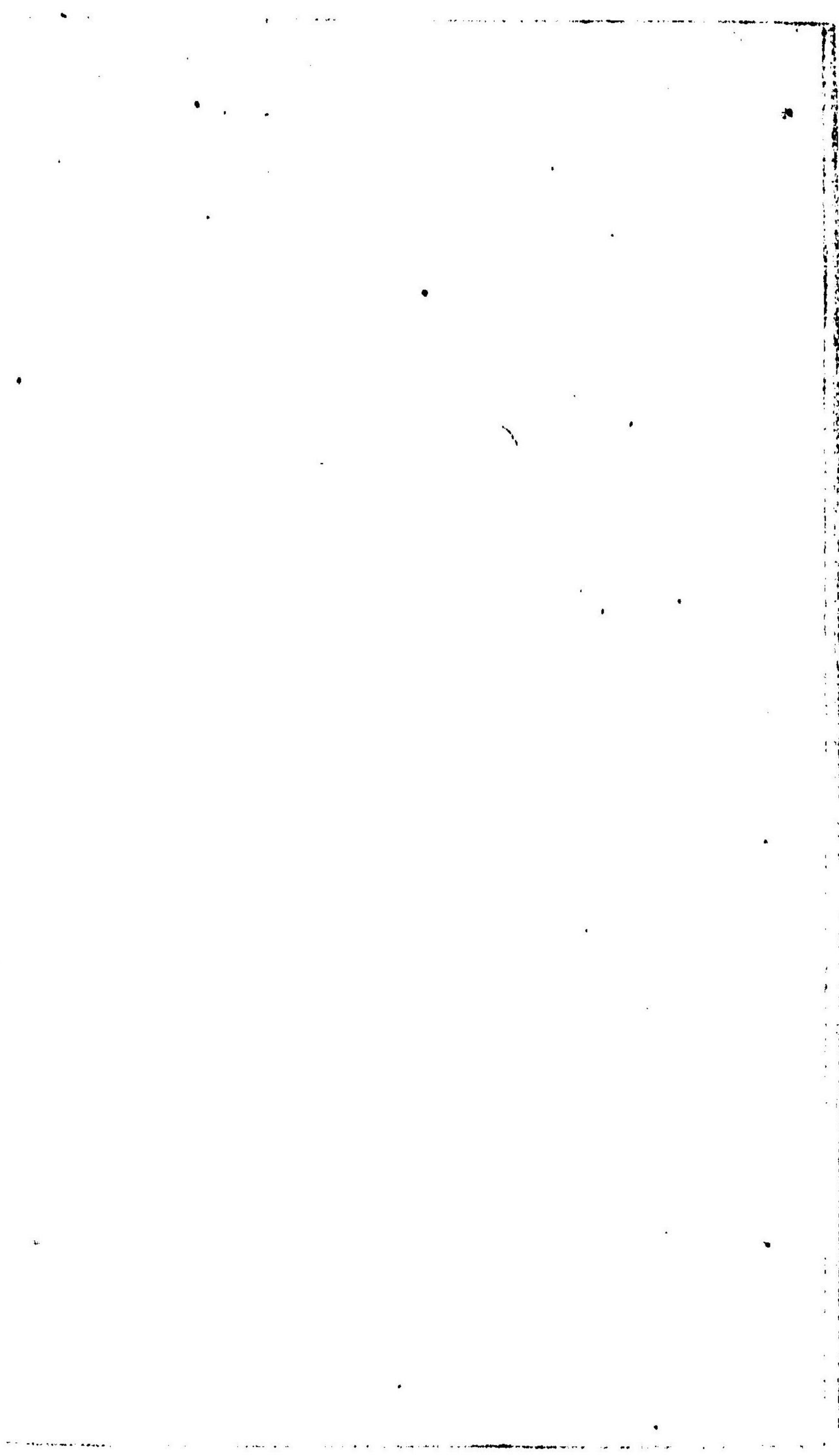
中西 貞行

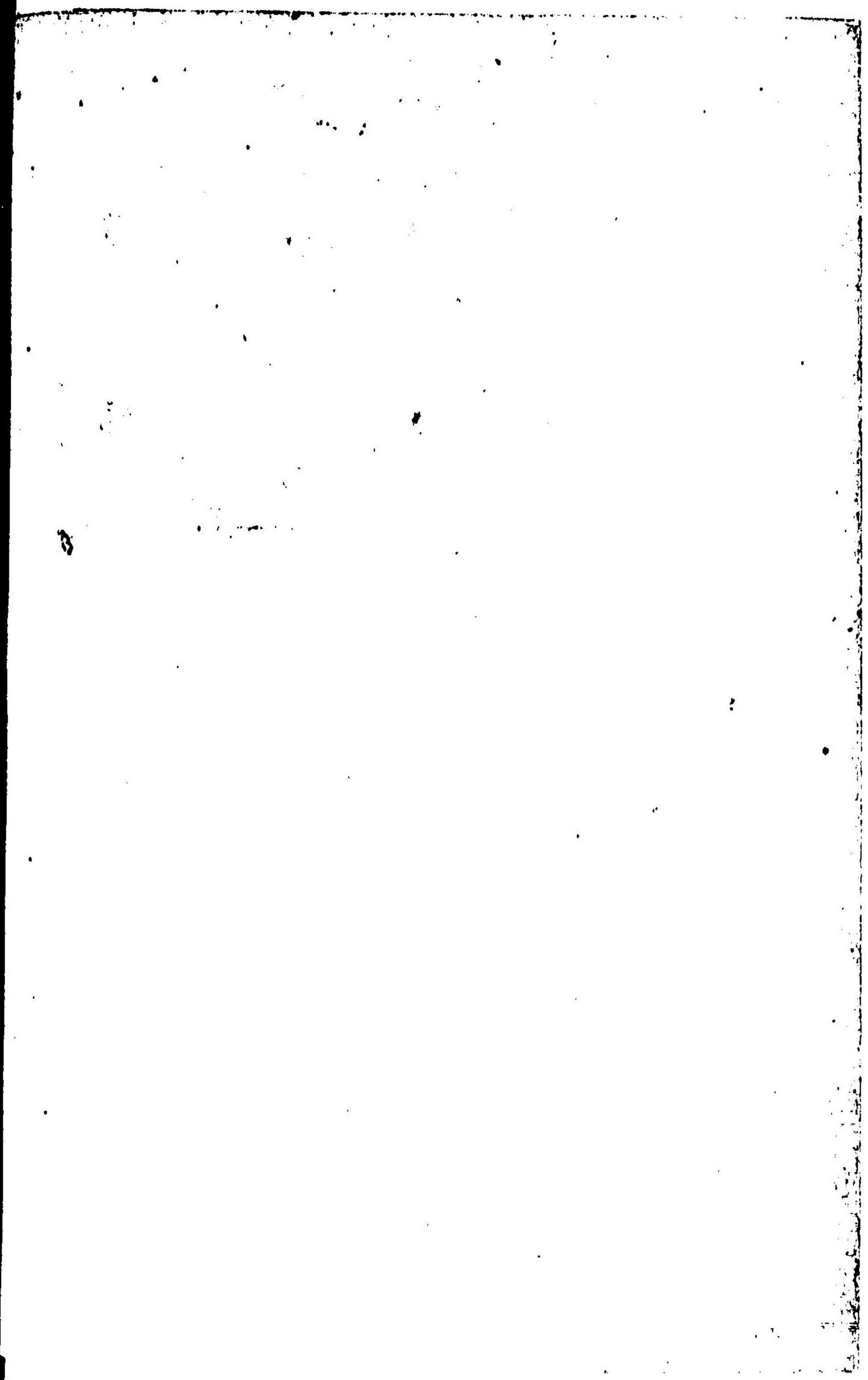
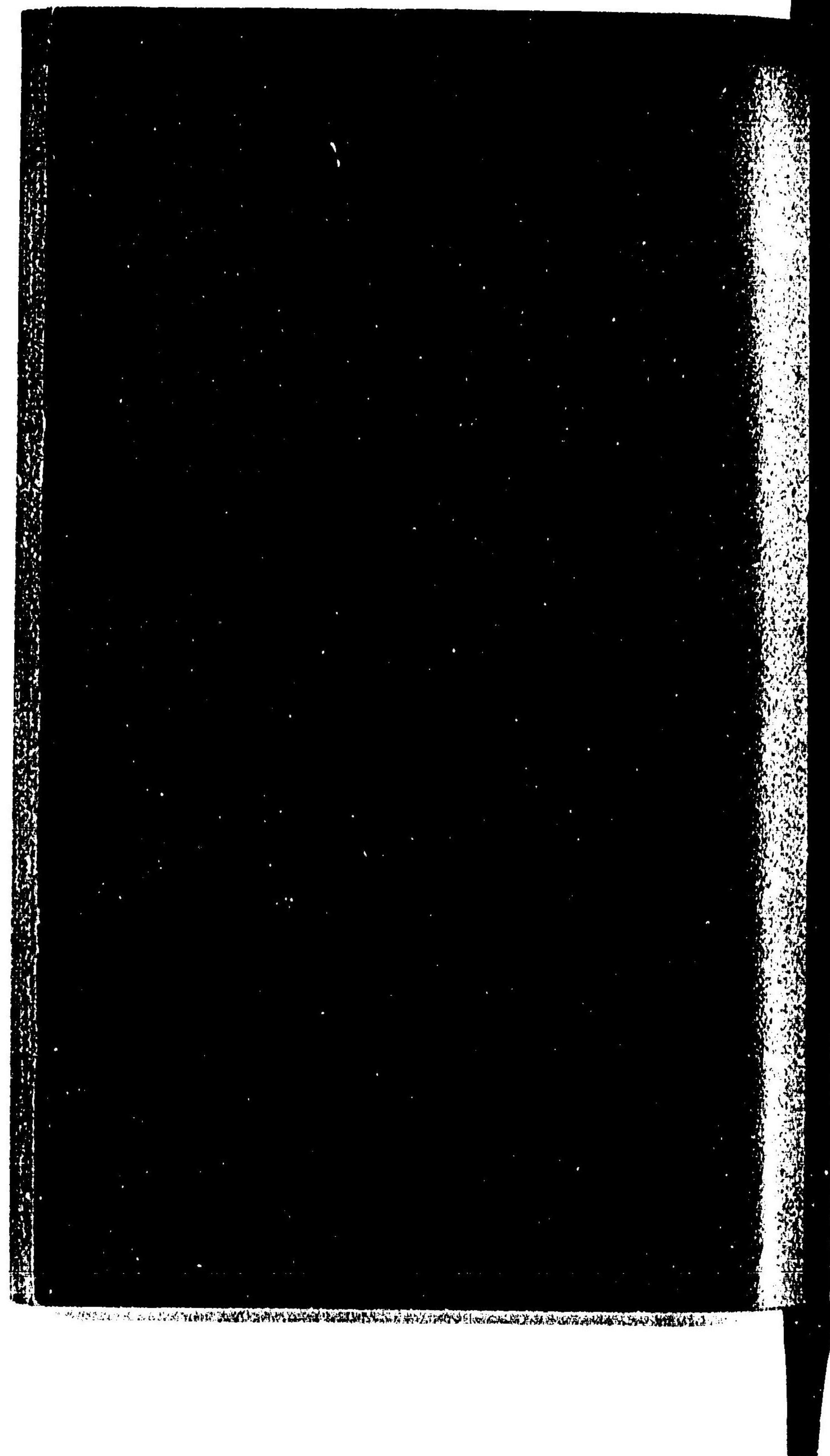
印刷者

大阪市東區內本町橋詰町六十八番屋敷
活版製造所 廣合資會社

前田 菊松

17





演 劇 脚 本

勝 諺 藏 著 作

真 景 住 江 月

自 大 序
至 大 詰

邯 鄲 回 轉 閨 白 浪

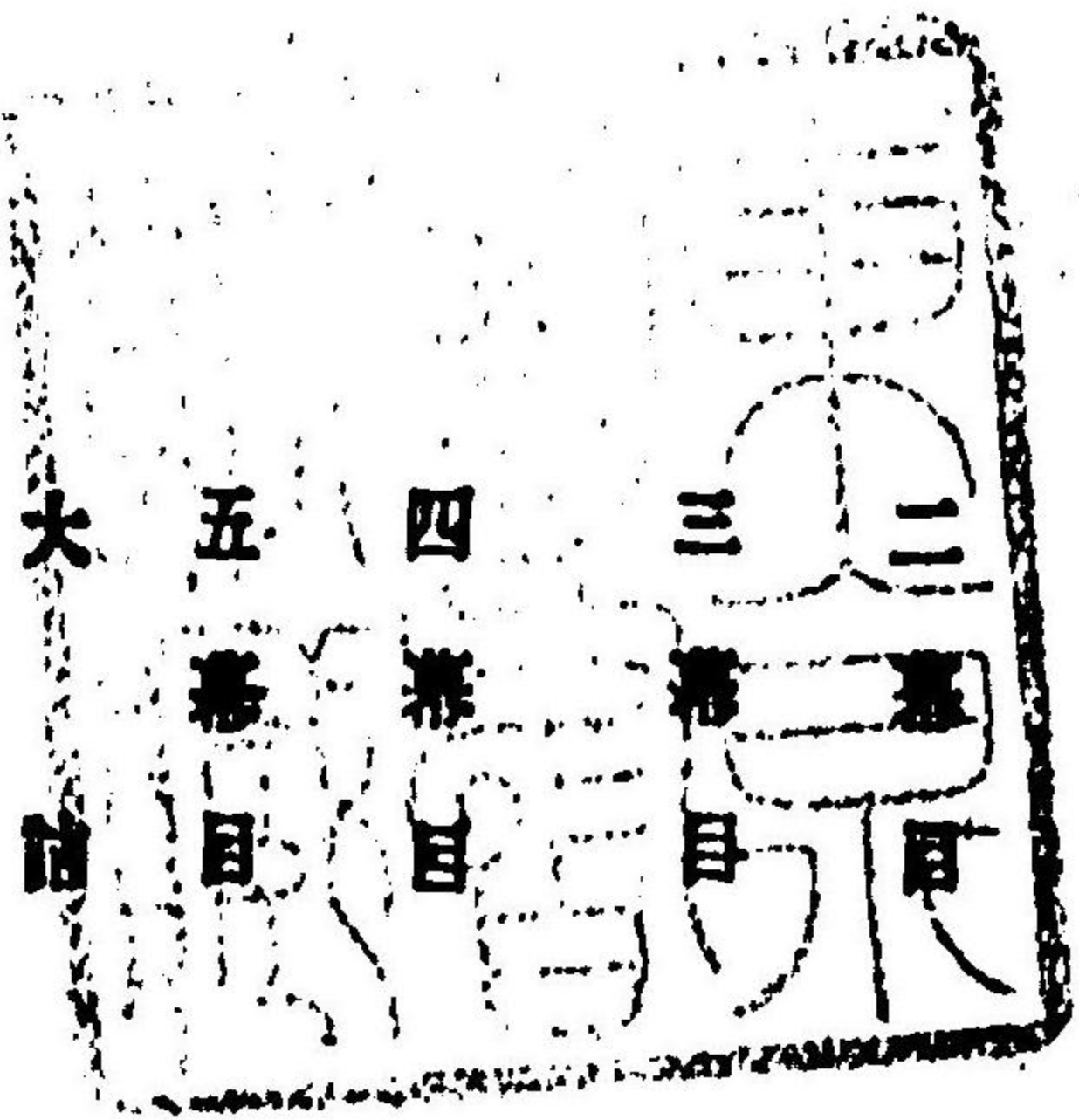
前 編

脚本眞景住江月

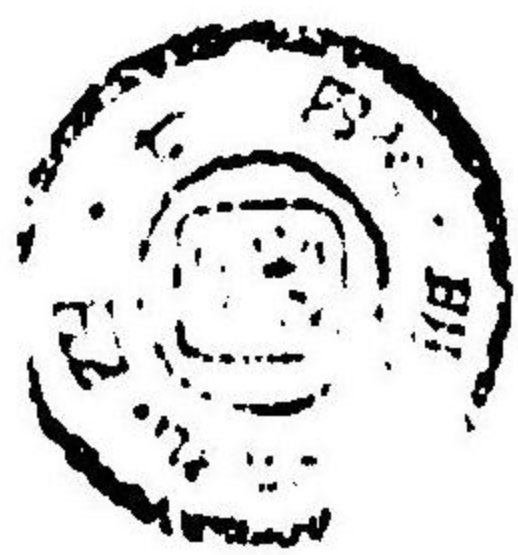
場

割

大序



(住吉神社鳥居先の場)
 (同待合茶屋座敷の場)
 (同裏手松原の場)
 水谷万兵衛住家の場
 (志改亭裏口の場)
 (幸橋安飯屋の場)
 (志改亭座敷の場)
 (幸橋万兵衛入水の場)
 (大森甚兵衛内奥座敷の場)
 (松屋町大森酒店開業式の場)
 (大工棟梁清五郎内の場)
 大森女房か倉心経病の場



演劇眞景住江月

(住吉神社鳥居前の場)
 (同待合茶屋座敷の場)
 (同裏手松原の場)

大序	役名	一車	夫	六	藏
一 大工	衆五郎	一 車	夫	六	藏
一 女房	お倉	一 同		音	松
一 水谷	万兵衛	一 同		熊	吉
一 柏木	宗三郎	一 同		三	吉
一 大森	甚兵衛	一 職人	正	吉	
一 藝妓	糸吉	一 職人	鶴	松	
一 同	梅香	一 茶店	女	ね	松
一 舞子	小花	一 たいこ	持	金	八
一 仲居	お圓	一 若	イ	者	芳
一 番頭	喜助	一 棟	梁	清	五
					郎

一 銀 一 仕 出 し 四 人

本舞臺平舞臺見附石の鳥居石燈籠石の玉置茶店彼る社内の中遠見松の釣枝都て住吉鳥居先きの休爰に参詣の仕出し四人床机に腰をかけ茶店女お松茶を汲み出して居る唄神樂にて慕明く お松「チャ皆さんお茶を一つ上りなさんせいなア。〇いつとでも愛敬のある姉さんの汲んだお茶の花香たつぷりと 四人「頂き升せうかい」ト皆々茶碗を受取り茶を呑む事あつて」〇「何と姉さん此住吉様の御利益を受けて居るは 四人「澤山な人じやな 松「そりやモウいふにははれぬ程深山な人がお蔭を蒙り升わいなア。〇何にしても床机を長うよさげては茶店の迷惑 三人「夫ではそろく 三人「歸り升せうか 〇「茶の錢は 四人「爰に置き升」ト名々錢を出して置く」松「有難うムり升 四人「ドリヤ参り升せうか」ト四人橋懸りへ過入る向ふより柏木宗三郎藝子糸吉藝子梅香舞子小花仲居お圓太鼓持金八付添ひ出て来り」お圓「モン糸吉さんけふは旦那と此住吉参り嘸嬉しうムんせうなア 糸吉「アイお圓さん推して下さんせ 糸三郎「イヤ別に嬉しい事もあるまいア何にしても向ふの茶店で一服して参詣をせうか 糸「チャお出 皆々「被成れ升せいなア」ト皆々舞臺へ来る」松「マアおかけ被成れ升せ 糸「少しの間お邪魔を仕升」〇「チャ皆もかけるがよい」ト皆々床机に腰をかけるお松茶を汲み来り」松「チャお茶を一つ上げ升せう 糸「ナ、構ふてくれな 皆々「憚りさ

んでんすなア」ト皆々茶碗を交取りお松は茶店の内へ進入る」兼夫にしても若旦那道々
 満車にてお咄しをした志改亭の淨るり會どうを連れて往て下さんせぬか 兼本に志改亭の
 淨るりは鶴澤清市さんの改名披露で上手の通中 小私も連れて往て下さんせ 金「コリヤ此
 金八も提灯持に参り升せう 兼イヤ折角の事なれど其淨るりへは行くまい 兼夫では私を
 一所に往ては御察人に濟まぬ故でんすかいなア 兼イヤ家内へ別に氣を置く事はないけ
 れどわしは斯ういふ身分じやないか〇お前も知つて居る通り今の内へ養子に来てアノおそ
 のは家の娘幸ひに養父の宗兵衛殿の信用を得て心齋橋の西洋小間物の店を一式任されたれ
 せ自分仕出した身代でなければ若しも身代を減らしては養父に濟まぬわしの身分今迄茶
 屋で泊りもせずはんの氣晴らしに遊びに行くのじやけふもかうして出て来た上又あまつて
 遊びに出てはよろしく極道を始めたのど物堅い養父に思はれてはならぬゆへいやといふの
 じや 兼成程さうおつしやれば尤ではんすけれど 兼何も志改亭の淨るり會へお出被成
 れたといつて別に親旦那がどやかう思ひも被成んすまい 兼私も若旦那のお堅い事はよう
 知つて居り升れば 小「さうぞ連れて往てほしいけれど 兼今のやうにおつしやられると此
 金八の太鼓も鳴らされず 兼ア何にしても縁詣をして來うでないか」ト宗三郎拾錢の
 銀貨を出し「兼お圓さん是を 兼アイ〜〇モシ姉さんお茶代を」トお松出て來り」兼夫

は有難うムり升る 兼さうなら行かうか 兼イヤお出被成れ升せ」ト皆々鳥居の内へ道
 入る向ふより榮五郎出て來るを戸家の内にて」喜助「サ、イ榮五郎さん〜」ト喜助商家番
 頭の格らへにて出て來る」兼五郎「サ、お前の柏木の番頭さんの喜助さんじやアないか 兼
 ナ、しんど〇何にしてもかう息が切れては咄しも何も出來ぬのじやア向ふの茶店迄往て
 茶でも呑んで上の事にせうわい」ト舞臺へ來り」喜助「さん早う茶をかくれ 兼アイ〜」
 「ト茶を汲み來り」兼サアお茶を上げ升せう」ト兩人に茶碗を渡し茶店の内へ進入る」兼
 さうして番頭さん何ぞ急な用でも有るのかな 兼サア急なといふて例の頼みじやお前系吉
 に頼んでくれたか 兼イヤさうりやアお前があの通りの咄し故しつかりと頼んであるのだか
 ら今にさうぞか返事があるだらう 兼コレそんな便りない事をいふてアアよう聞て貰はう
 〇わしの内の旦那といふは知つての通りの堅蔵じや所が若旦那の宗三郎といふは親にも輪
 をかけた堅蔵夫を極道にして旦那に愛想を盡かしてはり出したら跡の養子には差詰り此
 喜助さうなると身代はわしの儘じやイヤまだ深いわしが望みは御察人のおその様夫も女房
 に持てる道理サア一人の玉で二つの鳥を打つわしの魂膽其ヒストルは系吉じや是から持か
 け引入れたら迷ひ込むは知れてある夫故のお前へ頼みじや 兼成程夫程の目輪見やら系吉
 にどつくりと吹込んで宗三郎を味くたき込み極道にして上げやうと受合つたらいいけれど

此糸五郎末始終は女房にせうと約束した女を人の喰い物に 馬出来ねとお前いふのじやな
 衆「マアよしにして假升せう 馬「そんならよいモウ頼まぬ○頼まぬ替りに貸して有る五十
 圓のあの金をば後ともいはす今爰で 衆「エ、 馬「直ぐに返して貸はうか 衆「コレ番頭さん
 今返す金が有る位から旦那先きの番頭さんのお前に初手から借るものか 馬「そんなら糸吉
 に段込んで宗三郎を極道にしてくれるか 衆「夫じやといつて 馬「そんなら金を返してくれ
 モウ待つ事はならぬのじや 衆「さういやさうも仕方がない糸吉を得心させて宗三郎を極道
 に引入れさせやう 馬「エ、 衆「サアいやといやア金を返せと迫られるが苦しいから 馬「
 、宗三郎さへ極道にしてくれたら五十圓の證文は其儘で返へすから 衆「夫じやアお禮は五
 十圓の證文かな 馬「何の其上は此喜助の胸に有る 衆「そんなら急度した禮をおくんなさる
 な 馬「夫は何にもいはぬが花 衆「花といやア糸吉がけふ此住吉へ宗三郎に連れられて行く
 との知らせ 馬「夫故様子を見届けやうと實の出で来た此喜助 衆「さうか味く内證で糸吉に
 逢ひてへものだ爰で暫く待つて居やう 馬「わしはお参りと出かけやうか「ト喜助は鳥居の
 内へ這入る」 衆「アノ喜助が押し強い工み事油断のやらねへ事じやなア○イヤさういふ
 やつがある故に此糸五郎も金の並に有附くといふものだ「ト鳥居の内より糸吉出て来り」
 糸吉「そこに居るは糸さんではないかへ 衆「サ、糸吉か 糸「お前さつきの手紙をば見ておく

れたのかへ 衆「サア夫故御苦勞様にやつて来たのよ 糸「夫はよう来て下さんした 衆「併し
 宗三郎さんは爰へ来や仕ないか 糸「何の夫は仲居のね圓さんに耳を吹いてある故氣遣ひは
 ないわいなア 衆「さうしてお前に頼んだ事はさうだろう 糸「夫は色々として居るけれどあ
 んな堅い人はないわいなア 衆「タアタおめへに頼んだも最初一寸咄した通り柏木の番頭の
 喜助さんから頼まれたのだが若旦那は養子だから追つはり出して家附きのお娘をせしむる
 番頭のひはん何をするのも金儲けとおめへに手を下げ馬鹿を真似して頼むのよ 糸「私も色
 々して居る内志改亭の淨るり會へ連れ出した上一工夫と思ふてさつさすゝめた所いやとい
 ふては居るけれどさうでもして速出す積り 衆「さうして其上工夫があるのか 糸「ちいと手
 ごたへのあるわいなア 衆「然しおんな堅蔵が碎けた日にやア得手してうるさく附廻はるも
 のだせ 糸「サア夫を私しも心配をして居るわいなア 衆「心配ならいゝけれど陸から出た賊
 になつちやア聞かねへせ 糸「アレおはらしい何の私が 衆「イヤ波多に油断のならぬやつ
 よ 糸「其様に疑ふなら何も私の爲じやなし何のせいでもよいわいなア 衆「イヤさういつて
 くれちやア困るしやアねへう 糸「イエ私しやいやしやわいなア 衆「夫じやアおれが悪るか
 つた 糸「眼をとならやるけれどお前におうしう思はれると 衆「イヤモウ思はぬから頼まれ
 てくれ 糸「そんならやつて見やうわいなア「ト鳥居の内にて」 衆「糸吉さんく」「ト出て

来り」 愛に居やしやんしたかへ○チ、お衆さんお楽しみ 衆「チ、お圓さんか内証だせ
 衆「何ぞ用でムんすか 圓「若旦那がお前を呼んでムんすが座敷は味くしてある程に 衆「さ
 ういふ事なら衆さん私は 衆「チ、今おこらしては大變だから 圓「サア行きなさんせいなア
 「ト鳥居の内へ這入る」 衆「一寸焼いて見た所止めるといふに悔りして泣くやうに黙つて漸
 う納得して貰ふとは女にかけちやアのろいやつよ」 「ト橋懸りよりお倉出て来り様子を伺ひ
 居て」 衆「イヤ私にやあんまりのろくないよ 衆「チ、おめへはお倉 衆「衆さん今のはあり
 や何だへ 衆「何ありやア知つた藝子だからつと頼んである事が有るので 衆「夫よ何で焼い
 て見たり泣くやうに黙つたりしてのろいやつになつたのだへ 衆「よ、夫じやア手りへは何も
 かも 衆「後ろで聞いて居ることも知らせようマア浮氣をするのだねへさうした義理じやある
 まいがへ○お前が東京に居る時分私も吉原で勤めをして賑といふ女郎であつたを末始終は
 どうかうと約束をして居たれどお前は借銭故大阪へ歸つた故足を抜いて来たなれどお前の
 居る所も知れず大森甚兵衛といふ虫の好かぬ亭主を持ち當座渡しにして居る内計らすお前
 に道で出合ひ相戻りした二人の中夫に外に女を捲らへお前夫では濟まないと思はぬかへ
 衆「マアおれのいふ事も聞いてくれ今の女は實の事おめへに逢はぬへ其前に一寸つまんだ
 事があらア夫からかりへに逢つて後は見向きもせず居た所が心齋橋の西洋小間物屋の柏木

といふ店の番頭にもつと頼まれた事があつて夫を持込むには今の藝子の手を借らなけりや
 ア出来ねへ仕事マカヲ逢つたを幸ひに頼んで居たのだ夫で今の世辞にいつたのよ 衆「ど私
 にも世辞をいひのうへ 衆「何手りへにやア眞實だがさういふ手りへも甚兵衛を大事と思
 つて居るかも知れぬへ 衆「何の私が甚兵衛を大事と思ふ心が有るならお前と相戻りをする
 ものかね 衆「夫じやア是からどつかへいつた上中直りとしてはどよだへ 衆「けふは宿六と
 一所に来て今ステーションではぐれたが深切らしう尋ねて置かないと跡の爲めがわるいか
 ら 衆「さういふ事で見ると跡の爲めを思つておれも一人でどこかで一盃やらうマガちつと
 計り持つて居ないのか 衆「又お金かへ愛に圓助ある故是を持つて行きなさいな」 「ト一圓の
 紙幣を出す」 衆「よ、毎度氣の毒だなア 衆「何是も甚兵衛さんの懐だよ 衆「夫じや此來に
 やア出来ねへせ 衆「アレ早あんな身勝手はつかり 衆「ハ、ハ、ハ、○夫じやアお倉 衆「静か
 にお仕よ 衆「チツト上」 「ト鳥居の内へ這入る」 衆「悪縁契り深いとは衆さんと私の中似た
 者夫婦に成らぬ先きから苦勞計りするといふも今のやうな女が出来たら困ると思ふこと
 ちの弱身どうか工夫をせにやならないわいなア」 「ト鳥居の内にて」 勇兵衛「どうするのじや
 く 芳松「エ、おとなしうして 四人「来やアがれ」 「ト丸太格子の若い者芳松車夫六藏音松
 熊吉三吉の五人にて泥酔になつたる萬兵衛を引ずつて出て来る」 勇「エ、洒落わがるな」 「ト

皆々を突退け」 万「ヤイ／＼今こそ貧乏して居れど元は大阪の唐物町で水商といへば知らぬ者もない商人じや侮りやがつたらゑらいぞよエ、イ 芳「エ、みんな交番所へ引ずつて往つて下せへ 四「合点じや／＼ 万「エ、阿房め」ト掴みおらうとする五人は捕らへやうとする立廻りあつてト引つとらへる」 舟「ア、モン定めて際もあらうけれど相乎は高が酔ふたお人マア了箇して上げておくんさいよ 芳「何所のお人か知らぬけれどこんな無法なやつは巡査に渡さしや成り升せぬ 万「どうなど仕くされ 芳「是だから退いて居ておくんさいお前さんに怪我でもあつては成らぬ故○サア逃れていつて下せへ 四「よしだ／＼」ト鳥居の内より清五郎出かゝり様子を見て居て」 清五郎「ナイ／＼一寸待ちねへ今もあれから見て居れば此おかみさんが止めるも聞かぬが一体其人がどうしたのだ 芳「どうもありやア仕升せん 万「かうもない何がかうもないのじやエ、イ 芳「こんな事をいふやつでムリ升がマア際を聞いて下さい○私は丸太格子の若い者でムリ升るが此人が店へ来てたらふく呑んだ其揚句勘定の錢はないと無法をいひ出し果は有合ふ鉢皿徳利手當り次第に投げ升故六蔵「私等は車屋でムリ升るが口々世話に成る家あり 吾松「見るに見兼ねて飛んで行き 熊背「なだめても聞入れぬ故 三吉「此若い衆に力を合はし 芳「據なう交番所へ突出す 皆「所でムリ升る 萬「よ、ひや器の損じを込めても拾圓にもなりやア仕めへ 芳「へい三圓には足

り升さい 津「夫じやア是で算用を済ませがい」ト五圓札を渡し」 津「残りはおめへ車屋と一盃呑んで骨休めをしたらいい 芳「へい夫ではお氣の進様でムリ升が折角の思召し有難うムリ升 四「親方有難うムリ升 舟「お前さんよく扱つておくれなさい升たね 津「イヤかう治まつたも初めにお前が口を利してくれたからだ○コレ此おかみさんにも何とか挨拶を仕ないのか 芳「へいおかみさん最初折角止めて下さつた時強情を張つた所は 五人「御勘辨被成つて下さり升せ 舟「何もうんな事はどうでもよいがマア無事に治まつたは私も嬉しう思ふわいなア 芳「へい私共も 五人「嬉しう思ひ升わい 芳「夫では親方おかみさん 五人「御ゆつくりと被成れ升せ」ト五人は鳥居の内へ進入る大森甚兵衛出て來り」 甚兵衛「あのお倉は何所へ往たであらうなア 勘「どうして居るはお倉じやないか 舟「ア、内の人かいなア 吾「何はさがしたか知れなんだ 舟「私も停車場でお前を見失ひ大勢の人で分らぬ故爰で待つて居る内うちに寐て居る人が酔ふて乱法したといふて交番所へ連れて行くといふから私が止める内此お方も来て下さつてお倉送出して治めて下さつたわいなア 吾「夫はマアお前さんよう止めてやつて下さり升た 津「夫ではお前は此おかみさんの 吾「へい亭主で大森甚兵衛といふ大阪の道頓堀幸橋の北詰で安飯屋でムリ升る 津「左様か何にしても此人を爰に此儘置きも成らねへ○よ、此茶店の内へ連れ込み寐かして置いて貰ふと仕やう 吾「成程夫がようム

り升る 金夫では私が頼んで来升せう〔ト立上るを茶店の内よりお松出て来り〕 金「イエ
様子は内から聞いてお入り升たかつれ被成れてお座かし被成れ升せいなア 金夫では私が肩
にかけ〔ト萬兵衛と引起す〕 金「どうするのじや〜 金何と〇〇つこいしよ〔ト肩にかけ
る〕 金夫では其兵衛さんとやら 金「サア親方 金「お出被成い升せ 金「ドレ御案内致し升
せう〔ト茶店の内へ這入る直ぐに烏居の内より正吉鶴松出て来るを以前の四人の車夫附い
て出て来り〕 六「薩「モン乗つてやつておくんない 金「鶴松雄波の停車場迄深車並でやり升
せう 六「どうぞ乗つて 四人「おくんない 正「どうだ鶴州深車並なら乗つて行かうか
鶴松「さうだ合乗八錢なら乗つてもよいな 六「夫じやアくじを引升故一寸待つて 四人「おく
んなさい〔トくじを引きにかゝる向ふよりお夏貝細工の賣物の荷を持ち出て来り〕 金「お土
産に貝細工はどうでムり升〔ト舞臺へ来り〕 金「あなた方お土産に貝細工はどうでムり升
正「チ、貝細工も買ふて行きたければ車を乗らうと思ふ故 金「イヤ正公いつそ車をよして
貝細工を貰つて往つたら妹や弟が悦ぶせ 正「成程さうだ夫がい〜 金「そんならお買ひ
下さり升るか 金「ナイ〜車屋さんおいらは貝細工を買ふ事に極めたから 正「モウ車はよ
すせ 六「エ、貝細工を買ふから車を止めるといひなさるか 金「今かうしてくじ逃引いて居
る所 金「折角直迄おきりめをどつたから 三「乗つて往つておくんない 正「イヤ氣の進だ

だが 四「外の客を乗せておくんない〔ト兩人貝細工を見合はせ〕 正「是で何だか 金「ヘイ
六錢に致して置き升せう 正「車賃で買ふ積りだから四錢にして置きねへ 六「そんな役にも
立ない高い物をお買ひ被成れうより車に乗つて 四人「お歸りなさい 金「イエ夫は四錢にお
負け申升せう 正「ソレ〔ト銅貨四錢を拂ふ〕 金「さうして是は 金「夫も六錢になる所なれど
四錢も負けて置き升せうつるさういられると直切りやうがあるい〇ソレ〔ト銅貨を拂ふ〕 正「
そんなら出かけやうか 金「サア行かう 金「有難うムり升たわいなア〔ト兩人は向ふへ這入
る〕 金「ソレおつちで商ひと仕やうわいなア 六「ヤイ待ちやアがれ何で客の邪魔をさらした
金「イエ何もお前方の仕事のお邪魔は仕升せぬわいなア 六「今の客に深車並でやり升せう
と約束を極めた所へ横合から貝細工の押賣りおれの家業は上つたりだ 金「こんなやつは
金「聲から來ねへやうに 三「た〜このめさにやア腹がいねへ 六「やつ附ける 三「台点だ 金
「アレエ、誰を來て下さんせアレエ、〜〔ト逃げまはるを四人にて追廻はす烏居の内より
榮五郎出かゝり様子を見て居て〕 金「マア〜待ちねへ 四人「何をするので 金「ようマア止
めて下さんした 金「今あれから見て居りやアこんな小娘をおんまりおとさげねへじやアね
へか四人「おめへの知つた事じやアねへ 金「コレ巡査にでも見附かつちやア面倒だ堪忍しな
せへ譯も大がいわかつて居る〔ト二十錢の札を出し〕 金「愛に持合はせが二十錢あらア是で

上畑酒の立呑みでもして立つた腹をいやしてくんな(ト渡す) 六「こんな事をしておくんなさつちやア氣の毒だノウ兄弟 吾、ダガ辞退するのによくあるめへ 熊、娘をなぐる其替りが一人天窓へ五錢とは 三「こいつア洒落た扱ひだ 六「夫じやア兄貴 四「有難うムリ升た「ト四人は鳥居の内へ這入る」 五「おなな様かは存じ升せぬが金まで出してお救下さり升たお情け何とお禮を申升せうやら 衆「お禮も何もいつた事じやねへさうしておめへは此近邊の人だらうな 五「イエ私は堺の者でムリ升るが御参詣のお人を當てに祝が手細工の具細工を賣りに來升もせめてはどいさんの慕しのたしに仕たいばかり 衆「サ、そりやア威心なお娘さんだこんな器量を持ち乍ら僅か具細工を賣らうより其身を賣つたら百圓は 五「エ、何處方の堺まで一人り歸る其道で又今のやうなやつが飛んで出たら大變だ是から内へまで送つてやらう 五「エ、めつろうな 衆「何氣兼ねは入らぬ事だ 五「夫程迄に御深切にかつしやるからは濟まぬ事ではムんすけれど 衆「夫じやア向ふの茶店へ一寸寄つて其上にて 五「最早よつばさ晚じた事故 衆「淋しい道で今の思に 五「來なれた道も心丈夫に 衆「口説落して金にぞる 五「エ、 衆「何氣兼ねう「ト立上るが道具替りの知らせ」 衆「來るがいは、有難うムんすわいなア「ト鳥居の方へ行かける此模様唄神樂にて此道具文題す
本舞臺常足の二重上手障子家休下手落間樹木と植へ後る肚内の片遠見空より松の釣枝都て

茶店座敷の体愛に酒肴の道具を置き清五郎其兵衛か倉住居酒を呑んで居るすつと上手に萬兵衛酔ふて寐て居る唄神樂にて道具納る 清五郎「サア其兵衛さんモウ一ツやりねへ 萬兵衛「イエモウ今日は計らず來合はし升て親方の御馳走に成り升て大醉でムリ升る 倉「マア親方一つお重ねなさい 清「夫じや重ねやうか「ト酒と受けて呑む 清「お倉さんとやらかりへ一つ受けてくれな 倉「私も大醉酔つては居升が 清「併し酔つてもあの男のやうに亂暴は閉口だせ 吾「迷ひなしでムリ升 三人「アハ、ハ、ハ、「トお倉酒を呑はし」 倉「夫では親方「ト盃をさし」 吾「親方私も最前お咄しする通り幸橋で安飯屋はして居り升がせうぞ御最良にお心安うして貰ひたうムリ升るが 倉「さうして親方のお内は何所でムリ升か 清「わしは上町だが清五郎といふはんの大工の棟梁だ 倉「夫では衆さんの親方の 四人「エ、 倉「イエ何親方が清五郎さんでムリ升たか 吾「何にしてもお心安うお願ひ申升る「ト萬兵衛是迄眠つて居て目をさませ」 清「サ、あの人が目がさめた様子ださ 倉「本にちつと酔も醒なさつたでムんせうわいなア 吾「サ「親仁さんちつと酔が醒たのか 万兵衛「へイ爰は何所でムリ升るな 吾「爰は住吉の茶店の座敷だ 五「へエ、何で又私が來て寐て居り升のじや 吾「お前マア此親方にあらぬ厄介を掛けたな 五「厄介とは何でムリ升 倉「ろんなら何にも知らないかへ 五「何をでムリ升るな 吾「お前丸太格子で酒を呑んだを知つて居被成るのか 五「サアを

こで酒を呑んで居る内いつの間に寐入つたか目がさめ升たら此座敷でムリ升故どうも不思議で成り升せぬ 眞夫じやア咄して聞かさう〇さつき其丸太格子でかめへ酔つての横車果ては乱暴する故に若い者や車屋が交番所へ連れて行くぞ引ずつて来た爰の門ト此かかみさんが仲裁しても聞かないのよ 眞そこへ丁度此親方が来てかくんなさつて五圓金を出し無事に其場は済んだれどお前はそこへ寐て仕まつたじやないか 眞夫でわしが此座敷へ肩にかけて連れて這入り寐さして置いたがゑらい事をしたものじやな 眞ア、面目ないく私に押にて貝細工をして貧乏暮らしを致し升る水谷萬兵衛と申者でムリ升るが若い時うら酒癖わるくまじつて斗りかゝり升るがけふも一寸一口と初めた上に酔がまわると我を忘れせんな事をしたに違ひムリ升せぬが見ず知らずの私を大金遣お出し下さり升て助てかくれ被成れ升たどは有難うムリ升〇お前さん方へも何とお禮を申升せう〇ア、面目なうムリ升わい 眞過去つた事は仕方がないがめへ定めて女房子もあるであらう 眞へい女房はどうに死んでムリ升せず其女房の連れ子の忤は十年餘り前に家出をして跡に残つた一人の娘お夏と云は今年十八こんな親でも大切にしてくるのでムリ升る故モウ酒は止めにして苦勞をさせまいとは思ひ升れどツイ酒を見升ると 眞サ、そこが辛抱だ其子が孝行にしてくれぬのに酒を呑んで苦勞をさせしては子に済まぬ斗りじやアねへ世間へ済ませ親甲斐がよいと

いふもの 眞若しも其娘が愛想を盡かして仕舞ふたら外に便りにする人はないじやないか 眞私も安飯屋を商賣にして居る故お酒を上るお人はお客様だがお前のやうな悪い酒は私しや止めぬはならないよ 眞ようかつしやつて下さり升たモウく是から酒といふては香ひ事じやムリ升せぬ 眞さうだ酒は身を切る刃と思ふてかつたならば誤りはないのだ 眞イヤモウ是で止め升せねば止める時節はムリ升せぬわい 眞さう得心をしてくれ、バわしもしふた甲斐があるといふもの 眞さうぞ親方の情けを忘れず 眞娘ッ子の安心するやうしてお上げなさいよ 眞有難うムリ升る〇さうして五圓の金もお返し申さねば成り升せぬがいつれ其内閣へ升てお返しに上り升るぞお所とお名前をおつしやつて下さり升せ 眞何ろんな心配は入らねへ事だか大阪へでも来たならば寄りなせへ上町で清五郎といふ大工の棟梁だから 眞又私は大阪の道頓堀幸橋の北詰で大森甚兵衛といふ安飯屋大概此願が店に居る故 眞あちらへお出なさつたら寄つてかくんなさいよ 眞有難うムリ升るいづれ今日のお禮に上り升るでムリ升る併し私はモウお暇を致し升る 眞そんならモウ歸りなさるのか併し初めて逢ふた人に此儘別れるも物が足りねへだうだ一盃ト盃の拳を切るのが道具替りの知らせ」 眞やつていつちやアト盃を出す」 眞イエめつさうもない禁酒でムリ升 眞サ、其心なら安心だト此模様合方神樂にて道具ふん廻す

本舞臺松並木後ろ淺黄幕上下植込みの出しかけ空より松の釣枝都て住吉神社裏手の体時の鐘合方にて道具納る「ト戸家の内にて」衆五郎「サア來なさい」ト衆五郎お夏出て來り」お夏「ア、モンそつちへ行き升ては道が大分損でムリ升わいなア衆何此道は少し遠くつて淋いけれど本街道と違つて道かい、から返つて徳だ真夫でも今打つたは入相の鐘じやにそんな淋しい道を通るは衆何おれが附いて居るから大丈夫だマア、來なせへ」ト舞臺へ來る」真「モン重ね、の御深切は嬉しう受けては居るけれどちらの茶店で時をうつし爰へ寄つては隙をついやしとろ、入相に成り升てこんな淋しい道を行くは私しやとろも氣味が悪うムんすゆへ本街道を歸り升わいなア衆「サイ、く姉さんさつきのやうに大勢に無法をせられて難儀の所を他人のおれが金遣出し助けてやつて送つてやる深切が分らないのか真夫は誠に嬉しう思ふて居升わいなア衆思ふて居るなら引返さねへでもい、じやアないか真夫はさうでもムんすけれどさつきのちらのお前の素振り今頃となり此住吉の裏手を通つて行かうといふは衆お前合点が行かないのだらう真ハイどうも氣味がわるうて衆夫で本街道へ行かうといふのだな真「アイなア衆夫はならねへ本街道へ行かれちやアおれの目論見が成らねへから真お前の目論見とは衆「手りへをかきわかつた簡だ真エ、衆「マアおれのいふ事と聞いてくれる〇さつと車屋のとなくさど何であらうと立

寄つて見れば年頃の手りへじやアねへか一寸見ても一本の金には賭める上玉故深切をかしで扱ひをしろちらこちらへ立寄つて入相になつたのはモウよい時分と此道へ連れて來たのも恩に着せ助めに出すおれの了簡真そんなら最前からの深切はさうした下心であつたかいなア衆「知れた事だ真さう聞く上は爰には彌々かうしては衆「エ、大事の玉を逃がして成るものか真「アレエ、誰ぞ來て下さんせいなア、衆「エ、やかましいわい」ト衆五郎は手拭にてお夏に狼藉をかけやうとする向ふより萬兵衛出て來り」万兵衛「娘も歸つて待つて居やうと急いで爰迄來て見れば合点の行かぬ女の聲」ト舞臺へ來り」万「エ、何さらすのじや」ト衆五郎を突のける」真お前はどいさん万「サ、お夏じやないか真ようマア來て下さんしたなア万「娘はどうしたのじや真此人が深切をかしに私の難儀を助けて下さんしたはかどはかさうとの下心万「エ、〇コレお前は滅相もない事する人じや〇ヤおれは衆五郎じやな衆「サ、お前はどつさん」ト逃げやうとするを」万「エ、動きさらすな真そんならお前は兄さんかいなア衆而目ねへ万「ヤイおのれはまた性根が直らぬのじやなかのれ故に此親や娘が今の此難儀恨みの數々聞きくされ〇忘れもせぬ十二年前おのれが大金を持出したばかりに落ぶれて今の此さま大阪の唐物町で水谷萬兵衛といはれた商人が今は堺で賣芝世帯磯邊の貝の手細工仕事其日暮らしをするといふもみんなおのれが極道か

らじやぞよとはいふもの、親の因果で忘れたひまはないわいやい 兼「イヤモウいひやうがない此身の不憐れむらだらけの衆五郎が懺悔咄し 刃「エ、又親をたまさうとて 兼「アレマアと、さん十年此方逢ひたいと夢にも忘れぬ兄さんが懺悔といへば嬉しうムんすマア聞いて上げて下さんせいなア 兼「チ、妹兄弟と思へばこそさつきからの仕打も恨ますおりや嬉しうて涙が出るわいとつさん腹も立うが聞いて下さい○お前が今もいふ通り五百圓の金を持出し東京へ往つて遣ひ捨て夫から始めて目がさめて何を堅氣な事としてと留五郎といふ大工の棟梁の弟子となつたも私のお袋はお前の後妻で私は連れ子の事だから内は此妹に立てさせてと一生懸命穴畑から習ひ覺へ手間賃を取る身になるとお前が戀しく 刃「エ、嘘をぬかせ 兼「ア、コレと、さんマア聞いて上げなさんせいなア 兼「ヤア夫から大以へ歸つた所お前の有家も知れぬ故今は上町の清五郎といふ棟梁の世話に成り稼いで居升が 刃「エ、そんなら上町の清五郎さんの 兼「お前清五郎さんを知つて居なさんか 刃「エ、○イヤ知らぬ 兼「けんは其棟梁の得意先さへ仕事の受取りに來た歸り妹とは思ひも寄らぬ難儀をして居る所へ出て助けてやつた跡で見れば百圓や二百圓に成る代品物といつをかきわかつて金に仕やうと又もわるい丁面を出したのもお前の有家が知れた時詫びの種なりくらしの足しにして上げたいとの心故夫が自分の妹であつたとはとつさん妹わるい事は出來ないなア

兼「そんなら今のはさうした心でムんしたか 刃「イヤお夏何のこいつの根性が直らうかい 兼「成程以前が以前故誠とも思ふまいが改心をしておればころ清五郎さんも世話してくれ殊に得意先さの仕事の引合ひにかうしてわしをおこすといふもの 兼「成程コリヤと、さんモウ兄さんの心は直つて居なさんすぞへ 刃「ム、成程さういへばさうやら改心したらしい改心さへしてくれたりしたら親子の中じや嬉しいけれど 兼「イヤ本どうに魂は入替升たさうしとどつさんおめへの酒くせ 刃「エ、 兼「モウすつかり止み升たか 刃「イヤ衆五郎まだ夫が止まぬいじや實はけんも夫故に 兼「エ、 刃「イヤ自分乍ら愛想が盡るのサ 兼「私の極道も元は酒から今ぢやア大酒は慎んで居ればころ一人前の大工にもちり升たお前も一つは酒の爲めだイヤ人に意見を受ける身に親に意見をするでもあるまい 刃「イヤ衆五郎よういふてくれた成程今の一言でそなたの改心誠と思ふおれもモウく酒はたつたマア何にしても衆五郎今から内へ戻つてくれ 兼「兄さんさうぞ今からいんでと、さんの安心するやうお世話をして下さんせいなア 兼「さう打とけてくれてわしも安心をし升たが元より親を戀しう思ひ戻つて有家を捜して居た故直くに行きたいは山々なれど此儘行けば親方を踏附けるといふもの 刃「成程さうじやな 兼「是からいんで清五郎さんに相談してわしが堺に住む事にするか又はとつさんと妹を大阪へ引取る事にするかそこは男氣の親方故相談に乗つてくれや

う 眞本に兄さんのいふ通り相談を仕なさんせねば済まぬわいなア 万、十二年前の衆
 五郎とは打つて替つた其心是を思ふと人は苦勞をして來ねば成らぬなア 衆、さうして妹探
 は何町だな 眞、アイ櫻の町東二丁で水谷万兵衛と尋ねたら知れるわいなア 衆、夫では豈に
 でも尋ねて行く妹うちもつらからうが暫く待つさんを大事にして上げてくれ 眞、アイ夫は
 承知でムんすわいなア 万、夫ではお夏歸るとせうか○そんなら衆五郎 衆、とつさん 眞、兄
 さん待つて居升ぞへ 万、サア行かう(ト萬兵衛お夏は上手へ進入る) 衆、金に仕やうと思つ
 た娘が自分の妹で邪魔に遣入つた人が親とはいかなふれもさよつとしたがマアとまかして
 今のやうにいふて置たがあの妹の器量では中々捨て、は置かれぬへ味くたまして金にする
 何ぞ工夫が(ト思案する此時神樂の頭を打込む) 衆、サ、(ト震へ上るを木の頭) 衆、夜神樂
 の始まりか怖りすらア(ト胸を撫下ろす此模様宜しく合方神樂にて拍子落)

二幕目 水谷萬兵衛住家の場

- | | | |
|----|----------|---------|
| 役名 | 一 大工 衆五郎 | 一 判人 吾市 |
| | 一 娘 お夏 | 一 河梅のお梅 |
| | 一 假お玉 | 一 水谷萬兵衛 |

一幕 家 娘 お 岩

本舞臺平舞臺見附押入納戸口風壁上手障子家体下手障りの入口いつもの所門口都て水谷萬
 兵衛住家の模様お夏貝細工となしお玉お岩住居稽古唄にて幕明く 衆、お夏さんよう精が
 出升なア 眞、何のなんぼも出來升せぬわいなア 衆、夫でも毎日住吉様へ商ひに往て本に
 親孝行の評判も尤じや然し此お玉さんも親孝行今度身賣りをして親を助けうとはあらいお
 子じやムんせぬか 眞、そんならお玉さんお前は彌々 眞、ハイ畑江の邸へ行くわいなア 眞、
 夫はマアお氣の毒な 衆、然し此頃は萬兵衛さんも好きを御酒も上らす仕事斗り大勉強でム
 んすかア 眞、夫も住吉様で行衛の知れぬ兄さんに逢ひ近日戻つてと、さんに樂させるとの
 咄し故でムんすわいなア(ト向ふより河梅女房お梅判人吾市出て來り) 衆、吾市さん奉公
 人の先きはへ 吾市、何でも此邊でムり升(ト舞臺へ來り内を覗き) 眞、お家愛でムり升 眞、
 夫では○御免下さり升せ私は大阪畑江の河梅から參り升た 眞、サ、お岩さん爰に居さんし
 たか此間咄しの娘さんはお内かへ 眞、イエこなたじやないわいなア 眞、ソレ見なさんせ○
 是は大きに失禮を申升た 眞、何のあなた 眞、さうして其娘さんのお内は 眞、是から三軒目
 じやが當人は爰に來て居てじや故一所に行き升せう 眞、さう教し升せう 眞、マアお宜しう
 ムり升るわいなア 眞、いづれ行く時に又お尋ね申升る 眞、サア行き升せう(ト四人下手へ

道入る」 喜本にお玉さんの勤奉公も元はかどつさんがお酒好きにて家業もせず借銭が出来た故この事内のおどつさんも酒を止めるこの事なれど早う兄さんの便りが聞たいものじやわいなア」ト向ふより萬兵衛細工具の風呂敷包みを持ち出て来り」 万兵衛「けふから禁酒をする覚悟で其酒代の八錢をこちらへ廻して貝を以ふたが此様に澤山にあるドレ歸り升せう」ト本舞臺へ来り」 万「お夏今戻つた 喜「サ、とーさん早うムんした 万「けふは酒代で此通り貝がらを仕入れて来たのじや見てくれ是を思ふと酒杯は勿体なうて呑むものじやないわい 喜「さう氣が附いたら安心じやわいなア」然しとーさん今お玉さんが行くといふて暇乞に来たわいなア 万「さうかいのあのお玉さんはそちと晝迄仲ようした友達じやが勤めに行くとは氣の毒じや 喜「夫もあのおどつさんが酒を呑んで仕事を成さんせぬ故に勤めに行かねば成らぬ事に成つたといなア 万「夫を思ふと此親はようころけふから禁酒をしたわい然し仕事にゐる前に晝飯をたべて置くか 喜「今拵らえうわいなア」ト勝拵らへをして飯をたべにかゝる向ふより榮五郎一舛徳利を持ち出て来り」 榮五郎「今開きやア向ふの内といつたがさうの親仁が居てくれーばい」が」ト舞臺へ来り」 榮「一寸お尋ね申升る水谷萬兵衛さんとはこなたでムり升るか 万「ハイこちらじやがサ、榮五郎がよう来てくれた 喜「兄さんサア道入らしやんせ 榮「夫では御免下さり升せ」親仁様是は本の手土産でムり舛

「ト一升徳利と竹の皮包みの蒲鉾を出す」 喜「おどつさんお土産と 万「エ、他人じやあるまいし土産が入るものか」然し榮五郎心配さうな顔付きじやか 榮「サア身の上まか、はる大變な事が出来升たマア聞て下され」○住吉で別れてから大阪へ歸り棟梁の清五郎さんに打明かして話した所さういふ事なら大阪へ呼寄せるがよい得意はかれが世話してやらうとマア得意先さへ顔を出すがいふかれの代りに手間賃を受取つて来てくれといはれた故私は北濱の或お内へ往た所五十六圓といふ手間賃を渡された上普請の話しから酒の御馳走ツイ酔たんばになつて仕舞つて友達の内へ寐込み目が覺めて見た所受取つた金を何所で落したか懐ろにないのじや棟梁には言譯はなし思案に尽きて出て来升た 万「ハ、ア榮五郎改心したといふてそんな事を拵らへていふてうせたなエ、早う出てうせさせ 喜「マアとーさん待ちなさんせ 万「イヤお夏はつて置け」○ヤイそんな手をくふやうなかれじやないわい 喜「サ、さういふは尤たが棟梁も深切にいふて下さる中へろんな事をいつても歸られず又そんな事をいつちやア折角の信用を失ふ譯故無理とは知りながら其金の無心に来升た 万「成程清五郎に逢はぬ譯は分つたが五十圓所か五錢の金も手元にあつた事のない貧乏人に 喜「イヤ出来ねば夫迄の事別に必配には及び升せぬ私はモウ歸り升 万「マア待てさういふと彌々改心したと思へば猶々心配せねば成らぬ 喜「モシとーさんどうぞ私の身を賣て兄さんの難

義を助けて上げて下さんせ 刃「阿房いふかい勲奉公杯にやつては死んだ女房のお椀に濟まぬわい 夏「イエさうでもムんせうが兄さんの爲めのお前の爲めのお玉さんがよい手本兄さんお前から頼んで下さんせいなア 衆「其深切は嬉しいがおれの口から頼みもならずといつて金の出来ねへ時は信用も無になつてとつさんに樂もさせる事ならずア、どうしたらいいだらう 夏「身を捨て、こそ浮む瀬もありといへば 衆「とつさんよい思案をして下さい 刃「衆五郎分つた大事の娘であるなれど今差當る金の入用 夏「勤めにやつて下さんすか斯ういふ事のあるはしかお玉さんの判人が門違ひしてムつたも話しの手筈にまつて幸ひ 衆「何にもいはぬ是じやく」ト手を合はせる」 刃「斯う極つたらお岩さんに 夏「夫では私が一寸往て」ト下手へ這入る」 衆「とつさん妹のお蔭で私も落附き升たが實に孝行な妹でムり升なア 刃「そりや氷の間わしの酒呑みを介抱してくれた位じや」ト下手よりお夏お岩出て來り」 夏「とつさんムんしたぞへ 刃「ナ、お岩さん是が私の忤でムり升 衆「そんな兄さんとはお前さんか 衆「毎度とつさんはお世話様でムり升る 刃「お岩さんお玉さんのお前の口つぎで奉公に行くさうでムり升るが私も御相談を仕たいは此お夏が身賣りの事 衆「何じやお夏さんを何でじやぞいぢやア 刃「實は兄の身に附いて急に百圓の金がなければ命にかゝはる譯があるのでお夏が身を賣り兄の難儀を助けたいといふ頼み 衆「さういふ事なら判

人さんに話して見せせう一寸待たしやんせ」ト下手へ這入る」 衆「コリヤ妹お前の身の代りて棟梁へ濟したら又清五郎さんがごんない、工夫があらうも知れね暫く辛抱をしてくれ 夏「其釋りにいといさんと 衆「氣遣ひすな一日も早う大阪へ引取つてお前と二人前孝行をするわい」ト下手よりお梅お岩お玉出て來り」 衆「萬兵衛さん今の事を話したら早速承知して下さんしたわいなア 刃「夫は大きに有難うムり升る 吾「そこで娘は最前見てあるから三年百五十圓と定め五十圓は今渡し跡金は氣の毒ながら大阪へ判を持つて受取りに來て下さい 衆「其時證文も巻いてよいわいなア 刃「夫は有難うムり升る 吾「サア五十圓を渡し申せせう」ト金を渡す」 刃「夫では衆此金を」ト衆五郎の前に置く」 夏「跡金の五十圓はと、さんに又五十圓は兄さんに 刃「夫も兄に渡して一所に樂まうわい 衆「お夏さんお玉さんも御一所で 吾「私も氣が丈夫になり升た 夏「今迄通りに仲ようして 衆「夫ではお出を待ち升る 吾「サア行き升せう 刃「何れ私が参り升る」トお玉お梅お岩お下手へ這入る」 衆「是で眞人間になれるといふもの〇然しとつさんわしが土産の此酒を」ト徳利を前へ出す」 刃「夫では悦びに衆五郎 夏「又お前呑むのかへ 刃「違ひない〇飯でも祝ひに」ト膳を前へ置くのが木の頭」 刃「成るであらう 夏「兄さん悦んで下さんせ 衆「おれもすつかり 衆「刃「禁酒じやく」ト捨紙詞にて三人宜しく拍子幕

三幕目 (志改亭裏口の場) (幸橋安飯屋の場) (志改亭座敷の場)

役名	一役
一大工 衆五郎	一姫 お園
一大森 甚兵衛	一番頭 喜助
一水谷 萬兵衛	一車夫 音松
一女房 お倉	一同 熊吉
一柏木 宗三郎	一步行 勘七
一藝妓 糸吉	一世話方 惣兵衛
一仲居 お花	一船頭 仙吉
一下女 おさよ	一おちよ ぼか金

本舞臺二重の石垣正面黒板切戸口下手平舞臺小家形船障子をしめあり平舞臺浪布浪手摺都て志改亭裏口の模様世話方徳兵衛床机に腰をかけ歩行勘七立かゝり流行唄にて落明く徳兵衛「勘七さん御苦勞じやな 勘七イヤモウ朝から駆け歩いて追々見へ升たがまだ取かたりの糸の三味線が参り升せぬ故是から行かねば成り升せぬ 勘七さうぞお頼み申升 勘七レ

往て参り升せう(ト下手へ這入る) 勘七わしも跡順を極めやうか(ト切戸口へ這入る切戸口より娘お園跡より番頭喜助出て来り) 喜助「モレ嬢さん何所へお出被成升る 園私は一才 喜「イヤさうは行さ升せぬマア此石へおかけ被成升せ○時にお嬢さんあなたかどなしいとて程のある事若旦那宗三郎さんの身持はさうです志改亭の淨るりを聞きに行くといふて藝妓の糸吉とあの通り酒斟みかはしあなな腹は立ち升せぬか親旦那にはモウ宗三郎とお園と要合はしてもよいけれ今暫く性根を見た上でとまつしやるのは宗三郎さんを御信用成さらぬ故の事あんな極道の宗三郎さんの事を思はずに何と私のいふ事を聞いては下さらぬか 園「アア阿房らしい私しやろんな事聞く譯はないわいのう(ト切戸口へ這入る) 喜「何の事じや折角よい首尾と跡を附けて来たのに取逃したかいつも衆五郎がいふ通り此道斗りは氣が短うては行かぬ知らぬか然し衆五郎は何として居るのじや知らぬト(衆五郎切戸口より出で来り) 衆五郎「番頭さん 喜「サ、衆公か待兼て居たあの一件はさうだへ 衆「サア糸吉も背を折つてあり升れぬ 喜「おちよ升れぬじやないモウ二月立つたら宗三郎と嬢さんと結婚するに極つて居る故仕事をするのは今此時じやろんな氣の長い事をいふては困るじやないか 衆「何分相手が石部金吉でムリ升が魂膽をして極道にした時はお禮はさうしておくんあさる 喜「さうや此間もいふ通りあの五十圓の証文を其儘お前に戻すはなさうしてわしが

柏木の主じになつたら貴様が出入りの棟梁じや 衆「イヤ棟梁に成りたくない夫よりは糸吉の店の敷金を出してわしの女房にして貰ひ升せう 衆「ろりやせちらでもしてやるは 衆「夫では糸吉も悦び升せうからわいつの腕によりかけて今夜は過さず手に入れ升せう 衆「夫はよい返事を待つて居るぞよ」ト切戸口へ道入る」衆「あんなつらで嬢さんをせしめうとは餘ッ程番頭も人がいゝねへ」ト切戸口より藝妓糸吉出て来り」衆「糸さんよく来なつたなア 衆「ナ、糸吉か喜助さんに頼まれた一條も長くなつて言譯もなし又懐ろの都合もあるから今夜は是非とも頼むせ 衆「私も其話して出て来たがあの若旦那を客に取るのは私も何だか氣が置けて 衆「何おれが承知の上だから遠慮は入らねへ早く手のひらへ丸め込んでせしめた金で今の苦勞を昔語りにしやうじやアねへかダカラ今夜は是非共 衆「あの緊蔵の宗三郎を 衆「やつ附けてくれ」ト扉の内にて」○「糸吉さん」 衆「アレ誰やら私を呼んで居る 衆「早く往つてくれ 衆「上り口迄お前もお出で」ト兩人切戸口へ道入る船の障子を明け内に清五郎居て」清五郎「今の男は内弟子の糸五郎女は藝妓の糸吉だが今夜柏木の若旦那を取込む話し餘ッ程悪いやつだなア」ト切戸口より宗三郎出て来り」衆「ちつとの酒に大酔した座敷は實にいやになつた 衆「然し今の話しでは手練手管で取入つて 衆「わしを酔はせる積りで来ても 衆「たます積りも御發明故 衆「滅多に深みへはまるものか 衆「どうぞ首

尾よく」ト船のかはで煙管を叩くのが道具粹りの知らせ」四人「遅れたいなア」ト兩人心々の思入れにて宜しく返し

本舞臺平舞臺正而世話障子紺の古き暖簾板羽目上手二重の出しかけ内座敷の心にて前側障子上り段下手格子此前に酒肴の障子を建かけ能き所に長床机安飯屋の道具を飾り真中に洋燈を灯し車夫音松熊吉小皿物にて酒を呑み居る大森甚兵衛燭をなしおちよばお金手傳ひ居る歩行動七立かゝり空を見て居る都て大森甚兵衛店先の体賑かなる稽古唄にて道具納る 衆「七」どうやら日和になつて来た雨に降り込められ大きにお邪魔を致し升た 衆「勸七さんマア一服しやさんせ 甚兵衛「今燭が出来升から」一盃上つて行つしやれ 勸「有難うムリ升がけふは急ぎ升からお預け申て置き升る」ト下手へ道入る」衆「いつもながら氣のよいお人じや」然し御酒はどうでムリ升 衆「貰ひ升せう 甚「ソレお金 金「ハイ」○サアお上り」トたんだの酒を持つて行き徳利へうつす」衆「サア熊公 熊「サア手前からやれ 衆「然しモウ車曳もだめだせ流車が出来てからは住吉から難波新地へ四錢より出さねへからな 衆「ナ、其住吉で思ひ出した此間貝細工賣りの娘をなぐつたらうなアノ娘が堀江の河梅から出て居るさうださつきおれが見かけたが兎角女でなけりやア出世は出来ねへな 衆「さうするどおいらは世界のすたりものか」ト酒を呑み居る橋掛りよりお倉湯上りの心にて出て来るお金は居

眠りとして居る。お倉お前さん一寸愛へ来ておくれ。お倉何じや。お是だから私が風呂へ行きがけに山を入れておしまいといつたのにぐすくして居るから亡者が舞込んで来たのだよあんな化者はいなしてお仕舞な。お何だ化者だ斯うして呑みに来りやお客様だ洒落た事をおかしやアがるな。おいつたらどうだへ其通りだもの。お何をおかしやアがる此唄ア左衛門が「ト立かゝる」お「マア」く待つて下さり升せお倉お前もどうしたものとやたしなさんか。おたしなむもないものだ。○オヤお前達は住吉で迷つた車屋さんだねへお「サ、さうだ其時挨拶をして下さつたおかみさんだ。おそんならあなたは此内の。お「さうさ私は愛の女房サ。おお倉此車屋さんを知つて居るのか。お住吉で顔は見知つた車屋さんだよ。おあなたがお愛の御内方とは知らぬ者だから。おツイ酒の上で色々な事を。お人どうか堪忍して下さり升せ。おさう折れて出られては私もまんざら野暮じやないよお前さん酒を飲んで上げておくれ。お「よし」く。お「コト」やさうも濟み升せんな「ト甚兵衛酒を控ら来り」お「サアお上り。お夫じやアよばれ升せうか。お實に氣の捌けたおかみさんだな。○時に此酒はよばれるとした所で先の勘定は何ぼうになり升。お何勘定はさうでもようムり升よ。お何をいふのじや跡の酒は兎も角も先の勘定を。お夫だからお前は氣が小さくつていけないといふのだよ商人は損をして徳を取れとサ車屋さん心配はおよしよ。お夫じや

ア又客を連れて来升から旦那けふはよばれ升せう。お人「有難うムり升。お此がきは居眠り斗りして○コレお金。お「ハイ。お今暮れた斗りだのにモウ居眠りをして。おコレお倉朝は早し夜は遅し居眠る位は堪忍してやれ。お夫だから増長してならないよ「ト二重へ上り身仕舞ふかゝる兩車になり萬兵衛走り出て来り」お兵衛「ヤレえらい雨じや幸ひの此飯屋○ハイ御免。お「ハイおなた濡れてお出なされたのでムり升か此火でかはかし成さい。お「ハイ有難うムり升さうぞ飯を一膳下さい。お「○畏り升たさうして御酒を附け升せうか。お「誠相な飯斗りお頼申升「トお金飯と小皿物を持ち来り」お「サアお上り被成升せ「ト萬兵衛飯を食ひかける。お「コレお金此銀臺と片附けてモウお休み。お「ハイ夫では休まして貰ひ升る。お「休りく「トお金二重へ上り前側の障子をしめるお倉こちらへ来り」お「あなたマア着物をとおめよりなさい。お「有難うムり升る。○ヤおあなたは住吉でお世話になつた。お「サ、お前さんは其時逢ふた生酔の。お「ハイ萬兵衛でムり升る。お「本に其時出逢つた人だ。お「其時の車屋さんでムり升か。お「然しお前さんといひ車屋さんといひ今夜愛で落合ふとは。お「是も御縁でムり升せうがそんなら愛はおなた方御夫婦のお内でムり升るか。お「ハイさうでムり升る。お「其節はいらひ御厄介になり升て有難うムり升る。お「あの時に引替へて酒を上らねなるとマア一つ。お「イエ夫はお預け申升る實は其後酒を断ら升て今では此方でムり升る「ト

飯を食ひかける」 吾夫ではちつとも上り升せぬか 熊「あらう思切り様ですな 吾夫も斯うでムリ升る我身の耻を振舞ふ様でムリ升るがマア聞て下さり升せ○皆さんも知る通り呑みさへすれば氣違ひ同様夫を住吉で異見を受け酒を止めたと娘も悦び又家出をした仲にも逢ひ升たが其仲の身に附て五十圓といふ金があくて叶はぬ事が出て娘が堀江へ其身をば賣つた金をけふ受取りに行き歸る途中の俄雨一人の娘につらい奉公さす程でムリ升れば中々酒所じやムリ升せぬ」ト飯を食ひ咽に詰りしこなし」 吾「モンどう成され升た」ト介抱し 吾「あなた湯でも汲んでお出でな」 吾「タツト承知じや」ト湯を汲み來り吞ます」 吾「有難うムリ升るお蔭で漸う飯が咽へ通り升たモンお家モウ大丈夫でムリ升 吾「さうでもムリ升せうがモウ少し此胸を」ト萬兵衛の胸をさすりフツ金財市を引出す」 吾「モン夫をどう被成升る 吾「イエどうもするのではあり升せんが今が今お咄しの 吾「ハイ娘の身の代の百圓でムリ升があなたは何に此金に 吾「サア胸をさすつて上げるはずみにツイ手がさはつたのでムリ升が落しでもしては悪い故氣を附けて上げ升たのサ 吾「夫は御深切に有難うムリ升る 吾「然し今から堺へ歸らは物騒でムリ升故大阪でお泊り被成升せ 吾「私もさう思ひ升故今夜は藤波村の知るべの方で泊る積りでムリ升る然しけふは色々の心配で寝飯もたべず目がまひさうでムリ升た 吾「本に今はあふない事然しお酒の咽に詰つたためしはないがナ

ア車屋さん 吾「さうでムリ升とも心配した時は酒でなければ胸が下り升せぬ 熊「私杯も腹のへつた時は一盃引かけ升が根が米の水でムリ升から腹はふくれて凌げ升る 吾「どうです一盃 吾「イヤ夫ばかりは 吾「あなたあんまり堅いじやムリ升せぬが 熊「御當家の酒は又格別此邊にはムリ升せぬな」ト兩人酒を呑んで居る萬兵衛は羨ましさうに見て氣を替へ」 吾「御亭主モウ一勝下さい 吾「畏り升た」ト飯を盛つて出す」 吾「人は酒を斷つといひ升ければ本統に立つ事ハ出来ぬ物で早い所が私の内で賣る肴にも酒が運入つて居るではないかいなア 吾「エ、そんなら此焼豆腐にも 吾「ハイ酒しはでたいてあるのでムリ升る 吾「ろりやあらう事をした」ト手桶の水にて口を洗ふ」 吾「モンお前さん幾ら口を洗つたとて腹の掃除が出来升ものか 吾「とてもものに一盃呑み成ささい 吾「エ、モウ教し方がムリ升せぬ」トお倉燭酒を持ち來り」 吾「私が一寸お酌を致し升せう 吾「どうぞ飲の課程」トお倉酒をつぐ 吾「そないについで下さり升ては 吾「アレヤ遠慮しないで 吾「モンお倉一寸といふに一盃ついで 吾「お前何をいふのだへお客のお酒を止めるといふがあるものかね」ト萬兵衛酒を呑む 吾「お見事くサアモウ一つ 吾「夫ではモウ少し 吾「少しといはすとお上りなさいよ」ト一盃つぐ 吾「こないに澤山おつぎ下さり升ては 吾「多くばるこへ捨て下さり升せ 吾「波相を勿体なら」ト呑干す」 熊「好きな物を斷つといふハ該の害に成り升せ 吾「マア持

合せの此猪口を「アイヤ車屋さんのを頂戴しては済み升せぬ」夫では一寸おつき申升せ
 う「ガ、今のは實は酒の味を見ずに呑んで仕舞升たから爪の垢程ついて下より升せ」夫で
 は味はふて見て下より升せ「トつぐ」又「一盃おつきなまつて」ト呑干し成程是はせうも中
 々住吉の丸太格子の酒も跳で逃げ升るな「又其おはりの口へ是でモウお一つ」ト茶碗へ
 つぐ「ガ、ア、申渡相な大きな物で呑み升ては」さうでムり升あんまり上つては悪うム
 り升せう「何だね餘計な世話をやかないで酒でも早くつけてお置」夫でも斷つた酒を
 食「エ、つけてお置きといふに」又折角ついで下まつた故半分だけ頂き升「半分たべるも
 一盃たべるも同じ事でムり升是位上つたとして鹿相なされも仕升まい」夫は一合や二合の
 酒に酔ふ様から身代と棒には振り升せぬ「ト又呑む事あつて」又「エ、甘露く成程是は
 よい酒じや夫では車屋さんはお前さんへ」是は有難うムり升「ト酒を呑み」夫では
 失禮ながら「又お前さんのお盃一つ頂戴致し升せう」又「ア、申其様にムり升成たら」夫
 何だねへ又しても口を出して何にもいはずに酒の燗をぬしな夫が商賣じやないかねへ「さ
 うじやければあんまり」又成程御事主のお同でモウ止め升せう「さうじやいけ升せんあ
 なた酒は強いではムり升せんか」夫「呑める酒なら呑み被成れ」又「何だ酒が強い俤ながら
 強ければこそ身代も呑漬したのだ夫でなくば今頃は御杖附きの自用車に乗つてハイ御覽

くだ「さういひ被成るけれどそんな事を見た者はムり升せんせ」又「コトヤ車夫如きの
 分際で何といふ事をいふ」といひたい所をぬき車夫先生の馳走に成てはいふ事もいはれん
 な「ト車主何をぼんやりして立つて居る者を持つて来い」○斯う見た所では酒が呑めぬ
 がエ、何でも構はぬ有りだけ持つて来い「ト香を持来る」食「モレあなたがそんな事
 を成さらないでも」又「仕たらさうじやへ香を出しても勘定が覺束ないと思ふて居るか俤も
 ながら爰に百圓ある」ト以前の金財布を出し「又百圓あつたら釣が来るであらうアイヤ屋
 らすは爰に錢もあるせ」食「さうりや分つてあり升よ」又「ア、ハ、ハ、ハ、分つてあるから酒を呑む
 べしついで頂戴」食「ハイおつき申升がお金を懐ろへお入れ被成升せひよつと鹿相があつて
 は悪うムい升上」ト無理に懐ろへ入れるやうにして自分袂へ入れ」食「ア、おつき申升せ
 う」又「ナット有難い」○是から道頓堀へ出かけて呑直すからおかみさんも一所にお出で車屋
 も供をせい「食御馳走なら又今度頂戴致し升故今宵の所はお歸り被成升せ定めて銀さんも
 案じてお出で成さい升せう」さうだく「モレあなたをないに酔ふてはいけ升せん大金を
 持つてお出被成る事故」さうさう酔はぬ内にお歸り被成升せ「又然り御尤君達のお説諭に
 随ひ退散仕らう時に車主勘定だ」又「アイヤ丁度拾貳錢でムり升」又「夫は餘り安いな爰に拾貳
 錢五厘ある所で五厘はおかみさんへばらだア、ハ、ハ、ハ、」ト銅貨を袂より出す「是は有

離うムリ升「ト受取る」万夫ではお客様のお立ちだぞ 吾あなたようお出被成升た 吾
 氣を付けてお出なさいよ 万ア、氣持がよくなつたエ、イ「ト頭を掻ひながら向ふへ運入
 る 吾然しおいらも御勘定を 吾酒は負けて肴だけは貰つてお置き 吾ろりやお氣の毒で
 ムリ升な 吾せうど是を御縁にして御最負をお頼みだよ 吾そりや友徳にも申升しよいか
 客も連れて参じ升 吾さらして肴代は 吾ハイ六錢五厘じや 吾愛に置き升「ト錢を置く
 熊夫では大きに有難うムリ升「ト兩人下手へ運入る」 吾チイ萬兵衛さん早く門の戸をさ
 してお仕舞 吾夫でも 吾何だね何がこわいのだへ早くおさしな 吾今しめるがな「ト戸を
 しめにかゝる向より萬兵衛出で直ぐに舞臺へ来る」 吾誰だへるこへ来たのは 万ハイ私
 でムリ升堺の水谷萬兵衛でムリ升が爰らに落てはムリ升せなんだが 吾何と落し被成升た
 万最前の百圓を落し升た 吾エ、万たべ酔てはれり升たがろこ迷行くと心附き金がない
 ので酔も醒り走つて歸り升たが道で落さう筈もなし落せば爰らと思ひ升て 吾夫は何所で
 お落し被成升たか 吾あらい事を被成升なたア「トそこら三人して探し」 吾爰らに落て
 はムリ升せんな 吾お前さん道で落したのではムリ升りせんか但しは今の車屋でも 万成程
 わの車屋は 吾あちへ行き升た「ト下手を教へる」 万左様ムリ升るか「ト行かうとして」
 万お家さんてんがう被成てはいけ升せぬ 吾何てんがうとは 万チアわの金は最前お話

し申た其金を取られ升ては娘よ濟まぬ斗りでなく俵が身にもかゝはる大事せうどお戻し
 被成て下さり升せ 吾モンく其金を私でも取つたぞおひ被成るのかへ 万イエさうい
 ふ譯ではムリ升せぬが最前あなたが懐ろへ金を入れて下されり升たは飽に覺へており升る
 がひよつと其時あなたの袂へすべり落ても致し升せぬか 吾モン人の懐ろへ入れた金が私
 の袂へすべり落さうな道理があり升かいなア 吾モン萬兵衛さん何しに内の喉がお前さん
 の金を取り升ものかろんな言掛けを仕なさる覺へもない事を 万覺へないとおつしやるか
 らはコリヤ夫婦馴合ひで仕事をしてムリ升な 吾そないに疑ひ成なさるならお倉庫になつ
 て見て貰ふがよい 吾馬鹿な事をかいひでない女の身として男に肌を見せられるものかそ
 んな事を仕ないでもツイそこへ行けば巡査の詰所もあれば萬兵衛さん私と一所に来ておく
 れ調らべを受けやうではあり升せんか 万エ、吾証拠もないに言掛けを仕られては私の迷
 惑斗りでなく此町内で正直者も評判の亭主の顔造りしては濟み升せんチア一所に来て下さ
 いな 万マア待つて下さり升せ鹿相な事を申升た御免被成て下さり升せ 吾思ひ違ひどお
 いひのかへ 万全くさうとは思へども悲しい事は証拠がないので○イエサ証拠のあらう筈
 もなしおのが酔ふたが眼り故致し方がムリ升せぬ 吾疑ひが晴れずは来ておくれ 万ア
 、申晴れ升たく疑ひは晴れ升た 吾イエ口ではさういふて居れど心内では疑ふて居る

様子何でも派出所へ出て 吾コレ待ちらんか真兵衛さんも金を落し心配として居られる中斷りいふて居らるればマア丁簡して上げい○お前さん道とモ一度尋ねて見なされ 吾有難うムリ升等ね升ても金の出やう管はなれど兎も角も歸り升せう○是が証據でもあつたなら只置くやつではおけれせも 吾何だとへ 吾イニ何處相と致し升た「ト向ふへ這入るお倉出亦庖丁と取り」 吾コレお前さんは是であいつをやつ附けてお出で 吾ニ、罪も報ひもないお人を 吾マア何でも金は私の仕業と見極めて居る様子故 吾何は見極められても覺へがなければ構ふものか 吾其覺へがあるからマ 吾ニ、 吾百圓の金は愛にゐるよとつさあいつが落した時深切らしく懐ろへ入れたと見せ其場を袂へ入れて置たのマ 吾ニ、 吾マア道に背いた様なれど此金を資本にして立派な商賣を始めたらお前も樂が出来やうと思ひ附いた出来心あいつを生かして置く時は枕が高く察られぬからお前殺して来ておくれ 吾「コレお倉現在可愛奴の身の代る取らうとは別欲じや其百圓とこつちへ貸せ戻して来る 吾馬鹿な事をおいひでない折角是程骨を折り今更戻してつまるものか 吾そりやお前悪いせ夫よりは正直に 吾夫とやとやなど勝手にかしよ 吾コレそないにおこらいでもよいではないか 吾マア考へて御覽な今此金を戻した所が何れ警察の耳に入ればお前も私い赤い着物を着ねばならぬが承知だらうねへ 吾わしや知らんく 吾假令お前は知らずとも私の口

先「つにてお前を重罪に落すぞへ 吾そんな無茶をいはれては 吾夫がいやなら殺してお出 吾そんな非道な事が出来るものか 吾エ、これつたいねへ 吾よ、よしじや殺して来り 吾夫では遠く行かぬ内 吾是から跡を追ッかけて 吾おじを組んではいけないよ 吾待つて居てくれ「ト出亦庖丁を持ち向ふへ這入る」 吾首尾よくやつてくれ、ばよいが何にしても金の手に入つた様子を衆さんに知らしたいが今夜は志改革の淨るり會へ往つた管手紙で知らしてやると仕様「ト戸をへる上手より勤七出て来り」 勤モウお休み被成升たか 吾おなたいへ「ト勤七戸を明ける」 吾マ、勤七さん今頃何所へ「トいひながら手紙を書て居る」 勤どうぞ足を洗はして下さり升せ 吾マア手桶よ水がある故洗ひなさいよ「ト勤七足を洗ひ」 勤さうして旦那は 吾今そこ這行升たがね前さん幸ひだ此手紙を届けておくれ志改革へ衆五郎さんが往つて居る筈だから「ト手紙を書任舞ひ渡す」 勤そんならおなたの 吾エ○イヤ何夫は内へ来て呑んだ勤定の催促故人に見せないやうに 勤ヘイ何もかもこんでかり升る 吾是は僅五錢だけだ使賃に焚でも 勤毎度有難うムリ升る 吾「マア手紙をお出し」 勤ヘイ「ト手紙を出すを銅貨を乗せるのが道具替りの知らせ」 吾頼んだよ 勤宜しうムリ升「ト勤七下手へ這入るお倉は向ふを氣使ふ此枚様宜しく返し

本舞臺正面中障子の裏上下障子家体爰に宗三郎系吉住合方にて道具納る 宗三郎系吉さん

本舞臺上手より真中程へ幸橋の出しかけ下の方下り口に板石を敷き向ふ町家と見たる夜るの中遠見橋の下浪布を敷き下の方に柳の立木犬寐て居るしんめりとしたる合方水の音にて審明く「ト上手より町人の仕出し二人下手より」温館屋「温館屋出て来り温館や蕎麥やウー△「温館屋二ばいつけてくれ 温ハイ」ト温館と二勝拵らへ兩人是を喚て捨置詞にて錢を拂ひ皆々進入る向ふより萬兵衛出て来り」万兵衛「焼酒を破つたばかりに思ひも寄らぬ今夜の災難其盗人は知れてあれを証拠のなさに却つてこつちが頼りいふて来る内も思案の附かぬ身の言譯ア、どうしたものであらうなア」ト本舞臺へ来る此内甚兵衛山刃庵丁を持ち跡をつけ来る」万是から難波へ往て長七さんに話した所で金の工面は出来ぬ人コリヤモウいつを思案を極め言譯せうより外はない○コレ娘了簡してくれ親や義理ある兄の爲に其身を苦界へ沈めてくれた身の代金は酒といふ辨が又發して取られたわい無やそなたの心では奉行甲斐のない親じやとも思ふであらう又棟梁の清五郎さんが深切を真見迄仇にした言譯も爰で死んでする程に了簡してくれ只惜いは飯屋の女房いづれ亭主と馴合ふて金を取つたに違ひない人に恨みがあるものか思ひ知らさで置くべきか○南無阿彌陀佛」ト橋の上より川へ飛込む此内甚兵衛は萬兵衛を出刃庵丁にて突うとして突兼る事色々あつて此時胸よりして思はず犬の足を踏み犬吠つく甚兵衛思入れあつて犬を切殺し其血を袂に塗附け向ふ

へ走り這入る此様様宜しく返し

本舞臺常足の二重見附床の間横上手障子家体下手以前の戸じまり能き所に井戸あり二重に行燈を灯し能き所に枝折門貫木を入れ上手取合に手水鉢あり都て大森甚兵衛内奥の休二重にお食樂五郎酒を呑み居る稽古唄にて道具納る 兼兼さん何も夫程いせいに合はさなくつてもいゝものを然しお前が糸吉を思ひ切つてくれれば私も安心といふものだよ兼兼さうして頼んで置た金は出来たかへ 兼夫は手紙で知らした通り金は持つて居るから心配せずにマァ一つお上りよ 兼持つて居る金なら出さねへか金の顔を見なくつちやア安心が出来ねへから 兼ソレ御覽此通りだから」ト以前の百圓の金を出せ」兼成程コリヤ百圓だな是どおれにくれるのか 兼虫のいゝ事をおいひでないお前に頼まれたは五十圓で其金は百圓だよ 兼」さりや知つて居るが然し此大金をどうして持つて居るのだ 兼夫には障のある事で今夜斗らず手に入つたのだよ 兼」そんならおれに貸してもいゝだらう 兼元よりお前に貸して上げやうと思つて呼びに上げたのだが甚兵衛に一旦渡してやらないと少し替が悪いから渡した上で細工をするから二三日待つておくれなさうして久しぶりだから今夜は止つていつておくれ 兼」夫でも亭主が戻つたらどうする 兼何そこに小間もあゝ私がおうか丁夫とするから其積りでゆつくり呑んでおくれ 兼」夫じやア願をすへてよばれやう」ト

器と吞じ向ふより甚兵衛走り出て舞臺へ来り」
 五郎「コレを金明けてくれ」
 五郎「コレ、舞臺が戻つた大變だ。金、いゝよ落附いてお出でよ。五郎早う明けてんか、今明けるから待つておくれ」
 「ト衆五郎を上手の家体へ入れ戸を明け」
 五郎「お前御苦勞だつたねへようして首尾は、五郎上々じゃ、足と洗はうか」
 「ト井戸にて足を洗ひ居るお金二重へ上り」
 五郎「お血を見たれば殺して来たに違ひはないが、よくあの氣でやつ附けて来た事だも、」
 「ト甚兵衛足をふき二重へ来る」
 五郎「此處丁の血を見る、餘ッ程働らいたと見へるが、ようして何所で殺したのだへ、五郎幸徳の南詰で、金、ようして死骸は、五郎桶の真中から川へはり込んだ、金、ようして仕舞へば足の附く氣遣ひなし、五郎見れば、ここに骨もあるが、一盃やらうか、金、お前の歸りを待つて居たのだ、五郎そりやよう拵らへて置いてくれた併し出刃庵丁は、金、愛にあると、五郎ア、思ひ出せば氣の毒なあの傭の甚兵衛さん、金、お前の爲りに手にかゝつたも、五郎元は娘を賣つた金故、金、何にしても嬉しいねへ、五郎然し其金を義理ある兄が、」
 「ト上手家体にて衆五郎閉居て」
 五郎「そんなら若しや、おれの親父と、金、エ、五郎一間に誰やら、」
 「ト行きかけると」
 五郎「誰が内に、」
 「ト甚兵衛を突すへるのが木の頭」
 五郎「居るものかね、」
 「ト此儀、殊宜しく拍子幕」

五幕目

〔松屋町大森酒店開業式の場
 大工棟梁清五郎内の場〕

役名

- | | | | |
|-------|------|-------|-----|
| 一大工棟梁 | 五郎 | 一若い者 | 吉兵衛 |
| 一番頭 | 喜助 | 一同 | 惣吉 |
| 一職人 | 三吉 | 一大工棟梁 | 清五郎 |
| 一同 | 勝吉 | 一仕出し | 大勢 |
| 一合長 | 家金兵衛 | | |

本舞臺常足の二重上手へ通り見附戸柳暖簾口風壁下の方落間酒賣場下手荒杵子いつもの所門口是にふらふ二本交交し紅摺挑燈を深山につるし二重に若い者吉兵衛釣銭を出し居る若い者惣吉酒を敷り居る仕出し大勢酒を賣ひ居る都て大森酒店開業式の模様賑やかなる囃物にて幕明く」
 「ト捨置詞にて仕出し昔々酒を賣ひ橋掛りへ這入る」
 吉兵衛「ヤレ、ヤレ、お飯をたべてから立往生であつた、惣吉、ア、一服呑まうか、其時に惣吉さん斯うしてけふ開業をしたはよいが内のお家のあの病氣每晚くうなされるので私は氣味が悪うムリ升、惣吉は私も其通りじや、奉公に来て直ぐに暇を取るのも済ますとけふ迄は辛抱として居升が、」
 吉兵衛「主人がよいお方故暇を取るも氣の毒じやと思ふては居るもの、モウ辛抱が仕切れ升せぬのじや、」
 「ト奥より甚兵衛出て来り」
 甚兵衛「皆御苦勞であつたけふは定めて草臥たであらま

りへ這入る」三「いやはは風呂になど入つて来やう」ト、橋掛りへ這入る納戸口より榮五郎
 意氣な形りにて出て来り「榮五郎」大きに長咄しを致し升た左様なら「ト、門口を明ける奥より
 清五郎出て来り」清五郎「榮五郎待て」奥「へい何でムリ升」清「貴様悪いせいで仕舞へ」奥「
 いへとは何と」清「我が工んだ一條を」奥「エ、」清「知るまいと思ふか馬鹿野郎り」○柏木の番
 頭喜助と心と合せうぬが馴染の藝妓の糸吉を玉に使つて宗三郎様を放蕩者に仕込んだ上柏
 木の内をほり出し喜助と防目相續に立てうぬは藝妓を受出し賞ひ浮いて世界を暮さうとは
 大層味の工みだなア」奥「親方そんな事はムリ升せんせ」奥「イヤ隠すな手前と藝妓の糸吉が
 悪事を賭つた其所は幸町の四海亭」奥「エ、」清「然も裏手の涼み舟で残らず聞いた清五郎
 奥「そんならあの時親分が」奥「察耳に水の流れと共に」奥「よ、」清「斯ういふ悪事を工む者は
 師弟の縁を切つたれば此後内へは来てくれな」奥「仕方がねへさういはれては言舞したとて
 逆も聞いては下さるまい又姉御から挨拶を夫じや親分今日は暇申升る」ト、花道へ行く向
 ふより喜助出て来り」喜助「ナ、榮五郎じやないか」奥「ナ、番頭の喜助さん」喜「今貴様を捜
 して居た日外貸した五十兩急に戻して貰はにやならぬ」奥「そんな事をかつしやつたどて今
 といふて私の手元」喜「ないのは知つて居る」奥「夫に又催促なさるのは」喜「實はわしは足
 袋屋の看板で足上りじや」喜「エ、そんならお前は柏木と」○私も今親方の内と梵天圖」喜「エ

、貴様もかそんなら今戻して貰ふ程にも行くまいさうりや困つたなア」奥「ナ、よい金儲けが
 ムリ升せちつといひにくいが一寸耳を」喜「ナットレ」○「ト、榮五郎叫く」喜「そんならわし
 が太鼓と焼酎火を」奥「ア、モレ静かに仕なさい」喜「そんなら榮五郎」奥「ナア行き升せう」
 ト、兩人向ふへ這入る清五郎門口に綾子を立聞き居て門口を明け向ふを見て」喜「今綾子と
 聞いて居れば榮五郎りがあの番頭と何かひろく叫さしは又何ぞの工み事はから柏木様へ
 往つて綾子によつてはあいつら二人急度たしなれやアならねへわへ」○「エ、ヤ一走り」ト
 羽織を着るのが木の頭」喜「行かざアなるまい」ト、尻からげする此挨拶賑やかなる囃物に
 拍子舞

大 詰 大森女房お倉心経病の橋

役 名

- 一大 工 榮五郎 一娘 お夏
- 一大 森 甚兵衛 一番頭 喜助
- 一水 谷 萬兵衛 一柏木 宗三郎
- 一女 房 お倉 一大工 棟梁 清五郎

本舞臺平舞臺裏附押入風置置物と置き上下障子床体上手の障子を開放し内に紋帳をのりあ

「此内にお倉判人の控らへにて住居都て大森甚兵衛奥敷の体合方にて毒明く、」
 「ト出て来り悶絶する下手家体より甚兵衛出て来り」
 「甚ヤアお倉こんな所で何として居るのじや○又氣を取失ふたのか」
 「ト有合ふ藥を吞まし」
 「五」お倉ヤア「ト介抱する」
 「六」お前は甚兵衛さん 甚氣が附いたかヤレレ／＼嬉しや 甚そんなら私は又氣を失ふたのかい
 「ト今迄敷屋の内に寐て居たればおの人の夢ばかり見ても目と覺したれば日暮前又甚兵衛さんに苦しめられる時刻が来たか情ないと思途来て煙が差込み私しや死んで居たわいなア 甚さうであつたかヤア／＼氣を丈夫に持つてゆつくりと養生をするがよい 甚私一人の愁心からお前に述苦勞をかけ夜な／＼死靈の其爲めに惱まざるゝも心からと諦めては居るものゝ斯う苦しめられては所詮命も 甚そんな弱氣を出してはせうもあらん又よいお醫者様を頼んで 甚何のお醫者の藥で直らう現在毎夜甚兵衛さんが私の咽を押へてはおのれよりも夫齋聯合此甚兵衛の金を取り殺した恨み思ひ知れとて私を惱ます其苦しき甚そりやさうありさうなもの夫じやに依てあの時にわしがあれ程止るも聞かず甚イヤ 甚夫は云ても返らぬ事是も元はあの金に恨みがかりつて居る事故お金を早うお寺へ納り施願見でも仕て上げたら甚兵衛さんも成佛を仕て下さんすであらうと思へばせめて五十圓でもお寺へ納りて甚勿体ない五十圓とお寺へ納りたどて甚そんなら私が取殺されても大事

ないかいなア 甚そんな事があるものか 甚夫はお前の不人情不便と思ふ心があれば假令家は仕舞ふても○アイヤ、、 甚又差込んだか「ト傍へ寄るを」 甚イヤ持ふておくれでない死靈の爲りに取殺されるより癪で死んだが増しじやわいなア 甚そんな事といふてはせうもならぬ其體に氣にかゝるならせうなとせうわい 甚無しうムんすそんなら私は落附くまで横になつて居る程にお前はせうぞ其金を 甚よしじや氣を丈夫に持つて養生をしてくれ 甚ア、情ない事じやなア「ト敷帳の内へ進入りかけ」 甚アレエ、」
 「トこぢらへ来るせう／＼に成り上手の家体に焼酎火燃へあり」
 「甚さうしたのじや 甚アレ甚兵衛さんが甚ユ、」
 「ト衆五郎甚兵衛の姿といふ心にて出て来る」
 「甚来たよ／＼アレエ、」
 「ト倒れる甚兵衛有りして悶絶する衆五郎かつらを取り」
 「衆五郎お倉起きないか野郎は氣を失つて居る様子だ 甚氣の弱い男だからねへ 甚然しお倉餘ッ程おれへ神經病は味りへものだな 甚アレヤそんな冗談所じやないよ金を持つて是からお前と迷亡しやうか 甚さう仕儀有金は何所に仕舞つてあるのだ 甚此軍筒の中にあるはね」
 「トソソソと持つて来り」
 「甚其人の腰にあるだらうよ」
 「ト衆五郎は甚兵衛の腰にさげた腰を取る喜助出て来り 喜助「さうじや衆五郎太鼓は味からうがな 甚そんならあなたは 甚喜助喜助といふ者じやが 甚けふの贈物方に頼んだのだ 甚中々味いお手紙だねへ」
 「ト衆五郎錠と明けける甚兵衛心附

さ此体を見て下手にある刀箱の刀を取り出しぬけに衆五郎の後ろより切附けるお金こちら
 と向ふ所へ又切附ける喜助は悔りして悶絶する萬兵衛提灯を持ち出て来り 万兵衛「コトヤ
 萬兵衛さんにはわらい事を仕て下さつたなア 吾ヤア萬兵衛さんの幽霊じや ア、わしは幽
 霊じやない生た水谷萬兵衛じや 吾夫でも幸福で現在川へ ア、ヤ、さう思ふは尤じやが何
 の幽霊が提灯を持つて迷ふて出やうか又此通り足も二本あるわいな 吾成性幽霊ではない
 がさうしてこなたが此様に ア、生て居るには様子もあれど今手にかけては正しく仲 吾ヤ
 アお前はどつさん 吾、そんならわたたと此男と ア、ヤア聞いて下され〇あの晩幸福から身
 を投げた所通りかゝつた舟の客は心齋橋筋の柏木宗三郎様志改草よりのお歸りにて助け上
 げられお内にて身の養生を仕て居た所最前宗三郎様が仲の親方清五郎さんの所へ行きお歸
 りになつて様子を聞けば此仲りが悪事の段々其上此家の内義と姦通直ぐに愛へ駆附けて来
 て見れば此場の様子思へば悴故に拵らへた金を取られ取つた人は悴と不義して其事主に悴
 りが殺されやうと仕た事は皆廻る因果といふもの〇ヤイ衆五郎天の將を思ひ知つたか 吾
 ア、苦しいくわいなア〇萬兵衛さんも萬兵衛さんもさうぞ敷して下さんせ 衆二人共に
 此體に只一太刀で急所を切られ苦しむも 吾是も悪事の 四人皆報ひ 吾今こそ懺悔の語
 しとは聞いて下さんせ〇萬兵衛さんの金を取りお前を殺しにやつたのも衆五郎さんによげ

たいはつかり夫故死霊の祟りを見せたも百兩の金を寺へ上げさせ其金を持ち衆五郎さんと
 愛を立退く私しの工み萬兵衛さんが長らへて今夜逢はうとは知らなんだわいなア 衆今目
 のさめた私等二人とても命は助り升せぬ 四人是にて敷して下さり升せ「ト宗三郎清五郎
 お夏出で来り」衆三郎様様子は一間で聞き升た二人は懺悔で罪も亡び 衆五郎萬兵衛さんは
 柏木の若旦那の御介抱にて 吾私造も身受けされ此様を身になつたも アみんな柏木様の
 慈悲善根 吾、うんなら此子の身受迄 衆有難うムり升る 衆甚お情けに引替へて 吾情い
 は番頭「ト喜助氣が附さ 吾」コトヤモウさうも 衆」エ、動さやアがるな「ト下にすへるの
 ●が木の頭」衆」ヤア皆歸り升せう「ト此見得宜しく打出し

脚本 邯鄲回轉聞白浪

場 割

大 序

米田傳右衛門内の場
毘沙門長隠居の場

二 幕 目

梅屋敷雨合の場

三 幕 目

備後町刀屋の場

四 幕 目

關原勢州屋の場

五 幕 目

岸和田沖漁船の場
濱寺松並木の場

六 幕 目

住吉橋梅題家の場
赤手拭殺しの場

大 結

監 川 涼 所の 場
大 川 涼 所の 場

せへ」と言ひや私も針の糸をさうところに加すがあるかね晩には蛇度お前の部屋へ九
 蛇と附けに来てくれるか」と言ひ蛇度行くわいなア 九「彼はいふ内モウ日暮だ大方旦那も出
 掛けるだらう」と言ひ陣りのない内私は一寸赤松へ 九「夫じやア返事待つて居るよ」と言
 ひそりや吞込んで居るわいなア「ト門へ出る此時奥にて」下女を罵「コレ九太平殿旦那様がお
 出でに成るぞへ 九「そんならおめへはらつとも早く」言ひ「コレ一走り往て来やうか」「ト向
 ふへ道入る奥より米田傳右衛門出る跡より梅次屋敷女房の指へ下女お露附き出て来り」
 傳右衛門「コレヤ九太平提灯の用意を致して参れ 九「ハイ其支度も致し置き升てムリ升る傳
 右衛門を待たず共休んだがよいぞよ 傳右衛門「ハイ有難うはムリ升れお歸りのない内は心掛か
 りで眠られも致し升せねばお歸りをお待ち申すでムリ升せう 傳右衛門「夫は勝手に致すがよい併
 し戸締りと火の元に心を附けよ 傳右衛門「長り升てムリ升る 九「イヤモウ其戸締りが第一でムリ
 升る油断をば致し升ると兎角盗人めが當りを附けに参り升わい 傳右衛門「其方も身共を送り歸り
 なば氣を附けて休んでくりやれ 九「心得升てムリ升る 傳右衛門「然らば往て参るぞ 傳右衛門「成丈お早
 う 下女罵「お歸りを 傳右衛門「イヤイヤどうぞ早うは戻れぬわい 傳右衛門「さうやら空も曇りし様子御
 用心にお申すは 傳右衛門「イヤイヤ傘にも及ぶまいわい 九「濡れるはお留守に 傳右衛門を申すぞ 九

イエ何お天氣は大丈夫でムリ升る「ト九太平傳右衛門門口へ出る」傳右衛門「左様なれば御機嫌
 宜しう 傳右衛門「よう留守せいよ」「ト傳右衛門先に九太平附いて向ふへ道入る」傳右衛門「コレ
 や今宵旦那様のお歸りは遅うなる程にうなは早う部屋へ往て休んだがよいわいのう
 傳右衛門「有難うムリ升る左様なれば今晚はお先へ御免を蒙り升る 傳右衛門「サア早く往たがよいわ
 いのう 傳右衛門「併しお明しを持つて参り升せう」「ト奥へ道入る」傳右衛門「四五日跡から折折り算て
 待ちし今宵さうで旦那のお歸りは早うて九ツ遅くば八ツ今夜は日頃の思ひの丈を」「ト此時
 奥よりお露行燈を提げ出て来り 傳右衛門「ハイお明り」「ト行燈を置く」傳右衛門「エ、モ悔り」「ト立上るを
 道具替りの知らせ 傳右衛門「さるわいのう」「ト宜しくこなし是を明の鏡合方にて此道具返し
 遺物中高の二重上手障子家体大和葺の本庇本棧附二重見附上手床の間透棚是に續き張交せ
 の襖此二重前側へ障子を建て下手落開障へ寄せて建仁寺垣石燈籠舞臺前秋草の臥紅葉の立
 木同く釣枝例の所楽門都て離座敷の模様時の鏡にて道具納る」「ト向ふよりおとせ出て来り
 と「先づ今宵の首尾は上々吉あのお赤松から出させてやつた口留金金が先五両〇、懐より紙
 包の金を出し」と言ひ「是から直ぐに御新造にも九太平の事を尾に附け仰山に吹いて十五兩其
 内五兩を九太平に渡して跡はこつらの役徳金〇ハツクシヨ〇エ、九太平めが噂をして居る
 と見ゆるわい」「ト舞臺へ来り」と言ひ「モ御新造さん賑か御遠でムリ升たらう赤松さんにお

目に掛かりか文をよ渡し申したが初夜を相圖に鹿口から忍んでお出で成され升替でムリ升
 わいなア○夫に附き升て九太平りが此事を嘆き附け升てな○ハア悔り成さる事はムリ升せ
 れるこれは私がよい機に計らひ升て他言は決してさせ升せぬが何程か口留金と○ハイ〜そ
 りや十両やれば深山でムリ升マア〜夫は後程でようムリ升るあなた早うか支度を取成升
 せモウ程なう彼の方がお出で成さるでムリ升せう○ハイ〜左様なれば左様なれば御免
 遣ばし升せ「ト下手へ這入る向ムより赤松重太郎口紅の文を讀みながら出て来り」重太郎
 思ひ出る箱の菊も折々はうつらひ果てし秋の夜の月○其月影は消けれせ忍ぶ我が身は戀の
 闇道に缺けたる事乍思ひ切られぬ互の懸縁今宵はあるじが園藪の留守障りなき内少しも早
 う彼の人に「ト舞臺へ来り栗の外よて小石を拾ひ内へ投げる是にて障子を引抜く内に愛に
 布團を敷き六枚屏風を建て能所に朱塗の短葉黒塗の膳の上に小鉢燗徳利盃洗杯と置き夫婦
 入りの朱塗紋附の笥箱ある事梅次手置酒を持ち平舞臺へ下りて来り」梅次「あなたは赤松
 重太郎様 舞梅次殿か 舞アモン「ト栗を明け重太郎の手を取り内へ入れ二重へ上り布團
 の上に住む 舞ようアアお越してムリ升たなア 舞主あるあなたと契りと結び道ならぬ事
 を知りながらおとせが持参の玉簪と見ると心もそいふにて怖さも忘れてうか〜と愛恋忍
 んで来ましたわいのう 舞其こはいのが互の樂みさうどあなたも打解けて今宵はしつぱり

積る咄しと 舞わしも色々咄しもあれささうやら胸がささ〜して 舞はんよあなたも心
 の弱い若しも人目に掛かつた時は 舞互に免れぬ密夫の料 舞あなた故なら命でも 舞う
 なたは假令命を捨てても 舞締められぬ此身の因果 舞さう度胸が据はつたれば 舞梅
 を喚はい皿迄と 舞身共もすつと心を据へてさふとも被成組の 舞鯉にはあらで 舞二人
 が懸中 舞其心ならはんに嬉しい 舞わしも今宵は嬉しけれども未だに朋氣が止まらぬわ
 いの 舞夫には丁度此お酒で 舞そんなら胸を落附け升せうか 舞さうど過として下さん
 せいなア○ト盃をさし酌をし乍ら 舞あなたは震へてお氣の弱いまア落附いて下さんせい
 なア「ト重太郎笥箱を取り上げ」舞揚羽の縁に抱拍一ッは健そまたの定紋 舞時の一ッ
 は御存じムんせぬか 舞大方あなたが大事にする主の紋で有らうぞいの 舞エ、モ情らし
 い此抱拍はあなたの御定紋ではムんせぬかいなア 舞そんならあなたと此わしと 舞誓ひ
 離れぬ揚羽の縁 舞しつぱり二人りが抱拍 舞心の内は夫婦の笥箱 舞二せんの笥の数は
 四ッ○若しや是が願はれて鞍が四ッに成るといふ知らせではあるまいか 舞アレマアさん
 ち事とは○ア、情なく 舞度胸定りにモ一ッ是で「ト湯呑を差出す」舞私も半分すけ
 升わいなア「ト湯呑の酒を半分宛呑み重太郎梅次の手を取る此時風の音に成り短葉の灯消
 ゆる 舞杯を風りが折よく灯と 舞闇は懸路の 舞エ 舞中立じやわいなア「ト屏風を引

き廻す下手より九太平箱提灯を持ち出て来り」九太平「旦那のお歸り」ト兩人屏風を引除け
 逃げやうとする奥より傳右衛門刀を抜き出て」傳右衛門「不義者見附けた 四人「やあなは」
 ト逃げかゝる梅次のだぶさを執らへ引附ける重太郎は平舞臺へ逃げて行くを九太平襟巻を
 取つて引附る 傳「覺期致せ」ト切つてかゝるを梅次白紙を取つて打附ける是を一丈立廻つ
 て梅次の肩先を切られて倒れる重太郎は九太平と立廻りあつて押へ附けらる大どろくろに
 成り二重の前面へ伊豫兼を下ろす平舞臺の兩人は大せりにて下げる伊豫兼の内より心とい
 ふ字を空へ引き上る知らせに附き此道具居所返し

造物上手の障子家体反古張と替り正面伊豫兼を切つて落す見附上手唐紙を建てし押入真中
 納戸口下鼠壁の世話家体と替り舞臺前の秋草はうしろへせりさげ下手の建仁寺垣黒餅と替
 り飛戸を引て例の所門口を出し二重に二枚折の屏風を建廻し此内に梅次並縁をして居る心
 にて枕元に火鉢烟草箱朱羅字の長烟管杯置きあり都て長町見沙門裏梅次隠家の模様大どろ
 くにて道具納る」ト屏風の外へ差金の蝶々二羽出て飛ぶ事あつて屏風を明け内に梅路結
 び髪廣袖の拵へ細帯を巻きし形りにて起さ上り」梅路「やつぱり今のは夢であつたか〇いせ
 んと思ふてふさぐ様だが今見た夢は正夢にて然も蹟岐の高松で米田傳右衛門といふ立派な
 亭主を持ちながら醫者の養生の赤松をふつと見初めた所から内へ引入れ居た其時亭主の傳

右衛門に見附けられて二人とも既に四ツにされる所を命からしく助かつたが相手の赤松は
 跡で切られて死んだものか夫成りけりて今に出達はす〇夫からといふものはわつちこつち
 とさまよつて悪事斗り仕散らした此大坂へ流れ来て然も船で馴染に成つた蹟岐屋へ先つみ
 みこしを落附けて芝居見物の其時に宿へ残したうちがへとさらつてどうく随徳寺跡で中
 とば改めたら正金三百六十兩味い仕事を跡を跡まし所と替へて一様ざと伊勢路へかゝつた
 其時にわちさが悪事を嗅出した濱留といふ野郎は此大坂で顔を買る蛇が龜といふ奴の子分
 と聞き悪い奴に出合ふたと思つて見たが氣をうへて其濱留を手なづけて今ではおれの亭主
 にして再び元の大坂へ歸つて来たが日蔭の身の上下トへも出られず亭主野郎に様がせて内
 に斯うして遊んで居るが今切られたと見た夢は此身に金が遣入るといふいゝ辻占で濱留が
 勝つて戻つてくれればよいが」ト向ふより濱留遊樂者の形跡より鬼の政出で来り」鬼の政
 「タイ〜濱留の兄イ〜」おれを呼ぶのは誰だ 政「タイ兄イ鬼の政だ 政「タ、政か久しく逢
 はねへがいゝ事でもあるか 政「イヤモ相變らず火の車と」さうして手りへ何處へ行くのだ
 政「おれへの内へ行かうと思つて出て来たがさうして姉御は内にかへ」手前もよつばさ分
 らねへじやねへかおの梅路の此土地でうつかり外へ出られねへ體だから何時でも内に居る
 のよ 政「遠へねへ道頓堀の蹟岐屋の一件から姉御も世間が狭く成つたの 政「何しろ久しぶ

りだ思も角も一所に來よつしかしわでも馳走と仕儀よ 貴さのつゝ有難い事なれども
 「ヤア來よつし」ト舞臺へ來り門口を明け「貴今歸つたせ 貴ヤアも歸りかけよは大層車
 かつたがせうだへ 貴せうのかうのと此頃の様な間のわるい事はあもやしなへ 貴何も
 んなに悔し事が有るものかへ勝つも負けるも時の運ちいさな勝負で苦勞として結るものか
 ねちつと位とばかりがさめせへすりやア私が仕事として上るから何も案じる事はないうわ
 貴」そりやアおれたつて小キな事にいづ迄引ッ掛かつて居られるものか事に依つたら大御
 の方へ果を替へて一働とする心よ 貴「タイ留さん表に誰か居るではないか 貴ヤ、よつば
 りと忘れて居た○タイ政早く内へ進入らねへか 貴「姉御御免なせへ」ト内へ進入る「貴
 ナ、兎の政さんか私しやア突留ではあいかと實はさよつとしたのヤ 貴「何の姉御にも似合
 はねへ氣が廻い○併しいつもお速者でも出目度うムリ升る 貴へ、大分けふは眞面目だね
 貴時に政が何か手めへに用があるといふて居るせ 貴さうして私に用といふはへ 貴「へい
 外の事じやムリやアムリやせぬがいつぞやお前がくれた此うちがへ○ト腰よりうちがへを
 出して 貴私もうつかり是をへて親分の所へ往つた所が一寸見せるといふから見せた所が
 此入山形に長の字の附いて居るは正しく道頓堀の階敷屋で客が取られた金の胸巻何處から
 持つて來たといはれた故姉御から買つた」と口走つた所からそれじやア直ぐに探索せると

いはれてわしも跡で後悔○モレ姉御そんな覺れがあるならうつかりしては居られやせぬぞ
 貴「梅路喰ひ込まねへ用心をするのが肝踏だせ 貴お前もよつば迄甘口な用心するのはおそ
 きさだわね 貴「エ、落附くにも程があるは何で是が通ささだ 貴用心所か目の先へモウツ
 きが廻つて居るわね 貴「何目の先へつゝが廻つて居るとは何處に 貴「鼻の先の兎の政ヤ 貴
 「モレヤ姉御何をいふのだおれは態々深切に知らせに來たのだ 貴「其深切なら僕の其捕獲は
 何にするのだ 貴「モ、 貴「留さん捕斬はならねへよ 貴「そんならこいつが 貴さう知られ
 たら上意だ」ト懐ろより十字を出して打つてかゝる「貴「生利な事をしやアがるな」ト打
 つてかゝるを突廻す是にてよろ／＼として梅路の傍へ來るを梅路十字を引つたくる政五郎
 尖とと寄るを十字にて打つ是にて政五郎は立身に苦し「貴「こいつ思は止つたか 貴「此處
 處に氣遣ひはなすがお前は表へ心を附けて」ト懐留外を伺ひ見て「貴「外には誰も 貴「居
 ないかへ 貴「成程こいつが廻し者とは 貴「油斷のならない」ト梅路は政五郎の足とかく懐
 留は門口をへる双方見合あつて木の根「四人」時節だな」ト此仕組早りたる合方寺越の越
 りにて宜しく拍子落

演劇 邯鄲回轉閨白浪 前編終
 脚本 邯鄲回轉閨白浪 前編終

明治廿九年三月廿一日印刷
明治廿九年三月廿七日發行

(定價金八錢)

版權及發行
所有權

不許謄寫

著作者

勝

彥兵衛

東京市淺草區七軒町二番地
別號 勝 修屋

版權所有者
兼發行者

新實八郎兵衛

京都市上京區藤屋町上長者町上
南儀町四番戶

印刷者

前田 菊松

大阪市東區內本町橋詰町六十八番屋敷
活版製造所廣合安會社

